

日本地球化学会ニュース

No. 148

1997. 1. 31

1997年度日本地球化学会年会のお知らせ(I)

本年度の年会は、9月17日～19日に東京都立大学の教養部を会場にして開かれます。詳細は次号に掲載しますが、ここに大要をお知らせします。

日時：9月17日(水)～19日(金)

会場：東京都立大学教養部(東京都八王子市南大沢)

総会と懇親会は18日(木)に開かれます。

課題講演：4つの課題講演を予定しています。内容およびコンピーナーは次の通りです。

(1) 海洋地球化学の最前線

最近の海洋の化学的研究は、クリーン技術の進歩や同位体の精密測定法の開発等にもなって著しい進展を遂げている。また、地球温暖化をはじめとする地球環境問題の深刻化にもなって、海洋の果たす役割も一段とまじり、その物質循環ダイナミックスにも注目が集まっている。従って、本課題講演では、現在進行中あるいは近未来に予想される最先端の海洋地球化学の研究を集めて紹介するとともに、今後の研究に役立てる。

コンピーナー：

野崎義行(東京大学海洋研究所)

Tel: 03-5351-6451; Fax: 03-5351-6452

E-mail: nozaki@ori.u-tokyo.ac.jp

加藤義久(東海大学海洋学部)

Tel: 0543-34-0411; Fax: 0543-34-0937

E-mail: ykato@simizugw.cc.u-tokai.ac.jp

(2) 21世紀の宇宙化学を目指して

過去20年間、我々が隕石を中心とする研究から得た情報は、それまでの宇宙観を変えるに十分なものがあつた。21世紀の宇宙化学はこれらの成果を踏まえてさらなる発展が見込まれる。本課題講演は、これまでの宇宙化学を振り返って何が未解決な問題として残されているかを整理し、さらに新しい時代の宇宙化学で

何が明らかにされうるのかを模索する場としたい。

コンピーナー：

中村昇(神戸大学理学部)

Tel: 078-803-0576; Fax: 078-803-0490

E-mail: nakamura@shidahara1.earth.s.kobe-u.ac.jp

海老原充(東京都立大学理学部)

Tel: 0426-77-2553; Fax: 0426-77-2525

E-mail: ebihara-mitsuru@c.metro-u.ac.jp

(3) 質量分析技術の新展開

質量分析計は地球化学の殆どあらゆる分野で欠くことのできない分析装置として用いられている。エレクトロニクスの進歩とあいまって質量分析計の性能は近年飛躍的に向上した。現在、最新・大型の質量分析計が各地で稼働中ないし建設中である。例えば、最新の加速器質量分析装置(AMS)が東大をはじめ、名大、国立環境研で、二次イオン質量分析計(SIMS)が東大、地質調査所、広島大学、岡山大学地球内部センターで稼働し始めた。また、東工大でも大型のSIMSを導入する予定である。本課題講演はこのような状況を受けて、関連する最新の研究成果を発表し、地球化学へおよぼす効果について討論する場を提供することを目的とする。

コンピーナー：

今村峯雄(国立歴史民俗博物館情報資料研究部)

Tel: 043-486-4226; Fax: 043-486-4299

E-mail: imamura@rekihaku.ac.jp

杉浦直治(東京大学大学院理学系研究科地球惑星物理)

Tel: 03-3812-2111 内線4307

Fax: 03-3818-3247

E-mail: sugiura@geoph.s.u-tokyo.ac.jp

(4) 地球環境変動史の解明に向けて

地球は進化の過程で様々な環境変化を経験してきた。近年、これら過去の環境変化の実態と変動を支配する諸因子を解析して、将来予測に役立たせようとする研究が行われ、めざましい成果を上げつつある。国際的にはIGBP/PAGES (Past Global Change) が、また文部省重点領域研究「全地球史解説」が進行している。課題講演では、近過去のみならず古い時代の環境復元への新手法、問題点、研究成果など交流し、今後の研究方向を探る。

コンピーナー:

福沢仁之 (東京都立大学理学部)

Tel: 0426-77-2605; FAX: 0426-77-2589

E-mail: chnos@geog.metro-u.ac.jp

奈良岡浩 (東京都立大学理学部)

Tel: 0426-77-2529; FAX: 0426-77-2525

E-mail: naraoka-hiroshi@c.metro-u.ac.jp

講演申込締切: 6月30日 (月) 17:00

講演要旨締切: 7月18日 (金)

参加申込締切: 8月15日 (金) 17:00

講演申込および参加申込は、必要事項が記載してあればE-mailでも受け付けます。アドレス等の詳細については次号のニュースを参照して下さい。

宿泊: 宿泊斡旋に関しては現在生協と交渉中です。

年会申込・連絡先:

〒192-03 東京都八王子市南大沢1-1

東京都立大学理学部化学科

1997年度日本地球化学学会年会準備委員会

石渡良志

Tel: 0426-77-2532; Fax: 0426-77-2525

E-mail: rish@comp.metro-u.ac.jp

または 海老原充

Tel: 0426-77-2553; Fax: 0426-77-2525

E-mail: ebihara-mitsuru@c.metro-u.ac.jp

1997年合同学会のお知らせ

地球惑星科学関連学会が3月25日 (火) から28日 (金) まで名古屋大学で開かれます。今回はポスター発表を重点的に取上げることとし、場所を体育館に集中し、より多くのディスカッションが得られるよう企

画しました。固有セッションおよび共通セッション (放射年代測定の新技術) のプログラムをお知らせいたします。その他のプログラムや会場に関する詳細は連絡会ニュースをご覧ください。

固有セッション

地球化学 (ポスター発表のみ)

3月26日 16:30~19:00 ポスター会場 (体育館)
ポスターは当日 (3月26日) ポスター会場の指定場所に掲示してください。(掲示は一日中可能) 討論時間は16時30分から19時まで (コア時間16時45分から17時45分) で、飲み物が用意されます。

ポスター発表1分間プレビュー (3月26日 G会場)
地球化学固有セッションで発表されるポスターは同じ3月26日G会場で下記のパログラムに従い、1枚のOHPと1分の持ち時間でプレビューを行います。

(座長: 山本鋼志・上岡 晃)

G21-P05S (12:00) ○青木 浩・米延仁志・吉田尚弘・中村俊夫・和田秀樹
樹木年輪内に見られる炭素同位体組成の季節変動を決定する環境因子の解明

G21-P06S (12:01) 古宮正利
北海道西方沖日本海堆積物から検出されたアルケノンの組成と古環境復元への適用

G21-P07S (12:02) ○山本正伸・山室真澄・茅根創
サンゴ礁堆積物の有機物・脂質組成

G21-P08S (12:03) ○田中 剛・川邊岩夫・山本鋼志・岩森 光・平原靖大・三村耕一・浅原良浩・南 雅代・伊藤貴盛・ドラグシャヌ・クリスチャン・三浦典子・青木 浩・太田充恒・戸上 薫・鳥海貴弘・松村陽子・榊原智康・谷水雅治・水谷嘉一・宮永直澄・村山正樹・高柳幸央
地球化学図による愛知県中央部地表構成元素の起源と地圏環境評価の研究

G21-P09S (12:04) ○山本順司・佐野有司・渡邊・蒲生俊敬

ほたる石の流体包有物中の炭素の起源

G21-P10S (12:05) ○西村理恵子・角皆 潤・石橋純一郎・脇田 宏・野尻幸宏
カルデラ湖における溶存メタンの炭素同位体

比の測定

G21-P11S (12:06) ○高橋弘樹・中井俊一・脇田宏

新潟・秋田の天然ガス中の希ガス存在度と同位体組成

G21-P12S (12:07) ○福永一哉・吉野隆之・斎藤和男・長尾敬介

グリーンランドに産する変成岩中の異常なAr, Ne

G21-P13S (12:08) ○津旨大輔・下島公紀・水鳥雅文

熱水ブルーム挙動の物理モデル構築へのアプローチ

G21-P14S (12:09) ○下島公紀・蒲生俊敬・岡村慶・石橋純一郎

マヌス海盆の熱水中の微量元素

G21-P15S (12:10) ○矢吹貞代・岡田昭彦・樊 自立・常 青

中国、新疆ウイグル自治区の砂漠域に自生する胡楊の樹液が固化したときに生成する生物起源の塩類鉱物

G21-P16S (12:11) ○本多将俊・清水 洋・高橋和也

タクラマカン砂漠の風成堆積物の流動に関する地球化学的アプローチ

G21-P17S (12:12) ○国丸貴紀・清水 洋・高橋和也・矢吹貞代

九州における秩父帯南帯のチャートに見られる地球化学的特徴の時代変化

G21-P18S (12:13) 上岡 晃
質量分析計によるセリウム同位体比の精密測定—グアノ質リン灰土への適用

G21-P19S (12:14) ○沢田順弘・石川 玲・高須晃・加賀美寛雄

西南日本外帯中新生Sタイプ花崗岩の成因—愛媛県高月山花崗閃緑岩体を例にして

G21-P20S (12:15) ○ドラグシャヌ・クリスチャン・田中 剛

The Precambrian amphibolites from Southern Carpatians, Romania, Island arc magma origin? Constraints from the REE modeling and Sm-Nd isotopes

G21-P21S (12:16) ○田中 剛・富樫茂子・上岡晃・天川裕史・加賀美寛雄・濱本拓志・柚原

雅樹・折橋裕二・米田成一・浅原良浩・谷水雅治・ドラグシャヌ・クリスチャン・清水洋・国丸貴紀・高橋和也・柳 哮
同位体分析精度の向上を目的とするネオジム同位体標準物質 JNdi-1の調製

共通セッション

放射年代測定の新技術: それによる地球惑星・地球環境科学の急展開と問題点

3月26日 (G会場)

コンピーナー: 中村俊夫, 宇都浩三, 日高 洋, 平田岳史, 鈴木和博, 田中 剛

一午前—

(座長: 中村俊夫・松本哲一)

(9:00~) 中村俊夫: 緒言: 最近の年代測定法の発展と問題点—このセッションのめざすところ

G21-01 (9:05~) ○永井尚生・内田雅晴・村山雅史・小林紘一: 大気中における¹⁰Beの分布

G21-02 (9:18~) ○村山雅史・永井尚生・小林紘一・平 朝彦

放射性同位体核種¹⁰Beと古環境科学への応用

G21-03 (9:31~) ○青木賢人・今村峰雄・永井尚生

¹⁰Beを用いた表面照射年代法によるネパールヒマラヤクンブ氷河における氷河前進期の推定

G21-04 (9:44~) ○中村俊夫・池田晃子・太田友子

加速器質量分析法による¹⁴C年代測定の最近の進歩—高感度・高精度・高正確度の年代測定法—

G21-05 (9:57~) ○横山祐典・T. Esat・K. lambeck
Radiocarbon and uranium series ages from OIS and coral samples obtained by AMS and TIMS for calibration ¹⁴Cages

G21-06 (10:10~) 氏家 宏

後氷期海底コア研究におけるAMS¹⁴C年代測定の重要性—沖縄トラフの例

G21-07 (10:23~) ○奥野 充・中村俊夫
加速器質量分析法による古土壌の¹⁴C年代測定による噴火史の編年

- (10:36～) 休憩
- G21-08 (10:50～) ○檀原 徹・岩野英樹
フィッション・トラック法による若いジルコン年代測定
- G21-09 (11:03～) 豊田 新
ESR年代測定の問題点と課題および地球環境科学への応用の可能性—特に石英について
- G21-10 (11:16～) 松本哲一
第四期後期広域テフラのK-Ar年代測定
- G21-11 (11:29～) ○板谷徹丸・今岡照喜
輝石のK-Ar年代測定
- G21-12 (11:42～) ○兵藤博信・松田高明・板谷徹丸
岡山理大におけるレーザー⁴⁰Ar/³⁹Ar年代測定システム
- ポスター発表1分間プレビュー (この会場でOHP1枚と1分間の持ち時間で自分のポスターの宣伝をしてください)
- G21-P01S (11:55) ○森 聡・長谷部徳子・田上高広・松井良一
ボーリングコアを用いたジルコン中のFTのアニーリング特性
- G21-P02S (11:56) ○福谷亜矢子・長谷部徳子・周藤正史・田上高広
東伊豆単成火山岩類のK-Ar年代測定
- G21-P03S (11:57) 平田由紀子
50万年前より若い火山岩におけるK-Ar年代測定で大気混入率を下げる試み
- G21-P04S (11:58) ○角井朝昭・内海 茂
K-Ar法による熊野酸性岩類の年代の再検討
- G21-P05S以降は地球化学固有セッション／ポスター発表のプレビューが続きます。
- ポスターは当日(3月26日)ポスター会場の指定場所に掲示してください。
- 討論時間は16時30分から19時まで(コア時間16時45分から17時45分まで)で、飲み物が用意されます。
- 午後—
(座長:宇都浩三, 平田岳史)
- G22-01 (13:15～) ○宇都浩三・石塚 治
レーザー加熱⁴⁰Ar/³⁹Ar年代測定法による火山岩の精密年代測定:現状と展望

- G22-02 (13:28～) ○石塚 治・宇都浩三・湯浅真人・A. G. Hochstaedter
海底火山岩の年代測定—レーザー加熱⁴⁰Ar/³⁹Ar年代測定法適用の試み—
- G22-03 (13:41～) ○岩田尚能・兼岡一郎
Period of volcanic activity in the Deccan Traps -estimation by the ⁴⁰Ar-³⁹Ar dating method
- G22-04 (13:54～) ○瀧上 豊・坂井治孝
ヒマラヤの岩石の⁴⁰Ar-³⁹Ar年代測定とその問題点
- G22-05 (14:07～) ○鈴木和博・足立 守
CHIME年代による氷上花崗岩の再検討
- G22-06 (14:20～) ○足立 守・鈴木和博・Deung-Lyong Cho・Uee-Chan Chwae
韓半島, 京畿地塊および嶺南地塊の変成岩と花崗岩のCHIMEモナザイト・アラナイト年代
- G22-07 (14:33～) ○川井奈緒美・鈴木和博
舞鶴帯, 上部三疊系難波江層群砂岩中に含まれる碎屑性モナザイトのCHIME年代
- (14:46～) 休憩
- G22-08 (15:00～) 宮本知治
表面電離型質量分析計を用いたU-Pb年代測定
- G22-09 (15:13～) ○日高 洋・寺田健太郎・佐野有司
高感度・高分解能イオンマイクロプローブ(SHRIMP)によるU-Pb年代と宇宙・地球化学
- G22-10 (15:26～) 三澤啓司
U-Th-Pb同位体系をもちいた分化した隕石の年代学研究
- G22-11 (15:39～) 木多紀子
隕石リン酸塩のU-Pb年代学とSIMS分析の可能性
- G22-12 (15:52～) 平田岳史
マルチコレクターICP質量分析法を用いた高精度局所同位体分析法の開発とその年代学への応用
- (16:05～) 総合討論
21世紀に実現させたい年代測定の夢:手法開発者から／ユーザーから

博士論文の抄録の募集について

日本地球化学会会員(近日入会予定を含む)の博士論文の抄録を新『地球化学』誌に掲載します。博士論文の内容は地球化学および関連する分野とします。今回は1994年以降に提出した論文の抄録を募集します。

博士論文の題目(和文・英文), 博士論文提出先(和文・英文)及び提出年度, 所属(和文・英文), 氏名(和文・英文), 博士論文の内容を電子メール, またはテキストファイル入りのフロッピーディスクでお送り下さい。原稿は論文の内容を2000字以内厳守(題目, 提出先, 氏名を除く)でお願いします。刷り上がり1ページになります。図または表を掲載する場合, カメラレディーの原稿を郵送下さい。その際, 図, 表一枚につき, 500字としてカウントして下さい。

なお, 連絡先も忘れずにお知らせ下さい。

原稿送り先
地球化学編集委員長
赤木右 (akagi@cc.tuat.ac.jp)
(フロッピーディスク, 図表の原稿は下記にお送り下さい。)
〒183 東京都府中市幸町3-5-8
東京農工大学農学部環境資源科学科
赤木右

第16期第8回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事録

日時: 1996年9月26日(木) 13:30~16:10
場所: 日本学術会議第4部会議室(6F)
出席者: 石渡良志委員長, 青木謙一郎, 秋元肇, 日下部実, 田中剛, 中澤高清, 野津憲治, 半田暢彦, 松田准一

- 報告事項
 - 学術会議関係(石渡委員長より)
「研究連絡委員会の見直しについて(検討依頼)」についての見解を, 第4部長あてに7月26日付けで, 青木会員, 石渡委員長の連名で提出した。
 - 日本地球化学会(石渡委員長より)
1996年度年会在, 8月27~31日に北海道大学で開催された。
 - 地球科学総合研連(野津委員より)

9月24日に第7回委員会が開かれ, 地質科学関連学会連絡協議会の発足に向けての準備状況の説明があった。大学における地学教育をテーマにしたシンポジウムを計画している。

- IAGC総会(矢内委員の文書紹介)
8月にIAGC総会が北京で開かれ, 1996~2000年の役員が決まり, 日本からは, 酒井均山形大学前教授が前会長職として役員に入った。増田彰正電気通信大教授(研連元委員長)が「インガソン記念著名講演者」に選ばれ, 記念講演を行った。
- 審議事項
 - 前回議事録
議事録(案)を2ヶ所訂正の上, 承認した。
 - 地球化学・宇宙化学の将来計画について
委員長が検討資料として提出した「わが国における地球化学の推進について—骨子案」をもとに自由討議をおこない, 対外報告としてまとめることが了承された。当初, 人材の育成を重点にまとめる予定であったが, 研連の見直しともからんで, 地球化学の学問像や重要性も強調することとなった。また, 従来から作成している地球化学関連大学院調査資料も一緒にまとめることとなった。
 - シンポジウム後援
地下水技術協会主催シンポジウム(建設省後援)「地盤環境と気候変動(仮題)」を後援することを了承した。
 - 次回(第9回)委員会
平成8年12月12日(木) 13時30分からを予定することとした。

鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会(第16期・第6回)議事録

日時: 1996年10月1日(火) 16:00~17:00
場所: 日本学術会議第6部会議室
出席者: 井沢英二(委員長), 青木謙一郎(学術会議会員), 青木義和, 富樫茂子, 松枝大治, 渡辺洵

- 議事
- 承認事項
 - 第4回, 第5回議事録を承認した。

II. 報告事項

1. IGC (北京) 報告 (井沢)

- (1) IGC 会期中に行われた IACOD 総会で、会長：工 R. Plimer, 副会長：右原暖三、アジア地区評議員：井沢英二を選出した。任期は4年。次回(1998年)はオーストラリア、ブローケンヒルで開かれる予定。
- (2) IGC (北京) には102ヶ国から5,871名が参加した。日本403名、ロシア295名、アメリカ合衆国272名、ドイツ101名などであるが、ヨーロッパからの参加者は少なかった。また、全体の参加者のうち中国は60%を占めた。

2. 金属鉱業事業団と大学との共同事業について (井沢)

同事業団の調査部(調査費の一部提供)と新技術開発部(地下探査に関する研究)が大学との共同事業を企画中であり、資源地質学会が窓口になる予定。

III. 審議事項

1. 鉱物関連研連の将来について

- (1) 地球物理学研連の下に惑星科学専門委員会を設置したいという呼びかけがあり、鉱物学研連から1名出すことを了承した。
- (2) 研連の抜本的見直しが学術会議第1常置委員会で検討されており、第17期で見直し(案)を決定し、第18期から実施する予定で進行中である。鉱物学研連としては、地質科学分野の研連再編成(案)のうち、地質学研連・地質科学総合研連・鉱物学研連という従来通りの体制を維持できるよう要望しており、鉱床学専門委員会としてもこれを了承した。

2. 鉱床学関連学科現状調査について

- (1) キーワード体系図(案)を再検討した。
- (2) 鉱床学関連研究者・大学院生名簿に金属鉱業事業団を加えることにした。
- (3) 前期名簿の訂正依頼をキーワード体系図を添付して1996年末までに各大学・研究機関に発送し、1997年3月に名簿としてまとめ、4月頃完成させる予定。

3. その他

今回は12/6(金)13:30から開催する予定。

以上

1996年度第一回「鳥居基金」

助成実施報告書 (TE-07)

氏名：篠原宏志(地質調査所)

助成：国内研究集会

課題：火山性流体討論会

1996年7月9日～11日にかけて、茨城県水海道市の学童農園「あすなろの里」において、表記の討論会を開催した。

「火山性流体討論会」は、学生・若手の発表・質疑の鍛錬の場の提供し、徹底的に討論を行うこと、そして学問の内外での知己と見聞を得ることを目的としている。本討論会は元々は、東京工業大学旧松尾嶺土研究室のOBが中心となって始めた地球化学の若手の会が変遷したものであるが、次第に様々な出身の参加者が増え、十数年経た現在では直接の門下生以外の参加者が大多数を占める。今年は火山ガス・熱水・マグマなどを包括する名称として「火山性流体」を会の名称として掲げてあるが、必ずしも固定化した名称があるわけではなく、また、会の名称によって参加者や発表内容を縛ることはしておらず、発表内容も多岐にわたる。若手の参加を支援するために、社会人のカンパにより学生の旅費の補助を行うことを慣例化している。本年は鳥居基金助成も加えることにより、学生に十分な援助をすることができた。関係各位に感謝したい。会の趣旨である徹底的な討論を行い、できるだけ全員が討論に参加できるよう、一人当たりの講演時間をできるだけ長く(一時間以上)とり、発表途中での質疑や初歩的な質問も奨励している。積極的かつ責任を持った形で討論に参加できるよう、参加者全員が講演を行うことが望ましいが、今年は、参加が26名と例年になく多かったため、時間の都合上講演は20件に限られた。スケジュールは延べ20時間を越える討論の合間を縫って(無理矢理時間をあけて)、スポーツ・宴会および夜中の宴会も長時間行われた。そして、この遊びが潤滑油となつてか、初めは口の重かった学生・若手も少しずつ積極的に討論に参加していった。各講演や討論そのものも興味深いものが多く、有意義であったが、なにより、多くの参加者が相互理解に時間をかけて努力してくれたことで、討論会の目的は達成されたと考える。しかし、一人当たり一時間強の講演時間では、場合によっては討論を行うには不十分という印象も残りやや残念でもあった。

1996年度第2回「鳥居基金」

助成実施報告 (TE-09)

氏名：南秀樹(北海道東海大学工学部)

助成：国内研究集会

課題：1996年度地球化学若手会

地球化学若手会は、地球化学を研究する若手研究者が、年に一度全国から集まり、現在自分たちが行っている研究・観測の問題点等を議論し、情報交換を行い、親睦を深めることを目的に活動しています。

1996年度の地球化学若手会は11月2日から4日までの3日間、静岡県東部の増本塾会館(財)で開催しました。今年は例年と異なり11月の開催となりましたが、13の研究機関から39名(一般10名、学生29名)の参加者がありました。参加者の傾向としては大学院進学を考えている学部4年生や3年生の参加が多く、進学先、就職先あるいは他の研究機関の研究内容等の情報収集の場としての若手会が定着してきたことが伺えました。今年は特に杉本敦子さん(京大・生態研)「安定同位体地球化学のこれから—本質に立ち戻ることこそ interdisciplinary の可能性を拓く」と植松光夫さん(北海道東海大・工)「地球化学者の選択：化学か科学か」をゲストに迎えて普段の学会等ではなかなか聞けないような研究の取り組み方や考え方を中心に活発な議論が行われました。また、今年も研究活動の報告と観測の体験談等を兼ねた一般講演と参加者全員による自己紹介(5～10分程度、OHPシート2枚程度)の時間を設けました。一般講演は全体で10件あり、その内大気関係が2件、湖水海水関係が5件、熱水堆積物関係が3件と幅広い研究分野の講演が行われました。今年は時間的にも余裕があったため1件30分以上の時間を取って研究の問題点やこれからの研究の進め方等についてもじっくり議論することができたように思います。昨年からの発表時間を延長し、要旨集も作成して充実をはかっている自己紹介では、一般講演に相当するような発表も多く10分では終わらない講演やインパクトの強い個性的な発表が数多くありました。今年の若手会が盛況のうちに終了することができた背景には、インターネット上にホームページ(<http://www.htokai.ac.jp/SAPPORO/Staff/~minami/wakatekai/>)を開設したことも大きかったように思います。今後も地球化学若手会は地球や自然を研究する若手研究者のネットワークの中心となるべく活動を続けていきたいと考えています。

1996年11月21日

第6回地中におけるアクチニド元素と核分裂生成物の化学および移行挙動国際会議

Sixth International Conference on the Chemistry and Migration

Behavior of Actinides and Fission Products in the Geosphere

(MIGRATION '97)

表記国際学会が開催されますのご案内致します。

主催：日本原子力学会

共催：日本地球化学会ほか

スコープ：(1) アクチニドおよびFPの溶液化学

(2) 地層中における核種移行現象

(3) モデルおよびデータベース開発

会期：1997年10月26日(日)～31日(金)

会場：仙台国際ホテル(仙台市青葉区中央4-6-1)

登録料：一般50,000円、学生12,000円

(平成9年7月31日以降60,000円、学生15,000円)

申込・問い合わせ先：

〒319-11 茨城県那珂郡東海村村松4-33

動力炉・核燃料開発事業団 東海事業所 GIS

油井三和 E-mail: yui@tokai.pnc.go.jp

TEL 029-282-1111 (3154)

FAX 029-287-3704

第34回理工学における同位元素研究発表会

表記関連学会が開催されますのご案内致します。

主催：日本アイソトープ協会

共催：日本地球化学会他

会期：1997年6月30日(月)～7月2日(水)

会場：国立教育会館(東京都千代田区霞ヶ関3-2-3)

内容：それぞれの研究分野において、その専門的成果を得るにいたった放射性および安定同位元素ならびに放射線の利用技術に重点をおいた論文と、これら同位元素、放射線の利用の基礎となる研究。研究の内容には、少なくとも一部に未発表の部分が含まれていること。

発表形式：口頭発表またはポスター発表

発表申込区分：地球科学・宇宙科学、環境放射能その他の区分があります。お問い合わせ下さい。

発表申込：所定の申込書(1件1通)により、申し込む。申込書は下記宛請求して下さい。

〒113 東京都文京区本駒込2-28-45

日本アイソトープ協会内

理工学における同位元素研究発表会運営委員会

Tel 03-5395-8081, Fax 03-5395-8053

E-mail: gakujiu@sunl.jria.or.jp

発表申込締切: 1997年2月28日(金)

講演要旨: 発表申込有り次第, 所定の原稿用紙をお送りします。口頭発表, ポスター発表とも, 1件につき原稿用紙1枚。

講演要旨原稿締切: 1997年4月15日(火)

参加費: 無料

「第5回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会」の開催 および発表論文募集の案内

1. 行事名称: 第5回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会
2. 主催: (社)日本水環境学会・(社)日本地下水学会・(社)土壌環境センター
3. 日時: 平成9年6月24日(火) 9:00~18:00
平成9年6月25日(水) 9:00~18:00
4. 場所: 東京都品川区総合区民会館 きゅりあん
〒140 品川区東大井5-18-1
TEL 03-5479-4100
交通 JR 京浜東北線 大井町駅下車
隣接丸井デパート内
5. 参加費: 5000円/人
6. 参加方法: ①口頭発表・②ポスター発表・③聴講参加
7. 発表申込み〆切: 平成9年2月28日(金)
8. 原稿提出〆切: 平成9年5月9日(金)
9. 連絡先: (社)土壌環境センター
調査企画部 向井常雄・川崎由紀子
〒108 東京都港区芝4-4-5
三田 KM ビル 5F
TEL 03-3452-2593
FAX 03-3452-2832

東京大学地震研究所教官公募のお知らせ

このたび当研究所では下記の要領で教官を公募いたします。

つきましては、関係各位に広くお知らせいただき、適任者の推薦および応募についてよろしくお取りはからい下さるようお願いいたします。

記

公募人員: 助教授1名

研究分野: 火山や地殻, マントルの物質循環に関する地球化学

応募資格および条件:

- (1) 博士の学位を有するもの
- (2) 固体同位体質量分析装置などを含む地球化学実験室の立ち上げなど新手法の開発に積極的であること。
- (3) 地球化学(化学の基礎全般を含む)に関する大学院教育を行なうこと。
- (4) 他の分野の研究者と協力して地球物質循環の物理的モデルの構築に積極的に加わること。

所属: 決定後本人と相談のうえで決める

採用予定時期: 決定後できるだけ早い時期

提出書類:

- (1) 履歴書(市販用紙可)
- (2) 研究業績リスト(査読の有無で区別する)
- (3) 主要論文を5編程度選び, その別刷りと説明を添付する
- (4) これまでの研究概要(2000字程度)
- (5) 将来の研究計画(2000字程度)
- (6) 応募者について照会できる方2名の氏名, 所属, 連絡先

公募締め切り: 平成9年2月28日(金) 必着

問い合わせ先: 東京大学地震研究所地球計測部門 山下輝夫

電話 03-3812-2111 (内線5699)

E-mail: tyama@eri.u-tokyo.ac.jp

応募書類の提出先: 〒113東京都文京区弥生1-1-1

東京大学地震研究所人事掛宛て

書留で送付し, 封筒の表に「地球化学助教授応募書類」と朱書のこと

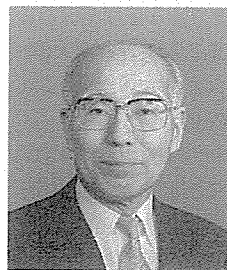
1996年度学会賞各賞受賞者のプロフィール

以下の方々が1996年度の柴田賞, 日本地球化学会賞, 奨励賞および功労賞を受賞されました。各氏を知る方々に, 紹介文を寄稿していただきました。

柴田賞: 北野康名誉会員

(名古屋大学名誉教授)

受賞課題「地球環境における炭酸塩物質に関する研究」



北野康先生は1947年9月に北海道帝国大学理学部化学科を卒業後, 北海道大学理学部, 神戸大学理学部などを経て1957年10月に名古屋大学理学部水質科学研究施設に助教授として赴任されました。その後, 教授への昇任, 水圏科学研究所へ

の改組などを経て, 1986年3月に停年退官されるまでの約30年間に終始御自身の研究と大学院生の教育に当てられ, 170編を超す研究論文を発表されるとともに多くの優秀な後継者を育てられました。また, その間多くの大学で集中講義を行い, 学生に研究の面白さを語り続けました。私も学生のときに北野先生の講義を聴きましたが, 学生に少しでも多くのことを伝えようと早口で話し続ける先生の情熱に何か心ひかれるものを感じたことが思い出されます。

北野先生の研究の主要なものは, 今回の受賞の対象となった炭酸塩物質に関する研究です。それらは, 結晶と溶液間の元素の分配, 晶出する結晶形と溶液の組成の関係, 多形間の転移の際の微量成分の挙動などを天然の物質についての観察と実験的な研究の両面から明らかにしたものです。それらの研究は, 結晶についての元素の分配に関する地球化学が急速に発展した時期に行われており, その発展に大きく寄与しています。しかし, それらの研究では同時に結晶へのイオンの取り込みや晶出過程が非平衡状態で起こることも明らかにしています。そのような研究は, 平衡論的研究の成熟を経て現在盛んになりつつあるキネティックな観点からの研究の先駆となるものです。炭酸塩物質の研究は, その晶出, 溶解, 結成変質などが地球上の元素の循環にいかに関与するかを明らかにするものであり, 現在その重要性が指摘されている地球環境を規制

する物質循環の研究の先駆となるものとして高く評価されます。それら炭酸塩物質の研究は最近1冊の本にまとめられ, 「炭酸塩堆積物の地球化学—生物の生存環境の形成と発展」(東海大学出版会, 1990年)として出版されています。

北野先生のもう1つの主要な研究に, 地下水や河川水の化学組成を地すべりや崩壊などの防災の観点から研究したものがあります。それらは, 自然災害となる現象の中で起こる物質の変化を地球化学的に明らかにし, 災害の予知・予防に新しい一面から寄与するものです。私たちの生活と直接係わる実用的な研究に地球化学を活用することは大変重要であり, それらの地下水・河川水の研究は日本の地球化学において実用的な研究の進むべき方向を示したものです。

北野先生は, 研究論文のほかにも多数の著書と総説・解説を発表されています。それらが, 若い後継者に地球化学への興味を覚えさせたり, あるいは学習を助ける教科書としての役割を果たしたことは, 一般社会への啓蒙と合わせて日本の地球化学の発展に大きく寄与しました。また, 北野先生は35編の論文を Geochem. Jour. に発表され, 創刊以来このジャーナルを盛り立ててこられたり, 日本地球化学会の会長などとして学会の運営にも大いに関わってこられました。名古屋大学を退官後は, 相山女学院大学の設立に係わり, その後学長となられるとともに, 大気中の二酸化炭素の問題などについて国の審議会委員などを務められております。

松葉谷治(秋田大学鉱山学部)

日本地球化学会学会賞: 松久幸敬会員

(地質調査所 地殻化学部)

受賞課題「石英・鉱物の酸素同位体地球化学の研究」



マルチフィールドな研究者という言葉があるかどうか定かではありませんが, そんな言葉があれば松久幸敬さんにぴったりではないかと思われます。東京教育大学地質学鉱物学教室の牛来正夫先生の下で岩石学を学び, 本来なら岩石学者と

呼ばれる道を歩むはずだったと思いますが, 松尾研究室と共同で運転していた質量分析計に目を止め, さらに岡山大学温泉研究所(現固体地球研究センター)

の酒井 均先生のもとで岩石・鉱物の酸素同位体の仕事に携わることで地球化学により大きな可能性を持たれ始めました。

当時、我が国の酸素同位体といえばやっと水・ガスの分析ができるようになった段階で、珪酸塩の分析は試料調製が難しく、化学者のなかでも手を出す人はいなかったと思われます。

松久さんは分析方法の確立、岩石標準試料の分析から始め、我が国で初めて岩石・鉱物の酸素同位体組成について系統的研究を行いました。とくに酸素同位体組成をストロンチウム同位体組成や元素組成と組み合わせ地殻の成熟度がマグマに及ぼす影響を論じた研究は、それ以降流行となったマルチアイソトープによるマグマの成因を論ずる研究の先駆けを作った研究のひとつとなっています。マグマの結晶分化作用にともなう同位体分別が明瞭に示されたのもこの一連の研究においてのことです。地質調査所に移った松久さんは、佐々木さんとの出会いから、地質調査所に酸素同位体分析システムを作るとともに、シカゴ大学で主要造岩鉱物間の酸素同位体分別係数の温度依存性を実験的にもとめる研究を進めました。この研究はその後、岩石や熱水系における酸素同位体分別を論じる際の基本文献の一つとなっただけでなく、彼自身の研究方向を決めるもととなったようです。

地質調査所では熱水系で形成される鉱物の生成条件や熱水と岩石の相互作用の解明に関する多様な研究を展開しました。なかでも、浅熱水性金鉱床を生成する熱水系において鉱脈を形成する微細粒鉱物間の酸素同位体分別の測定に成功し、熱水系が深部起源の熱水を含む段階から天水起源の水に卓越する系に移って行く過程を明らかにしたり、熱水変質を受けた岩石・鉱物の同位体組成から、かつて存在した熱水系の広がり、温度分布、活動の中心、熱水の起源を復元するアルゴリズムをつくるなど、地球化学の応用面への展開に積極的な取り組みをされました。後者の方法は、現在、金属鉱業事業団のプロジェクトにとり入れられ、熱水性鉱床の探査に使われています。松久さんの多くの研究は論文として発表されただけでなく、「Basaltic Volcanism of the Terrestrial Planets」や「Principles of Isotope Geology」など著名な教科書にも広く引用されています。さらには酒井 均さんとの共著「安定同位体地球化学」を著すなど地球化学の啓蒙にも広く力を注がれています。

松久さんの研究姿勢は一見クールにみえます。たと

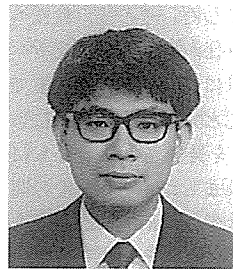
えば地球化学会ニュース第100号に寄稿された「共同研究の公式」は正論で、彼自身の「なかよし研究への決別」を示しているように取れます。しかしその実、松久さんの関係された研究論文では「1以上の研究者」を育てることに力が注がれ、また、文句を言われこそすれ感謝されることの少ないGJの編集長を10年近くも続けられ、一流の国際誌に育て上げられました。そろそろGJ編集長の激務から解放してあげて、特技のマルチ手法を生かした地球化学研究のリーダーとして世界の後進を指導していただきたいと思います。

柴田賢 (名古屋文理短期大学)

日本地球化学会奨励賞：石橋純一郎会員

(東京大学理学部)

受賞課題「島弧—緑海系における海底熱水活動の地球化学的研究」



石橋純一郎君は1985年東京大学理学部化学科を卒業後、東京大学大学院理学系研究科に進学し、東京大学海洋研究所海洋無機化学部門の酒井均教授(当時)の指導のもとで海底熱水活動の研究を始めました。学位論文のテーマとして、その

当時西部太平洋の海域で初めて発見された沖縄トラフの海底熱水活動に関する地球化学的研究に取り組み、新しい研究領域を拓きました。以来、我が国の潜水艇の調査範囲の拡大にともない石橋君の研究のフィールドは拡がり、1989年に東京大学理学部地殻化学実験施設に就職した後も、西太平洋の諸海域での海底熱水活動の調査に携わり、研究を進展させています。

石橋君の研究は、島弧—緑海系の様々なテクトニックセッティングの場における海底熱水活動の地球化学的特徴を考察し、従来の中央海嶺に限られていた研究では知られていなかった熱水化学組成の多様性をあきらかにしたことです。この中で熱水組成を支配する要因として、岩石との熱水反応による地殻物質の寄与だけでなく、マグマ性物質の寄与が重要であるという新しいアイデアを主張して、注目されています。このようなアイデアを得る過程において、彼が研究対象とした化学種の守備範囲が広いことがあげられます。現在、多くの地球化学者が、個々の化学種・同位体の専

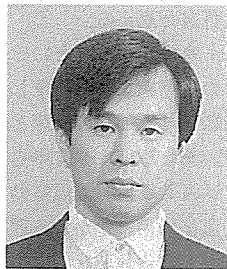
門家に分化していく傾向にあるのに対して、石橋君は熱水に溶存している主要成分・気体成分・微量金属成分など様々な化学種に対して、分析技術を習得してデータの解析を行ない、これら総合的に考察していることは特筆に値するものです。また、石橋君は国内あるいは国際プロジェクトとして行われる学際的な共同研究に数多く参加し、積極的にイニシアティブを取る中心的人物として活躍しています。石橋君の細かいことにこだわらない大らかな性格は、多人数の信頼関係のもとで初めて成立する海洋の研究にうってつけであることは間違いありません。このため共同研究にひっぱりだこで、乗船日数が多くて論文をまとめる時間があるのかとやや心配の種となるほどです。最近はいんターリッジの枠組みのもとで我が国の研究機関が中央海嶺の海底熱水活動研究へ参加する機会が多くなる中、石橋君の研究のさらなる発展が期待されます。

脇田宏 (東京大学理学部)

日本地球化学会奨励賞：豊田新会員

(大阪大学理学部宇宙地球化学科)

受賞課題「石英中の常磁性格子欠陥の熱安定性研究による ESR 年代測定の基礎の確立」



電子スピン共鳴 (ESR) は、不対電子を持つラジカルや d 電子を持つ遷移金属や f 電子を持つ希土類イオンを調べるマイクロ波分光の磁気共鳴法であり、分析化学の手法として広く用いられている。ESR 年応用計測研究会も1985年の第

一回 ESR 年代測定国際シンポジウム以後毎年開催され、今年で12回になる。国際会議も1988年に第5回がウクライナ共和国で開催予定である。年代測定の対象は珊瑚、貝化石、化石骨、砂漠堆積物、火山灰、地熱鉱物、断層粘土と地球科学の物質に広がったが、わが国での普及は測定手法の特殊性ゆえに十分とはいえない。スペクトルの解析やその解釈にある程度の専門知識、時には量子力学の知識も必要となるからである。したがって、地質学者が新しい試料を手がけると、間違いを犯しやすい。逆に ESR のプロは、地球科学的に有意義な試料や意義、解釈で独りよがりになりやすい。学際領域の研究だからである。

石英は豊富にあるにもかかわらず、「沈黙している

鉱物」と言われるように、年代測定の対象になっていない。豊田君は石英中の酸素の空格子に電子が捕らえられた E' 中心と呼ばれるの格子欠陥を ESR で調べ、断層粘土や石器の石英の熱履歴に利用した。さらに、自然放射線のアルファ線でのみ作られると考えられていた E' 中心が、低い効率でガンマ線でも作られることを明らかにし、第4紀の ESR 年代測定をプレカンブリア紀まで拡大する提案をより精度よくおこなう熱焼鈍法を開発した。また、高森遺跡の研究でも、火山灰の研究で日本の旧石器時代の考古学に貢献している。絶え間なく ESR で自然に問い、働きかけ、沈黙している石英砂の言葉を耳を澄ませて聞き取る研究と言ってよい。

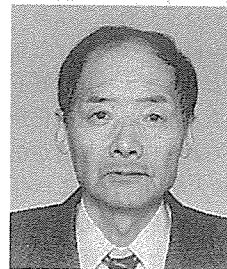
豊田君が、石英の格子欠陥を用いた年代測定と熱履歴評価で1996年度の地球化学会奨励賞を受賞したことは、ESR 法のために喜ばしい。ESR 年応用計測研究会には、何人かの優秀な人達がいろんな分野から参加しているが、地球化学からの若手(受賞対象)は、多分豊田君のみだろう。総数150人程度の小さな研究会を抜け出ずにいるが、豊田君は幹事としてその運営でも活躍しており、年齢制限で奨励賞の対象になれなかった方には申し訳ないが、この手法が地球化学で認められたことを多くの会員とともに喜びたい。

池谷元何 (大阪大学理学部宇宙地球科学科)

日本地球化学会功労賞：戸村健児先生

(立教大学原子力研究所教授)

受賞課題「原子炉を利用した地球化学研究への貢献」



戸村健児先生は1960年3月に東京教育大学理学部大学院博士課程を修了され、「Sc の分析」の研究で理学博士になられました。同年4月に臨界前の立教大学原子力研究所に着任されました。この3月で37年間の勤務を終え、ご定年を迎え

られます。立教大学炉は先生のご定年に期せずして閉炉の方向へ向かうことになりました。したがって先生はまさに立教大学炉とともに歩まれたといつてよいと思います。

戸村先生は立教大学炉がスタートするとまもなく、地球化学試料の中性子放射化分析法の確立に当たられました。岩石標準試料の分析もいち早く行われまし

た。原子炉を用いた中性子放射化分析法が地球化学の研究に大きく貢献したテーマに、故小沼直樹さん、長沢宏さん、樋口英雄さん等によって行われた火成岩鉱物への元素の分配に関する研究“アラユルニウム計画”があります。これらの研究も先生の協力なくしては成立しなかったものと思われます。この当時の γ 線測定には立教大学炉の物理グループの手作りによるGe (Li) 半導体検出器が利用され、今日の機器中性子放射化分析 (INAA) のきっかけを作ったと思われます。しかし検出器の感度が低かったことから完全な非破壊分析ではなく、グループセパレーションをする必要がありました。先生はグループセパレーションにより、岩石中の希土類元素等を分析する方法を開発されました。その後、先生は化石貝殻の放射化分析により、貝の化石化過程での元素の挙動を解明されたほか、人体結石中の微量元素組成を求められ、生物地球化学的研究もされました。現在は黒曜石石器の産地をその微量元素組成から求めるとともに、黒曜石の元素組成の産地地域による差に興味を持たれておられます。先生の地球化学的研究業績の一つにフィッシュントラック年代測定に適した照射場に関する研究等、同年代測定法の基礎的研究もあげられます。

地球化学研究での先生のご貢献で忘れてならないのは、若手研究者の放射化分析への指導と助言があげられます。現在、隕石から海底土等、宇宙・地球化学、環境化学そしてフィッシュントラック年代測定と多方面の地球化学的研究が立教大学炉を利用して行われています。その大半が戸村先生のわけへだてのない指導・助言により行われているといっても過言ではありません。戸村先生の支えて立派な研究をなしとげた地球化学者は枚挙にいとまがないといえます。日本原子力研究所の研究炉でも利用者増を目指して「放射化分析支援システム研究会」が設けられ、種々の検討がなされています。ここでも、「立教大学炉における戸村先生が原研炉にもいれば多くの問題（特に初心者への指導・助言）が解決する。」ということが話題になります。わが国の放射化分析の発展にとって先生の貢献がいかに大きいかを示す証拠かと思えます。立教大学炉が閉鎖の方向に向かうとはいってもまだ少しは運転されるようです。先生はご定年後も立教大学炉に残られるとお聞きしていますので、しばらくは先生の助言を受けられるものと期待しております。

最後に、先生は趣味としてフルマラソンを走られるほか、日本山岳会会員でもあられ、登山とスキーを愛

されるナチュラリストでもあります。定年退職後は若い時に登った日本の3,000m以上の山に再登山するとともに、韓国、中国、台湾の山への登山、さらにヨーロッパアルプス、カナダ等でのスキーを楽しみにされておられます。

福岡孝昭（学習院大学理学部）

書評

半田暢彦編「大気水圏科学からみた地球温暖化」

名古屋大学出版会 1996年 3月

B5判 380ページ 8,240円

札幌の年会においてたくさんの人から、地球化学にもっと多くの教科書がほしいとの声が聞かれた。地球化学でシリーズをなす教科書は少ないが、それぞれの目的と程度に応じた教科書は少なくない。本書は名古屋大学大気水圏科学研究所が、全国共同利用研究所として発展するに際して、大気水圏科学の最先端分野を地球温暖化の旗のもとに総括したものであり、大学院・学部4年生あるいは研究者でこれからこの分野の研究を始めようとする者が、分野を概観し、研究の取っ掛かりを得るのに最適の教科書と思える。

全体は6章20節から構成され、章または節ごとにそれぞれの分野の第一線で活躍中の専門家20名が執筆している。第1章では半田暢彦氏により温暖化の実態と題し、本書への導入がなされる。第2章はすべて中島映至氏の執筆で、温暖化のメカニズムと題し、温室効果気体、エアロゾルおよび雲の温室効果にかかわる理論的解説がなされる。実験を手段とする地球化学者には敷居の高い分野かもしれないが、ぜひ学んでおきたい所である。

第3章は各論を扱い、二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素、フロン、オゾン、硫化ジメチルおよびエアロゾル・火山灰、のそれぞれの物質について吉川（井上）久幸、半田暢彦、野尻幸宏、寺井久慈、巻出義紘、岩坂泰信、田中浩および林田佐智子の各氏により執筆されている。それぞれの物質についてその基本的性質、測定法、人為作用を含めた地球化学サイクル、過去の実在度の推定などが含まれている。この中の一つの物質にのみ関心がある学生でも基礎知識として本章くらいは全体を精読すべきだろう。

第4章は温暖化と自然環境と題し、温暖化と生物圏を含む地球科学とのかかわりが述べられている。雲と

降水、海水、積雪と凍土、陸上植生の生態、陸上植生の変動、海の中での生物の働きと温暖化および温室の中の海洋生物ネットワーク、のそれぞれについて時岡達志、榎本浩之、大畑哲夫、及川武久、末田達彦、高橋正征および永田俊の各氏が執筆されている。地球温暖化がいかに広い範囲の自然環境とかわりを持つかについて教えられるところで、この分野の研究領域の広さがわかる。

第5章は応用問題をあつかった部分で温暖化の影響と対応と題し、海面の変動機構、温暖化による陸氷の変動、はげしい天気現象および地球温暖化問題への我が国の対応、のそれぞれについて松本英二、中尾正義、山元龍三郎および北野康の各氏が執筆されている。ともすれば応用問題ばかり取り上げがちだった従来の普及書と異なり、この部分でも本書の地道な記述が好まれる。第6章は地球環境の未来と題する本書のしめくり部分であるが、定石どおり問題解決を経済学と社会学に投げかけている。人間はそれほど偉大な

ものだろうか、人間も地球の一物質ではないだろうか、と言うのが評者の感想である。

本書は多数の著者により地球温暖化という大きく複雑な問題に正面から取り組んだ大著にもかかわらず、その構成は系統立っておりわかりやすい。それは著者20名のすばらしさに加え、編集者の取りまとめのうまさによると思われる。図版も執筆者による原図が随所に用いられており、引用図版でも活字が入れ替えられている事によりすこぶる読みやすい。700件をはるかに越えるであろう文献数と索引はこれから勉強を始めようとする人にも役立つものと思われる。本書は大変優れたもので、当初評者の所属する地球惑星科学教室の学生に読ませるべく図書室に備えたいと思い、編者の半田先生に寄贈をお願いしたものであるが、今となってはこの本を読んだ学部学生が教室でなく大気水圏科学研究所の大学院を志望することになるのではないかとあわてている。

（名古屋大学理学研究科 田中剛）

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

今回の発行は2月初旬予定のところ、編集者の不手際により、少々遅れてしまい申し訳ありませんでした。今後とも従来と同様、皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メールでの原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしく願いいたします。次号の発行は5月下旬頃予定していますので、ニュース原稿は4月中旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。

（編集担当 高橋和也）

編集担当者

高橋和也

〒351-01 埼玉県和光市広沢2-1

理化学研究所 核化学研究室

電話：048-467-9420

FAX：048-462-4654

E-mail：kazuyat@postman.riken.go.jp

米田成一

〒169 新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館 理工学研究室

日本地球化学会ニュース

No. 149

1997. 5. 31

1997年度日本地球化学会年会のお知らせ(Ⅱ)

主催：日本地球化学会（共催 日本化学会）

日時：9月17日(水)～19日(金)

会場：東京都立大学教養部（八王子市南大沢）

内容：

一般講演（15分）

ポスターセッション 展示方法については、申込者に改めてお知らせします。

課題講演（原則20分） コンビナーと連絡先は以下の通りです。内容についてはニュース No. 148の記事を参照してください。

課題1 海洋地球化学の最前線

野崎義行（東京大学海洋研究所）

Tel：03-5351-6451；Fax：03-5351-6452

E-mail：nozaki@ori. u-tokyo. ac. jp

加藤義久（東海大学海洋学部）

Tel：0543-34-0411；Fax：0543-34-0937

E-mail：ykato@simizugw. cc. u-tokai. ac. jp

課題2 21世紀の宇宙化学を目指して

中村 昇（神戸大学理学部）

Tel：078-803-0576；Fax：078-803-0490

E-mail：nakamura@shidahara1. earth. s. kobe-u. ac. jp

海老原充（東京都立大学理学部）

Tel：0426-77-2553；Fax：0426-77-2525

E-mail：ebihara-mitsuru@c. metro-u. ac. jp

課題3 質量分析技術の新展開

今村峯雄（国立歴史民俗博物館情報資料研究部）

Tel：043-486-4226；Fax：043-486-4299

E-mail：imamura@rekihaku. ac. jp

杉浦直治（東京大学大学院理学系研究科地球惑星物理）

Tel：03-3812-2111内線4307；Fax：03-3818-3247

E-mail：sugiura@geoph. s. u-tokyo. ac. jp

課題4 地球環境変動史の解明に向けて

福沢仁之（東京都立大学理学部）

Tel：0426-77-2605；Fax：0426-77-2589

E-mail：chnos@geog. metro-u. ac. jp

奈良岡浩（東京都立大学理学部）

Tel：0426-77-2529；Fax：0426-77-2525

E-mail：naraoka-hiroshi@c. metro-u. ac. jp

*十分な討論時間を持つために、一般・課題講演を通じて、口頭発表は1演者1件に限らせていただきます。2件目からはポスターセッションで発表をお願いします。

*口頭発表は原則としてOHP使用とします。OHP以外の機材を希望する場合は講演申込時にお申し出ください。

講演申込締切 6月30日(月) 17:00

本号添付の申込用紙またはそのコピーをご利用ください。また、講演申込は電子メールでも受け付けます。ただし、あらかじめ電子メール用申込書式を入手してください。この書式はsubjectにkoenとだけ書いたメールをgeochem@comp. metro-u. ac. jpに送信すると自動的に返信されます。必要事項を記入の上、subjectをkoen-moushikomiとし、geochem@comp. metro-u. ac. jpまで再度送信してください。

講演要旨原稿締切 7月18日(金)

“講演要旨作成上の注意”に従って作成してお送りください。遅延、輸送中の紛失の責任は負いかねます。送付方法には十分ご注意ください。

参加費：予約 会員 1,000円 学生会員 無料
非会員 2,000円 予約外 2,000円

要旨集：予約 4,000円（送料込）

予約外 5,000円

総会：9月18日(木) 開催
懇親会：9月18日(木) 18時から東京都立大学生協食堂
で開催。
予約 5,000円 学生 3,000円
予約外 6,000円

講演会 「生命の起源と惑星探査」

日時：9月13日(土) 午後2時より
場所：科学技術館サイエンスホール
(東京都千代田区北の丸公園)
詳細は次号ニュースに掲載します。

参加申込締切 8月15日(金) 17:00

予約参加登録、懇親会、要旨集の申込みは、本号
添付の申込用紙またはそのコピーをご利用くださ
い。また、電子メールでも受け付けます。ただ
し、あらかじめ電子メール用申込書式を入手して
ください。この書式はsubjectにsankaとだけ書
いたメールを geochem@comp.metro-u.ac.jp
に送信すると自動的に返信されます。必要事項を
記入の上、subjectをsanka-moushikomiとし、
geochem@comp.metro-u.ac.jpまで再度送信
してください。

送金：参加費、要旨集代、懇親会費は8月15日(金)まで
に郵便振替でご送金ください。

郵便振替 00100-3-362582

1997年日本地球化学会年会準備委員会

宿泊の予約

東京都立大学生協同組合でお世話します。添付
の資料を参照の上、8月26日(火)までにお申し込み
ください。詳しくは下記まで直接おたずねくださ
い。

〒192-03 東京都八王子市南大沢1-1

東京都立大学生協同組合 金窪

Tel: 0426-77-1413; Fax: 0426-77-1410

年会申込・連絡先

〒192-03 東京都八王子市南大沢1-1

東京都立大学理学部化学科

1997年度日本地球化学会年会準備委員会

石渡良志

Tel: 0426-77-2532; Fax: 0426-77-2525

E-mail: rish@comp.metro-u.ac.jp

または 海老原充

Tel: 0426-77-2553; Fax: 0426-77-2525

E-mail: ebihara-mitsuru@c.metro-u.ac.jp

年会 E-mail: geochem@comp.metro-u.ac.jp

年会ホームページ:

http://www.comp.metro-u.ac.jp/~geochem

【選挙公示】

**日本地球化学会1998・1999年度役員選挙の
立候補者および推薦候補者の届出について**

本会会則により1998・1999年度役員の選挙を以下の
日程で行います。

立候補・候補者推薦締め切り	7月4日必着
選挙広報・投票用紙・会員名簿発送	8月上旬
投票締め切り	9月5日必着
選挙結果公表(総会)	9月18日

つきましては、下記の要領で会長・副会長・監事・
評議員に対して、それぞれ立候補者および推薦候補者
の届け出をしていただくようお願いします。

1. 会長1名、副会長1名、監事1名、評議員20名を
選出します。
2. 立候補者の届け出は、届書を立候補者自身が、(1)
本委員会に持参するか、または(2)本委員会宛に送付
して下さい。
3. 推薦候補者の届け出は、推薦候補者名と推薦者名
を記した届書に推薦候補者の承諾書を添えて、推薦
者またはその代表者が、(1)本委員会に持参するか、
または(2)本委員会宛に送付して下さい。なお役員選
挙細則第8条により、次の方々は次期評議員に選出
することができません。
植松光夫、大隅多加志、野津憲治、赤木右、田中剛、
増澤敏行、村江達士、千葉仁、松久幸敬
4. 第2項、第3項に記した以外の方法で届け出が行
なわれた場合には、届け出を受け付けることができ
ません。郵送の場合は裏に(選挙)と記入し、「書
留郵便」として下さい。
5. 届け出の締め切りは1997年7月4日(必着)で
す。
6. 本委員会の所在地は次の通りです。
〒183 府中市幸町3-5-8
東京農工大学農学部環境資源科学科
赤木 右

Tel: 0423-67-5619; Fax: 0423-67-5565

**1998年度地球惑星科学関連学会
合同大会のお知らせ**

表記の大会が以下の要領で開催されます。詳細は次
回の連絡会ニュース(8月発行予定の地球化学会
ニュースの次号に掲載予定)でお知らせいたします。
会期: 1998年5月26日(水)~29日(金)

会場: 国立オリンピック記念青少年総合センター

主な組織: 大会委員長 河野 長
プログラム委員長 寺沢敏夫

なお、今回は従来の固有・共通セッションの区別を
廃止し、全てを提案に基づく共通セッションとする方
針が検討されております。この場合、例えば「地球化
学」などの固有セッションは自動的に設置されませ
ん。セッションおよびシンポジウムの募集は今回の案
内でお知らせいたしますが、メ切が9月と予想されて
おりますので、提案を希望される方は、あらかじめご
準備下さるようお願いいたします。

1998年度地球惑星科学関連学会合同大会に関する情
報を得るための電子メールアドレスを、godoinfo@gtl.
isas.ac.jpに6月1日より設定いたします。

上記アドレスに向け、「send」の一言からなるメイ
ルを送っていただければ送付元のアドレスに対し、情
報を返送いたします。(メールのsubject欄への記入
は必ずしも必要ありませんが、整理をしやすいするた
めjohoと記入いただければ幸いです。)

当面、

○9月初めに予定されている、共通セッション・シン
ポジウムの募集についての最新情報

○9月から12月に予定されている、宿舍予約方法に関
する最新情報

などの配布を予定しております。また、これらを含め
た98年合同大会全般に関する情報を提供するための
ホームページの立ち上げも予定しておりますが、その
URLアドレスも決まり次第、この電子メール情報経
由で公開いたします。

情報がうまく送られないなどのトラブルがありまし
たら苦情処理専用アドレス、

godokujo@gtl.isas.ac.jpもしくはgodokujo@grl.s.
u-tokyo.ac.jp

まで電子メールにてお知らせ下さい。

**1997年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」
の受賞候補者および研究助成候補者の推薦
依頼について**

三宅泰雄教授退官記念事業として1972年に設立され
た地球化学研究協会は、その翌年から、地球化学に顕
著な業績をおさめた科学者に、毎年、地球化学研究協
会学術賞「三宅賞」を贈呈しています。

さらに1983年からは、海外シンポジウムに出席・論
文を発表し、または海外の学術研究調査等に参加する
地球化学の若手研究者に対し、助成を行なっています。
なお、賞金および助成金は本協会を母体として、1983
年に創設された公益信託「地球化学研究基金」(受託者
: 東洋信託銀行株式会社)から贈られます。

つきましては、下記の要領により、受賞候補者およ
び研究助成候補者のご推薦をお願いします。なお、最
近3年間の三宅賞受賞者および昨年の研究助成受領者
は次の通りです。

三宅賞

第22回(1994)学習院大学教授 長沢 宏博士

「微量元素のケイ酸塩の各相間の研究」

第23回(1995)秋田大学鉱山学部教授 松葉谷治博士

「熱水及び火山ガスの水素・酸素同位体によ
る研究」

第24回(1996)筑波大学化学系教授 下山 晃博士

「宇宙起源物質中の有機物に関する地球化学
的研究」

研究助成

第12回(1996)東京工業大学草津白根火山観測所助手
大場 武博士

「草津白根山火口湖湯がま湖水の変化と火山
活動の関係」

開催場所日時: アメリカ合衆国オレゴン,
Sep. 5~9, 1996

会議名 Crater lakes terrestrial degassing and
hyper acid fluids in the environment.

記

三宅賞

1. 本賞は地球化学に顕著な研究業績をおさめた科学
者に贈呈します。

2. 本賞は賞状とし、副賞として賞牌および賞金(30

万円)をそえます。

3. 本賞の贈呈は、1年1件(1名)とします。
4. 規定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)主な論文10編程度に略歴をそえて、協会事務所までお送り下さい。

研究助成

1. 研究助成は地球化学の研究者で、海外における学術調査研究などに参加するもの、ならびに海外のシンポジウム等に出席し論文を発表する者に対して行われます。
 2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
 3. 規定の用紙に推薦候補者(各締切日において満40才迄とする)の海外調査に関しては、略歴、研究業績、調査地(国名、地域名)、調査目的・計画、推薦理由、同行者などを記入し、海外のシンポジウム出席については、略歴、研究業績、国際会議名(主催団体、開催場所、開催年月日)、論文題目、推薦理由等を記入して、協会事務所までお送りください。
- 三宅賞の贈呈および研究助成者の発表は、1997年12月6日(土)、東京で行ないます。

申込締切日は、三宅賞は、1997年8月31日
研究助成は、第1回締切 1997年8月31日
第2回締切 1998年1月15日
地球化学研究協会
〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217
Tel: 03-3330-2455 (Fax 兼用)

1996年度三宅賞に下山晃会員が選ばれました。

本号ニュースにも本年度候補者推薦依頼記事が載っていますが、三宅賞は1972年設立以来、地球化学に顕著な業績をおさめた科学者に与えられる賞です。昨年度は本会会員の下山晃会員(筑波大学化学系)が選ばれました。下山会員は隕石などの宇宙起源物質中の有機物の解析に基づいた研究で、隕石の歴史のみならず、化学進化、生命の起源にも迫る顕著な業績を上げてこられました。昨年は、火星起源隕石中に生物の痕跡の可能性が見いだされたことで、ますます研究の意義は高まったものと思われます。本学会にとっても名誉あることですし、また学術的にも非常に意義深いことでもあり、あらためて披露させていただきます。

1996年度第3回日本地球化学会 評議員会議事録

日時: 1996年8月26日(月) 15:00~18:00
場所: 北海道大学ファカルティハウス
「エンレイソウ」

1. 第2回評議員会議事録の承認

2. 報告事項

2.1 庶務・幹事会(千葉評議員)

文部省・研究助成関係

- (1) 平成8年度科研費「研究成果公開促進費(学術定期刊行物)」の受領(7/19, 174万円)
- (2) 平成8年度科研費「研究成果公開発表(B)」の受領(8/9, 110万円)
- (3) 学術会議地球化学宇宙化学研究連絡委員会へ科研費審査委員候補者の推薦(7/11)
- (4) 日産科学振興財団の研究助成応募の学会締切(8/10, 一般研究の応募1件)
- (5) 日本学術協力財団より「21世紀の地球環境科学に対する地球化学の役割」シンポジウムの企画の採用通知受領(8/16)
- (6) 日産科学振興財団の研究助成への学会推薦の送付(8/19, 一般研究1件)

共催・後援

- (1) 日本学術会議化学研連主催「第4回「環境と化学」講演会」(1996年11月14~15日, 日本学術会議講堂) 共催(7/10)
- (2) 第12回ESR応用計測研究会(1996年9月14~15日, 奈良教育大学) 協賛(7/10)
- (3) 1997年度質量分析連合討論会(1997年5月14~16日, 奈良女子大学) 共催(8/1)

幹事会

1996年8月19日14:00~18:30に東京大学山上会館203号室で開催した。出席者: 高岡会長、石渡副会長、赤木幹事、高橋幹事、千葉幹事、増澤幹事。第3回評議員会の議事内容について整理した。

2.2 会計(増澤評議員): GJの別刷未収金(1991~1993年分, 10件)の再請求を行い、3件、¥63,203を集金した。

2.3 出版(増澤評議員): テラ学術出版と学会の間でのGJ出版費用のやり取りについて報告された。

2.4 編集

2.4.1 GJ(松久評議員): Vol.30は、No.3まで出版済み。No.4は著者校正中。No.5は編集済み。No.6の原稿を集めている段階。8/23現在の投稿総数は42編である(昨年34編)。

2.4.2 地球化学(赤木評議員): Vol.30のNo.2を11月発行予定。

2.4.3 ニュース(高橋評議員): No.146を7/14に発行した。

2.5 1996年度年会中間報告(角皆評議員): 1996年度日本地球化学会年会の準備状況について説明があった。

2.6 委員会報告

2.6.1 財政委員会(増澤委員長): 第5回財政委員会は1996年8月19日12:00~14:00に開かれた。制度改革および会費改定にともなう1997年度予算案の編成について協議した。

2.6.2 日産学術助成推薦委員会(石渡委員長): 平成8年度日産学術助成の学会への応募を8月10日に締切、一般研究1件を日産科学振興財団へ推薦することを決めた。

2.6.3 将来計画委員会(石渡委員長): 年會会期中に開催する。

2.7 学術会議

2.7.1 地球化学・宇宙化学研連(石渡副会長): 第16期第7回委員会(1996/7/26)についての報告。研連の見直しと惑星科学専門委員会の新設が議論された。

2.8 その他

2.8.1 地球環境科学関連学会協議会(赤木評議員): 第2回構想委員会(1996/7/19)の報告。協議会(仮称)設置に関する具体案の検討が行われた。

2.8.2 地質科学関係学協会連絡協議会(高橋評議員): 第1回準備会議(1996/8/10)の報告。15学会、4研連、18名が参加。準備会の世話人代表として佐藤正氏(地質研連)を選出した。世話研連として地質科学総合研連を、世話学会として日本地質学会を指名した。

2.8.3 1996年度年会夜間集会(千葉評議員): 夜間集会のプログラムが報告された。

3. 審議事項

3.1 入退会者の承認: 1996年5月1日から6月30日までの入退会者を以下の通り承認した。
入会(22名)正会員: 白石和行、亀海泰子、

CHEONG Chang-Sik, LEE Kwang-Sik, 緑川貴, NEELAM Siva Siddaiah, 村松容一, 板谷利久, 林秀, 木沢進, 野田典広, (以下学生) 申昊勲, 佐藤徹朗, 荒波一史, 伊藤雅史, 上田陽子, 山本美千代, 宮崎あかね, 山本順司, 加藤拓弥, 篠塚良嗣, 鈴木康弘
退会(1名)正会員: 田口一雄
この結果会員数は以下ようになった。

	正会員(学生)	賛助会員	名誉会員	計(在外)
1995年4月30日	1008(108)	21	11	1040(44)
入会	22(11)	0	0	22(2)
退会	1(0)	0	0	1(0)
変更	0(5)	0	0	0(1)
除籍	0(0)	0	0	0(0)
1996年6月30日	1029(114)	21	11	1061(47)

3.2 1996年度総会提出議案について: 1996年度総会に提出する議案として、(1)1995年度事業報告ならびに決算報告および監査報告、(2)1996年度事業中間報告ならびに決算中間報告、(3)1997年度事業計画ならびに予算案、(4)会則改正案、を審議の上、承認した。

3.3 1997年度学会賞等受賞者選考委員会委員選出: 1997-98年度学会賞等受賞者選考委員として投票の結果、松久幸敬評議員、清水洋評議員、角皆静男評議員の3名を選出した(次点、田中剛評議員)。委員長を松田准一評議員に委嘱した。

3.4 学術会議惑星科学専門委員会の新設への対応について: 地球化学会としての対応について意見を交換した。

3.5 その他: 会則改正が総会で認められた場合の、シニア会員制度の広報の方法・申告手続・承認方法について議論した。シニア会員への異動は、自己申告性とし、随時受付け、評議員会承認事項とすることとした。

第16期第9回地球化学・ 宇宙化学研究連絡委員会議事録

日時: 1996年12月12日(木) 13:30~16:30

場所: 日本学術会議第6部会議室(6F)

出席者: 石渡良志委員長、青木謙一郎、秋元肇、日下部実、野津憲治、半田暢彦

1. 報告事項

(1) 学術会議関係 (青木委員より)

1) 10月15～18日に第124回総会、連合部会および部会が開かれた。総会審議事項としては、日本学術会議会員の推薦の手續きに関する規則の一部改正が認められ、「資料の紙質劣化についての対策の要望について」が承認され、「著作物再販制度の存廃問題について」は会長談話として扱うこととなった。日本学術会議50周年史の編集準備委員会の設置が認められ、「研究者の養成・確保と教育」の報告を各部で検討することが依頼された。部会審議事項としては、惑星科学専門委員会を地球物理学研連に設置することが認められ、地球電磁気研連にSTPデータ小委員会を設置することが承認された。また、2件の対外報告「計算機科学の推進について」、「研究情報ネットワークを利用した学術研究の促進のために」が承認された。

2) 12月9日に第4部会が開催され、研究連絡委員会の見直しについて審議を行なった。

(2) その他 (石渡委員長より)

1) IAGCについて最近の変更事項を学術会議に報告した。

2) 平成9年度代表派遣候補者として日下部委員を推薦する。

3) 研連活動および9月に開催した「21世紀の地球環境科学に対する地球化学の役割」シンポジウムについて、「学術の動向」に記事を出すことになった。

2. 審議事項

(1) 前回議事録

議事録(案)を承認した。

(2) 地球化学・宇宙化学の将来計画について

委員長が提出した対外報告「わが国における地球化学の推進について」の原案をもとに自由討議をおこなった。その中で、地球環境科学が中心であるのでタイトルを考え直したほうがいいこと、先期の対外報告との整合性を保つこと、大気化学も考慮すべきこと、中核研への関わりを明確にすること、人材養成の方策を網羅的でなく強調することなどが述べられた。討議内容を参考にして、2月の第4部会に提出できるように委員長を中心にまとめ直すことが了承された。

(3) 次回(第9回)委員会

平成9年4月10日(木) 13時30分からを予定することとした。

1996年度日本地球化学会年会報告

北海道大学大学院地球環境科学研究科
同準備会代表 角皆静男

標記年会は、本会主催、日本化学会共催で、1996年8月27日(火)～31日(土)に、北海道大学高等教育機能開発センター・S棟(旧教養部)ほかにおいて開かれた。同時に総会を8月29日13時からおこなった。

本年度では、口頭研究発表、ポスター研究発表、課題討論、夜間集会、夜間セッション、学会賞等受賞講演、研究会、エクスカージョン、公開講演会、懇親会と盛りだくさんな企画をするともに、さらに盛会なものにするための企画を追加した。それらの内容、私どものねらい、結果について記しておきたい。

1. 課題討論：従来、課題討論は、開催地の特色を表すような主題を取りあげ、より深く討論することとしてきたが、ややもすると、持ち時間を15分から20分に延長しただけというきらいもないわけではなかった。そこで、専門分野の深い討論は、研究会で行うこととし、地球化学の全分野に共通するような課題を取りあげ、いわゆる意識の向上、一体感の醸成をはかり、将来の日本の地球化学の発展の助けになればと考えた。同時に、関連する研究発表が無く、行き場のない参加者を吸収しようと考えた。

選ばれた課題名(かっこ内はコンビーナー名)は、地球化学におけるパラダイムの創設(角皆静男)、地球化学における新技術・新手法(乗木新一郎・南川雅男)、地球史と地球化学(大場忠道・松田准一)、地球環境変化と地球化学(田中教幸)で、27、28日に特別会場で連続して行われた。16件の講演はすべて招待講演であった。残念だったのは、P. K. Kuroda先生(東京まで来られた)とH. Oeschger先生がご病気で来られなかったことである。常時40名以上が出席し、感銘を受けたと出席者からは好評で、研究発表の会場にいる人たちが聴けないのはもったいないという声もあった。逆に、研究発表の会場にいた方からお尻がむずむずして落ち着けなかったという声も聞かれた。

2. 口頭発表：ほぼ従来の形式で、27、28日に4会場で行い、194件の発表があった。時期が早かったこと、北海道であったこと、ポスター発表や研究会に流れたことなどにより、昨年度より少なかったが、これは私どもが意図したことでもあった。一日を午前と午後をともに3時間半の2セッションとし、各セッションを3人の座長にお任せした(話し合いで、座長が他

会場に行くことも可能にした)。

3. ポスター発表：今回は、できるだけポスター発表を優遇しようとの意図から、29日午前にも他会場をすべて閉じ、48件すべてが、1分間講演を行い、その後2組に分け、45分ずつポスターの前に立ってもらった。1分間講演とは、OHPシート1枚を用い、順番に1.5分ごとに鐘が鳴る間に話した。講演者の紹介はなく(自分でする)、質疑もなかった(ポスターの前でする)。1分間講演では、すべての分野の話が聴けるので、多数集まり、好評であった。

4. 夜間集会：27日夕に会長を議長とする、夜間集会〔地球化学会をとりまく諸問題〕が昨年度と同様の形式で開かれた。私どもはお手伝いをするだけであったが、予定の18時半開会だと、出席者が減ることが心配になり、急遽1時間繰り上げて開始することにした(実際は、前の講演が延び30分)。

5. 夜間セッション：28日18時から、[21世紀の地球化学に向けて]という主題で、5名の博士をとる前後にある若手から、「先輩への注文と学会への提言」をしてもらい、また、5名の名誉会員クラスの先輩から、「若手および学会への助言」をしてもらうという趣向で始めた。時に200名を越す出席者の熱気と脇田、半田両教授の名司会で会は大いに盛り上がった。会場にいる一線の研究者たちは、両側からの挟み撃ちになり、たじたじであったが、今後に期するものを感じたようであった。

6. 学会賞等受賞講演：29日午後、総会に引き続き、日本地球化学会奨励賞(豊田新氏のみ、石橋純一郎氏は在外中)、日本地球化学会功労賞(戸村健児氏)、日本地球化学会賞(松久幸敬氏)、柴田賞(北野康氏)の受賞講演があった。座長に時間が足りないからご協力をという要請が強すぎってしまったようであった。

7. 研究会：30日朝から1日6会場で次の主題で行われた(かっこ内はコンビーナー)。古海洋(大場忠道)、宇宙・惑星(中村昇)、火山・熱水(篠原宏志・北逸郎)、二酸化炭素(野尻幸広・渡辺修一)、古環境解析のための地球化学ブランクシー(石渡良志・南川雅男)、海洋における物質循環(乗木新一郎)。たとえ人数は少なくとも(出席者数を上の主題順で後記する)、専門の近いものが集まって深く討論しよう、従来の課題討論では分野が限られてしまうので、参加者の主導で誰もが討論主題を選べるようにしよう、地球化学以外の地球科学者が参加しやすいものにしよう、

懇親会の翌日を有効に使う、などの意図で企画した。合計すると、講演数は80件あり、出席者数は午前も午後も170名以上がおり、成功したと判断できよう。地球化学が、地球物理学、地質科学と並んで、地球科学の3本柱の1本になるためには、幅を広げ、これらが部会として成長する程度にならなければと考えた。

8. 懇親会：29日17時より北大構内で開いた。3日目にいった理由は、従来の2日目に行くと3日目の午後終わり頃になると、会場が閑散としてくる状況を避けたかったからである。17時と少し早めたのは、終わって東京行きの最終便に乗れるようにしたためである(実際帰った方は、数名であった)。3日目にも関わらず、多数(269名)の参加があり、若手優秀発表者の表彰と答辞などがあり、きわめて盛会であった。料理が余ってしまい、一部の方にお酒とともに持ち帰ってもらった。

9. エクスカージョン：30日8時30分予定通り北大を夕張に向け出発した。参加希望者が8名しかなく、中止も考えたが、せっかくの希望を活かそうと、マイクロバスを借り、鈴木徳行、時枝隆之会員が運転案内をすることで実施した。

10. 公開講演会：31日午後北大のクラーク会館で「地球を知ろう：最先端の地球化学」という主題で、文部省の助成金を受け、次の講演を行った。地球の誕生と進化(松田准一)、火山噴火と地震(脇田宏)、地球温暖化(角皆静男)、酸性雨とオゾン(秋元肇)。参会者に記名してもらうことを忘れてしまったが、延べ250名以上の参加があった。

11. 若手優秀発表者の表彰：懇親会における座長を兼ねて、よい発表を選んで、小さな贈り物をするに決めた。選び方は、大学院生または20代の研究者の中から、口頭発表は各セッションにつき1名を座長団が選び、ポスター発表は参会者全員の投票により上位5名を選んだ。下記の方々が選ばれた。少し女性に甘いものではともいわれたが、今後の励みになるとの声を聴き、心強かった。Steven Kraines(東大工)、小畑元(京大化研)、山本恵幸(東大海洋研)、善養寺一也(筑波大化)、猪俣弥生(名大太陽研)、錦織隆美(都立大理)、松本潔(名大気水圏研)、榎原友康(名大理)、Dragusanu Cristaian(名大院理)、菅原透(秋田大鉱山)、島岡(九住)晶子(東大原子核研)、付鳳富(東京農工大農)、三浦典子(名大理)、小池素子(北大院地球環境)、村山正樹(名大理)、西村崇(近

大理工), 津波綾乃 (琉球大理), 林 秀 (資環研地殻工), 宮崎あかね (東大院総合), 長岡智子 (琉球大理)。

12. 学生達の企画: 写真班 (スナップ写真を多数撮り, 直ちに現像し, 貼りだし, 実費で販売する), アルコール班 (缶ビールなどを安く仕入れ, 4時過ぎに実費で売り出す), 懇親会もり立て班 (そーめん流しなど企画) など, 受付係, 会場係など通常の役割を分担したほかにアルバイト料なしで (学生といえども会員であるから), 活躍した。彼らの労をねぎらいたい。

13. 参加登録者数: 合計452, うち予約者は一般が196 (会員190, 非会員6), 学生が114 (会員45, 非会員69), 当日登録は125 (うち学生33), 名誉会員および招待者が17であった。参加費を2,000円, 懇親会費を5,000円としたが, 予約すると, 会員は各1,000円引き, 学生会員は2,000円引きとした。要旨集も4,000円としたが, 予約すると500円引きにした。その結果, 当日の現金取り扱いが減り, 受付が楽になった。また, 学生会員は安くするが, 学生だからといって安くするわけではないとしたが, これが一部徹底されない向きもあったので, 速やかに入会することを条件に学生会員並とした。学生会員を優遇する根拠は, 将来この学問を背負って立ってもらいたいばかりでなく, 年会その他の学会活動は会員の奉仕で成り立っており, その奉仕を期待しているからである。

14. 出席者数: 各会場で1時間おきに数えた出席者数の平均値を次に示す。なお, 課題, A, B, C, Dは27日午前, 午後, 28日午前, 午後の順で, 研究会は主題リスト順である。課題討論 (42, 40, 47, 42), A (41, 43, 41, 31), B (36, 41, 34, 41), C (36, 24, 32, 28), D (23, 34, 38, 37), 夜間セッション (187), ポスター講演 (134), 休憩室29日禁煙 (6—20, 15), 喫煙 (3—12, 7), 研究会30日午前 (27, 25, 38, 40, 16, 25), 午後 (25, 26, 42, 34, 23, 20)。夜間セッションが特に多いほかは, 概ねよく分散したようである。

15. 会計報告: 収入関係 (千円単位) は, 参加 (543), 懇親会 (776), 要旨集 (1,312), エクスカーション (72), 学会より (300), 助成金 (1,100), 展示を含む寄付金 (700), 計 (4,803) であった。同じく支出関係は, 会場借料 (699), 謝礼交通費 (688), 物品 (115), ポスター関係 (151), 印刷 (824), 郵送通信 (192), エクスカーション (70), 茶菓弁当

(196), 写真 (20), 懇親会学生慰労会 (1,330), 評議員会 (51), 計 (4,336) であった。剰余金のうち30万円を地球化学若手会に寄付し, 残りは当研究室の学生の学会出席旅費の補助に当てることにした。

16. 要旨集に残部があります。入手ご希望の方は, 1部 (送料込み) 2,500円を〒060 札幌市北10西5 北大院地球環境角皆静男に定額小為替でお送りください。2部以上の場合は, 1部につき1,000円追加してください。

酸性雨講演会「酸性雨の化学と 森林枯渇解明の化学」

表記シンポジウムのお知らせがまいりましたので, ご案内いたします。

主催: 大気循環学会酸性雨分科会, 酸性雨研究会

共催: 大気循環学会近畿支部, 大気の測定と反応部会, 気象拡散部会, エアロゾル部会, 生物影響部会, 人体影響部会, 環境文化研究会, 近畿地方大気汚染調査連絡会, 環境技術研究協会

日時: 1997年7月23日(水)

13:10~16:50 (会場: 13:00)

場所: 大阪府教育会館「たかつガーデン」8F たかつ東中の間

(大阪市天王寺区高津7-11; Tel: 06-768-3911; 近鉄上本町駅北東徒歩3分, 大阪駅より東梅田駅乗換, 地下鉄谷町線谷町9丁目駅東徒歩7分)

講演終了後, 懇親会を行います。世話人: 田口, 西川 (大阪府公害監視C), 藁科 (大阪市環科研), 松本 (奈良県衛研), 谷尾 (京都府), 広瀬 (京都市), 玉置, 平木, 正賀 (兵庫県公研)

連絡先: 玉置元則 (〒654 神戸市須磨区行平町3-1-27, 兵庫県立公害研究所, Fax: 078-735-7817)

参加者は必ず事前にはがきかFaxで申し込んでください (先着150名)。

“Biogeochemical Processes in the North Pacific” の配布の案内

昨年11月12~14日に本会等の共催による標記のシンポジウムがむつ市において開かれました。そこでの発表論文45編をもとに同名の本 (B5版418ページ, 編集者: 角皆静男) が編集発行されました。ご希望の方には差し上げますので, 下記によりお申し込みください。

なお, 申し訳ありませんが, 郵送料手数料として, 定額小為替または現金で1部につき500円ずつお送りくださるようお願い申し上げます。

申込先: 〒060 札幌市北区北10西5 北大院地球環境 角皆静男 (Tel: 011-706-2368, Fax: 011-706-2247, E-mail: mag-hu@ees.hokudai.ac.jp)

1997年度日本水文科学会学術大会及び 総会のお知らせ

大会期日: 1997年6月14日(土)~15日(日)

大会会場: 千葉大学自然科学研究科大会議室

〒263 千葉市稲毛区弥生町1-33

大会費用: 参加費 1,000円

(大学院・学部学生500円)

予稿集代 2,000円

懇親会費 5,000円

(大学院・学部学生3,000円)

問い合わせ先: 〒305 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学地球科学系

日本水文科学会事務局 嶋田 純

Tel/Fax: 0298-53-2568

E-mail: jahs@erc2.suiritsukuba.ac.jp

http://wwwsoc.naccis.ac.jp/jahs/index.html

なお, 6月13日には, 日本水文科学会, 日本地下水学会主催で, 合同シンポジウム「水・循環と環境」も開かれます。場所は日本学術会議講堂で参加費は無料です。

生物・地球環境試料の超長期保存ネットワーク に関する国際ワークショップのお知らせ

このワークショップは地球化学会も後援しております。

開催日: 1997年11月3日~6日

開催地: 大阪府豊中市, 千里ライフサイエンスセンター

後援: 大阪府, 財団法人万国博覧会記念協会, 日本地球化学会 (他約20学協会予定)

目的: 西暦2001年を期して, 南極の高地ドームFuji上に20世紀の生物・地球環境を代表する試料を自然界冷凍保存し, 超長期にわたる遺伝子レベルでの地球環境影響評価に役立てる。

会議用語: 英語

アブストラクト: 150~250ワード (締切1997年6月15

日)

関連分野: 生物, 環境科学 (特に, 生物, 環境試料保存, 古環境の再現, 生物による環境モニタリング等), 生命, 環境, 極地科学, 等

申込先: 組織委員長 柴田俊一 (問い合わせ: 実行委員長 江藤剛治)

〒577 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学内

Tel: 06-721-2332; Fax: 06-730-1320

第19回宇宙ステーション利用計画 ワークショップ開催のお知らせ

表記ワークショップの案内が参りましたのでお知らせいたします。

主催者: 科学技術庁, 宇宙開発事業団, 財宇宙環境利用推進センター, 財日本宇宙フォーラム

開催日: 1997年7月1日~2日

開催場所: 砂防会館 シェーンパッハ・砂防 (東京都千代田区平川町2-7-5)

内容: 宇宙ステーション日本取付型モジュール (JEM) の利用などに関する講演, 及び討議を行う。また, 宇宙ステーションの利用計画の概要を披露し, 各分野にわかれてのJEM利用方針に関する意見交換を行う。

問い合わせ先: 財宇宙環境利用推進センター

調査研究部 担当: 中野 邦男

〒169 東京都新宿区西早稲田36-30-16

Tel: 03-5273-2442; Fax: 03-5273-0705

人事公募のお知らせ

人事公募のお知らせが参りましたのでご案内いたします。

通商産業省工業技術院研究職選考 採用者の募集について

工業技術院の全国15の研究所では次のとおり研究者を募集しています。各所「募集概要」を必要な方は下記へ連絡願います。

①募集人員: 約30名。

②募集分野: 化学, 物理, 電子, 機械等広範囲な分野で募集しています。

③応募資格: 博士課程修了者または見込者 (学位取得が可能な者) かつ昭和39年4月2日以降生まれの者。

④給与: 博士課程修了後ただちに採用された場合は

265,400円の基本額と諸手当。

⑤提出書類：履歴書、学部・修士・博士それぞれの修了及び成績証明書、修士及び博士論文の要約、研究業績の要約2～3点等。

⑥公募メ切：平成9年7月31日。

⑦選考方法：提出書類等をもとに8月～9月上旬に採用予定の各試験研究所で行う予備審査と10月上旬に最終審査を実施して候補者を決定。

⑧採用予定日：平成10年4月1日。

⑨その他：公務員宿舍あり、土日祝日休み、有給・夏季休暇あり。

連絡先：筑波研究支援総合事務所 研究企画調整官室
Fax：0298-55-3833（電話での問い合わせ不可）

1996年度第2回「鳥居基金」 助成実施報告（TE-08）

氏名：大場 武（東京工業大学草津白根火山観測所）

助成：海外派遣（メキシコ国）

課題：IAVCEI 総会における研究発表

この度、日本地球化学会より「鳥居基金」として資金援助をいただき IAVCEI（国際火山学地球内部化学協会）総会に参加しました。本会は1997年1月20日から24日までメキシコ国 Puerto-Vallarta 市において開催されました。当地は約北緯20.5度に位置し温暖で晴天率が高くアメリカやカナダから多くの観光客が訪れる、まさに絶好の避寒地でした。ここに世界中から火山学者が集い、taco を頬張りながら corona で流し込み、時を忘れ研究成果の発表や科学的議論に熱中しました。参加者リストによると参加者総数は434名でそのうち日本人は火山学会関係者を中心に約50名に達しました。今回の総会の総合テーマは「火山活動と環境」でしたが特にこれに関した研究が多いわけではなく総会は全部で11のシンポジウムにより構成されました。私は「火山ガス」に参加し、最近噴火した九重火山の噴気や火山周辺の温泉水の化学組成および同位体組成に関する研究をポスターで発表しました。ポスター発表はお客さんが少ないと侘びしいものですが今回は来て欲しいと思っていた人達に来ていただき議論ができたので満足すべき成果を納めたと考えています。ただポスターの実質的な掲示可能時間が2時間程しかなく自分がポスターを掲示している間に同じセッションの他人のポスターを殆ど検討出来なかったのが非常に悔やまれます。20日から始まる総会に先立ち火

山ガスに関する Short Course が16日から18日にかけて開催されました。これは6名の火山ガスに関する研究の専門家から講義を受ける勉強会です。日本からは平林順一氏が「火山活動の化学的手法によるモニタリング」の専門家として招待されましたが直前に都合が悪くなり急遽私が代役を務めることになりました。聴講者は20名余りでした。他の5名の講師は W.Giggenbach を筆頭とする著名な研究者ばかりです。英語で発表をした経験がほとんどない私としては恐るべき経験でした。準備不足と英語力の低さから自己満足するにも程遠い講演でしたが多くの研究者と知り合いになりました。このために総会においても Short Course で知り合った人々と有意義な討論ができました。最終日のバンケットではメキシコ料理が振る舞われ趣向をこらした民族舞踊と仕掛け花火を楽しみました。今回の海外派遣は私の研究にとり実に意義深いものになりました。日本地球化学会および関係された各位に深く感謝いたします。

書 評

「火山とマグマ」

兼岡一郎・井田喜明編 240p.

東京大学出版 ISBN4-13-060716-2

定価3,400円（本体）

火山学は学際的な総合学問である。もちろん地球科学は、共通の研究対象を理解するために地質・地球物理・地球化学などの異なる手法を用いる、という意味ではどの分野も学際的といえよう。しかし、火山、特に火山活動の研究においては、それぞれの分野の手法から得られた理解を総合して最終的なモデルを作るということもさることながら、地震や地殻変動の観測データと火山ガスデータを見比べてその意味を探ることや、時には地球化学的観測を補足するための地球物理学的観測の立案なども必要となる。そのためには他分野で得られた結論を理解できるだけでなく、その手法、原理や可能性についても概略を理解する必要がある。本書はそのような火山活動の研究の概略を知るために有用であろう。

本書は東京大学の一般教養「全学自由研究ゼミナール」で行われた地震研究所の教官が中心の「もっと火山を知ろう」というオムニバス形式の講義を基に分担執筆された。読者として「火山に興味を持つ、大学生や地学関係教育者、火山周辺分野の研究者、火山防災

関係者」等が想定されており、「数式は必要最小限におさえ、高校卒業程度の知識があれば文系の学生でもその理解が出来るように心がけ」られている。そのため、新聞の科学欄程度には分かり易く、また火山、特に火山観測研究の概要を網羅しており、より専門的な教科書へ進むための手がかりとして良くできている。入門書であるために個々の研究に関する引用文献の全てのリストが付されていないが、各章の終わりには、次に読むべき教科書や総説などが文献として簡単な解説と共にリストされており便利である。

本書は、広い意味での火山学の概説を述べた第1部「火山とはなにか」、と火山活動研究の概説された第2部「火山観測と噴火予知」、の2部構成である。第1部は「地球および惑星の火山（兼岡）」「噴火現象と火山の一生（中田）」「マグマとは何か（藤井）」「マグマの誕生から噴火まで（井田）」から成り、地球・惑星科学における火山学の重要性も含めた広い範囲の現象について述べられている。それに対し第2部は「マグマの動きを探るには、地震波（武尾）、地殻変動（山科）電磁気（歌田）、火山ガス（野津）」「火山噴出物と噴火の推移予測（中田）」「火山の変動観測と噴火の予測（山科）」「火山活動と津波の発生（都司）」「火山噴火の予知をめざして（渡辺・鍵山）」など、対象を火山活動の研究に限定し、その様々な手法から将来への展望までの概説がされている。

第1部も独立して見るならば、火山学の広い分野を最新の理解に基づきながら簡潔に分かり易くまとめて

あり、よい入門書である。しかし、本書の特徴は第2部の「火山観測と噴火予知」ではないだろうか。このような主題での学会誌の特集号や総説集は今までにもあったが、専門的であったために、直接火山研究に関わらないもの（例えば火山防災関係者など）や入門者にとっては敷居が高かったと思われる。それに対し、本書では各観測項目によりどのような情報が得られ、それに基づいてどのような推測が可能か等が易しく述べられており、入門書として最適である。火山学全体の理解を得ることも重要ではあるが、「火山観測と噴火予知」に関しては、火山と共に生きている我が国の自治体や教育関係者などに訴えかけ続ける必要があることを考えると、本書の意義は大きいであろう。難点を挙げると、本書は240頁の読み易い分量にまとめているはあるが、その内容の項目が多すぎ散漫な印象をもった。特に第2部では多くの観測手法や事例をを網羅的に概説しようとしすぎているのではないか。個々の手法・事例を多く挙げるよりは、各観測の可能性と限界などについてより原理的な説明にもう少し多くの頁を割いて欲しかった。また同じ様な内容や事例が繰り返されている例が多いことも気になった。例えば、各手法に関しては原理等についてのみそれぞれ述べ、その後いくつかの火山噴火の例について、複数の観測手法の結果をまとめながら概観したほうが、理解を助けたのではないだろうか？

（篠原宏志 地質調査所）

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

ニュースが新しくなって、地球化学と合本化されて2号めとなりました。今後とも従来と同様、皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー（マックもしくはDos/Vいずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしく願います。次号の発行は8月下旬もしくは9月初旬頃を予定していますので、ニュース原稿は7月中旬までにお送りいただくよう、願います。

(編集担当 高橋和也)

編集担当者

高橋和也

〒351-01 埼玉県和光市広沢2-1

理化学研究所 核化学研究室

電話：048-467-9420

FAX：048-462-4654

E-mail：kazuyat@postman.riken.go.jp

米田成一

〒169 新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館 理工学研究部

1997年度日本地球化学会年会講演申し込み用紙

6月30日必着

受付番号：

講演日時	講演番号
講演題目 (和文)	
(英文)	
発表者氏名 講演者に○印。所属が複数の場合は氏名の右肩に番号をつける。 (漢字)	
(ひらがな)	
(英文)例:R.Ishiwatari	
発表者所属 複数の場合は所属の左肩に番号をつける。 (和文)	
(英文)	
講演抄録 和文で、150～180文字程度。	
キーワード 10文字以内の日本語。最大5個まで。言葉どうしは・で区切る。	

希望の□に×を記入してください。[]内に希望事項を記入してください。

課題講演	☐ 課題1	☐ 課題2	☐ 課題3	☐ 課題4
一般講演	☐ 口頭	☐ ポスター	☐ どちらでもよい	
発表分野(一般講演のみ)				
☐ 大気・降水	☐ 岩石・地殻	☐ 鉱床		
☐ 有機物	☐ 生物	☐ 陸水	☐ 温泉	☐ 熱水
☐ 堆積物	☐ 火山	☐ その他 []	☐ 地球外物質	☐ 海洋
OHP以外の機材の希望 []				

申込者連絡先

氏名	E-mail
住所	
TEL	FAX

博士論文抄録

浮遊性有孔虫殻中のアミノ酸のラセミ化反応による海底堆積物の年代測定に関する研究

Study of amino acid chronology of fossil planktonic foraminifera in marine sediment

(提出先; 名古屋大学大学院理学研究科, 1995年)

原田尚美 (Naomi Harada)

所属; 海洋科学技術センター海洋観測研究部

10⁵~10⁶年前は、第四紀に入り地球が最も激しく気候変動(氷期-間氷期変動)を繰り返す様になった時代である。従って、この時代の地球環境の変動を解明することは、今後の地球環境予測を行う上で重要な鍵となる。古海洋環境の解析には主に海底堆積物が用いられる。ところが上記の年代範囲に実用可能な年代測定法はほとんどない。そこで注目されるのがアミノ酸を利用した年代測定法である。

アミノ酸にはL体とD体の二つの光学異性体が存在する。一般に生体のアミノ酸はL体で、生物の死後、ある速度でD体へと変化する。この反応をラセミ化反応と呼ぶ。

$$\frac{L \text{ アミノ酸}}{k} = \frac{D \text{ アミノ酸}}{k}$$

ラセミ化反応は一次反応速度則に従って進行し、ラセミ化反応速度定数 (k) はアミノ酸の異性体比 (D/L) とそれに対応する年代 (t) が決まると以下の式で求めることができる。

$$\ln[(1+D/L)/(1-D/L)] - \ln[(1+D/L)/(1-D/L)]_0 = 2 \cdot k \cdot t$$

温度に変動がなければk値は一定で、ラセミ化反応は時間に依存して進行していく。従って、k値を求めておけば、アミノ酸の異性体比を上記の式に代入し、年代を算出する事ができる。そこで、精度よくk値を求め、どの程度の年代まで測ることができるのかを確かめることとした。

試料は西部太平洋赤道域で採取された炭酸塩堆積物である。まず、過去2万年にわたる海底堆積物から、有孔虫を取り出し、全種類を用いてアミノ酸の異性体比分析をガスクロマトグラフ法にて行った。その際、アミノ酸の中でもラセミ化反応速度の速いアスパラギン酸に注目した。又、同じ有孔虫試料に関して¹⁴C法で年代を求め、それを対照年代として上の式よりk値を求めることを試みた。

その結果、有孔虫を全種類で使用すると、精度よくk値を求めることができない場合があることがわかった。これは堆積物が強い溶解の影響を受けると炭酸塩殻が破壊を受け破片となっていく。その破片から一部のアミノ酸が滲みだし、その度合いによっては殻に残ったアミノ酸のk値を変えて

しまう可能性があるためである。従って、アミノ酸の異性体比分析には溶解に対して強い有孔虫を単一種で用いることが重要であることがわかった。このことをふまえ、同じ堆積物から溶解に対して強い種である *Pulleniatina obliquiloculata* を拾い出し、この殻のアスパラギン酸の異性体比を分析し、k値を求めたところ、 $0.84 \times 10^{-5} \text{ yr}^{-1}$ という値が得られた。

さらに、適用年代を広げるために、過去33万年の柱状試料より *P. obliquiloculata* を拾い出し、アスパラギン酸に加えて、グルタミン酸、イソロイシンのk値をそれぞれ求めた。グルタミン酸、イソロイシンは有孔虫殻中に比較的多く含まれ、アスパラギン酸より、ラセミ化反応速度の速いアミノ酸である。また、対照年代は¹⁴C年代と酸素同位体比法から見積もった。その結果、アスパラギン酸の $\ln[(1+D/L)/(1-D/L)]$ と年代の関係から、約2.5万年前で(異性体比にして0.24) ラセミ化反応速度が低下し、k値が変化することが確認された。このようなk値の低下の原因としては、継続的加水分解反応を受けにくいポリペプチドが地質時代を経て、次第に有孔虫殻中で増加していくことが関与していると考えられる。アミノ酸のラセミ化反応速度は継続的加水分解速度と密接に関係する。加水分解反応より活性化エネルギーの大きいラセミ化反応は、地質時代を経るに従い加水分解速度が低下していくのに引き続き、その速度の低下が生じたと考えられる。従って、この屈曲点でk値を二つに分けて算出した。現在から過去約2.5万年までの *P. obliquiloculata* が示すk値はほぼ $0.84 \sim 0.94 \times 10^{-5} \text{ yr}^{-1}$ という値であることがわかった。一方、過去2.5~33万年までの範囲では、 $0.99 \times 10^{-5} \text{ yr}^{-1}$ と得られた。また、グルタミン酸では $0.45 \times 10^{-5} \text{ yr}^{-1}$ 、イソロイシンで $0.88 \times 10^{-5} \text{ yr}^{-1}$ とそれぞれ見積もられた。以上の値を33万年以前の堆積物に外挿することが可能であれば、これらを使いわけることにより、深層水温下で、10⁶年までの海底堆積物の年代測定が可能といえる。

以上の結果から得られたアスパラギン酸のk値を用いて、過去27万年にわたる炭酸塩堆積物の年代を求めることを試みた。その結果は、従来海底堆積物に用いられる、酸素同位体比年代とほぼ矛盾のない年代値を示した。よって、アミノ酸のラセミ化反応年代測定法は、10⁵~10⁶年スケールの海底堆積物の年代を求める数少ない実用的な方法の一つであると判断された。

日本地球化学会ニュース

No. 150

1997. 8. 5

主な記事

1. 1997年度日本地球化学会年会プログラム及び最終のご案内
2. 研究助成「鳥居基金」募集について
(今年度後期分応募の締切を8月29日までにいたします)
3. 第24回日産学術研究助成候補者推薦依頼について(学会推薦)
4. 1998年地球惑星科学関連学会合同大会についてのお知らせ
5. その他(評議員会議事録、若手の会、シンポジウムのご案内など)



現在、日本地球化学会のホームページの暫定版を試験的に <http://info.riken.go.jp/lab-www/nuc-chem/GSHOME.HTM> にて運用しております。
ご参照くださるとともに、御意見等をお寄せください

1997 年度日本地球化学会年会

主 催：日本地球化学会 (共催 日本化学会)

日 時：9月17日(水)～19日(金)

会 場：東京都立大学教養部 (八王子市南大沢)

発 表：

一般講演 (質疑応答を含む発表時間：15分)

ポスターセッション：コアタイム 18日13:00～14:30

ポスターセッションは都立大学講堂ホール (総会・受賞講演会場の前) にて行われます。ポスターは学会初日午後より掲示していただき、学会終日の午前中に撤去していただきます。尚、9月18日(中日)の午後1時より2時半までポスター発表のコアタイムとさせていただきますので、活発なご討論をお願いいたします。ポスターのための掲示パネルの大きさは幅 120 cm、高さ 160 cm 程度です。最新の情報は年会ホームページをご覧ください。また、掲示のためのピンはポスター会場にてお受け取り下さい。

課題講演 (質疑応答を含む発表時間：原則 20分)

課題1 海洋地球化学の最前線 18日午前D会場

課題2 21世紀の宇宙化学を目指して

19日午前A会場

課題3 質量分析技術の新展開 17日午後A会場

課題4 地球環境変動史の解明に向けて

17日午後C会場

夜間セッション：「地球化学の将来について」

日時：9月17日(水) 17時30分よりD会場

内容予定：

- 1) 各分野の研究の動向 (国際, 国内) について：海洋, 環境, 大気, 地殻, 惑星探査ほか
- 2) 学会関係について：学会誌, 出版計画, 研連の将来と学会ほか

将来計画委員会では情報交換, 意見交換の場として標記夜間セッションを企画しました。上記のほかに話題をもっている方は時間配分の都合上委員会までコンタクト下さるとたすかります。

連絡先：将来計画委員会 石渡良志

総 会：9月18日(木) 14時30分から大ホールで開催

学会賞等受賞講演：9月18日(木) 16時00分から大ホールで開催

懇親会：9月18日(木) 18時00分から東京都立大学生協食堂で開催

予約:5,000円 学生:3,000円 予約外:6,000円

公開シンポジウム：「生命の起源と惑星探査」

文部省科研費補助金「研究成果公開促進費」の援助を受けて、中高大学生及び一般市民を対象として公開シンポジウムを開催します。

日時：9月13日(土) 13時30分から17時00分

場所：科学技術館サイエンスホール (千代田区北の丸公園)

講師及び演題 (仮題)：

下山晃 (筑波大教授) 「火星隕石に生命体：その後の進展」

熊沢峰夫 (名古屋大名誉教授) 「地球史解説：地球に生命はいつ誕生したか」

水谷仁 (宇宙研究所教授) 「惑星探査の今後：生命体の直接証拠を目指して」

連絡先：東京都立大学大学院理学研究科 海老原 充

講演申込締切：講演申込は終了いたしました。

講演申込締め切り日(6月30日)に準備委員会の予想を越えるメールが一時期に殺到しメールシステムにトラブルが発生してしまいました。この間当該アドレスにメールが送信できない状況が生じてしまい、多数の皆様にご迷惑をおかけしましたことをここにおわびいたします。また、このトラブルにより申し込みメールの一部が読み込み不可能となり、受け付けできない講演がでる可能性があることが分かりました。このことについては、年会ホームページ上でお知らせし該当者の連絡をお願いいたしました。現在のところ該当者からの連絡はございませんが、本ニュースに掲載されておりますプログラムをご覧になり、申し込まれた講演が受けつけられているかご確認下さい。万が一、申し込まれた講演が受け付けられていない場合は至急ご連絡下さい。できる限り講演可能のように善処いたします。

参加申込締切：8月15日(金) 17:00

予約参加登録, 懇親会, 要旨集の申込みは、ニュース No.149 添付の申込用紙またはそのコピーをご利用ください。また、電子メールでも受け付けます。講演申込時と同じトラブルをさけるため、都立大に複数のメールアドレスを、また日本大学文理学部にもメールアドレスを準備しました。

<電子メールによる参加申込の方法>

次のメールアドレスいずれか1つにメールを送付ください。Subject には sanko とご記入ください。

3台とも同じ書式を返送します。

geochem@comp.metro-u.ac.jp

gcformat@comp.metro-u.ac.jp

geochem@moegi.chs.nihon-u.ac.jp

書式に従って記入後、Subject は

sanka_moushikomi とし次のメールアドレスのうちの1つにメールを送付ください。

geochem@comp.metro-u.ac.jp

gc_sanka@comp.metro-u.ac.jp

geochem@moegi.chs.nihon-u.ac.jp

都立大は TRAIN 経由で日大は WIDE 経由でネットワークが接続されていますのでネットワーク的に近い方を御利用下さい。また締め切り直前は混みあうので余裕を持って申し込み下さい。参加申し込み受領後 24 時間以内に確認のメールを返送いたしますので、ご確認ください。不明な点があれば以下までメールをお願いします。

oura-yasuji@c.metro-u.ac.jp

もしくは tkoba@chs.nihon-u.ac.jp

参加費：予 約 会員 1,000円 学生会員 無料

非会員 2,000円 予約外 2,000円

要旨集：予 約 4,000円 (送料込)

予約外 5,000円

送 金：参加費, 要旨集代, 懇親会費は8月15日(金)までに郵便振替で送金ください。送金は

参加申込者一人ずつお送りください。もし、数人分まとめて送金する場合は申込書と通信欄にその旨をお書きください。

郵便振替 00100-3-362582

1997 年日本地球化学会年会準備委員会

宿泊の予約：東京都立大学生協同組合でお世話します。ニュース No.149 添付の資料を参照の上、8月26日(火)までにお申し込みください。詳しくは下記まで直接おたずねください。

〒192-03 東京都八王子市南大沢1-1

東京都立大学生協同組合 金 雀

Tel: 0426-77-1413; Fax: 0426-77-1410

年会申込・連絡先：

〒192-03 東京都八王子市南大沢1-1

東京都立大学理学部化学科

1997 年度日本地球化学会年会準備委員会

石渡良志

Tel: 0426-77-2532; Fax: 0426-77-2525

E-mail: rish@comp.metro-u.ac.jp

または 海老原 充

Tel: 0426-77-2553; Fax: 0426-77-2525

E-mail: ebihara-mitsuru@c.metro-u.ac.jp

年会 E-mail: geochem@comp.metro-u.ac.jp

年会ホームページ：

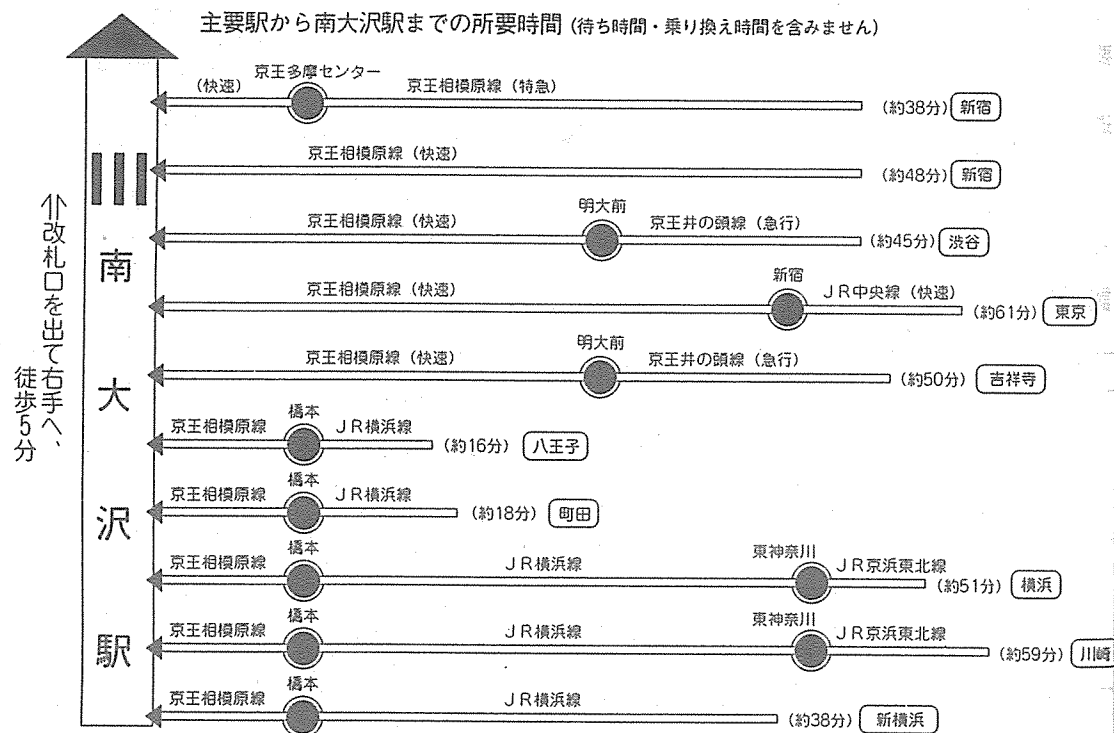
<<最新の情報はこちらでご確認ください>>

<http://www.comp.metro-u.ac.jp/~geochem>

講演等時間割

日付	会場	午 前		午 後			夜
17 日 (水)	A	受 付	質量分析	課題 質量分析技術の新展開			
	B		大気・降水(1) 陸水(1)				
	C		環境(1) 課題 地球環境変動史の解明に向けて				
	D		温泉・熱水・火山 海洋(1)			夜間セッション	
18 日 (木)	A	陸水(2)		ポスター コアタイム (講堂)	総会 (大ホール)	学会賞等 受賞講演 (大ホール)	懇親会 (生協食堂)
	B	大気・降水(2)					
	C	環境(2)					
	D	課題 海洋地球化学の最前線					
19 日 (金)	A	課題 21 世紀の宇宙化学を目指して			地球外物質		
	B	岩石・地殻					
	C	有機物			堆積物	生物	
	D	海洋(2)					

東京都立大学正門を入れて最初の建物。

[illegible]

一穂・山下 博

17B08 オホーツク海周辺域における大気エアロソ
ル中の水溶性無機イオンの特徴⁽¹⁾北海道東

- 海大院理工・²東大海洋研) ○亀山寿仁¹・植松光夫²
- 17B09 父島エアロゾル中の陸起源有機化合物の季節変化と流跡線解析との比較(¹北大低温研・²NASDA/SED・³北大院地球環境) ○石村豊¹・河村公隆¹・萩島 繁²・山崎孝治³
- 17B10 多環芳香族炭化水素類の長距離輸送—風向別エアロゾル試料を用いたアプローチ—(¹日さく・²農工大農・³島根県衛研) ○渡部貴史¹・高田秀重²・小倉紀雄²・中尾 充³
- (13:30~14:30) 座長: 松枝秀和
- 17B11 降水中の化学成分の定量—千葉県船橋市地域の降水中の化学成分—(東邦大理) ○岡村忍・吉池雄蔵
- 17B12 雨水中の化学成分濃度と風向との関係(慶大理工) ○畠中雄一郎・上野雅恵・成田 祥・田中 茂
- 17B13 レーザー顕微鏡, および顕微 FTIR を用いた降水中粒子の観察(¹名大太陽地環研・²静大理) ○古池聖生¹・鈴木 款²
- 17B14 大気降水中のブラックカーボンの見積もり(静大院理工) ○横堀尚之・鈴木 款
- (14:30~15:30) 座長: 佐久川 弘
- 17B15 衛星データによる植生生産の年々変動と大気 CO₂ 濃度変動との関連について(名大大気水圏研) ○福田邦彦・加藤喜久雄・小牧香織
- 17B16 炭素安定同位体測定による大気-植生間 CO₂ フラックスの観測(名大大気水圏研) ○加藤喜久雄・小牧香織・福田邦彦
- 17B17 森林大気中二酸化炭素の炭素安定同位体比と森林システムの炭素同位体効果(¹農工大・²国立環境研) ○内田昌男¹・野尻幸広²・向井人史²・町田敏暢²・小倉紀雄¹・安部喜也¹
- 17B18 年輪の炭素同位体比を利用した樹木の環境ストレス診断法(¹電力中研・²神奈川県森林研) ○坂田昌弘¹・鈴木 清²
- 一般講演 [陸水 (1)]
- (15:30~16:30) 座長: 鶴崎 実
- 17B19 石灰岩地域の湧水量を規定している因子と湧水量予測(琉球大理) 渡久山 章
- 17B20 濃尾平野の地下水の流動(¹愛知教育大・²若戸小) ○外山拓哉¹・山口満²・杉浦 孜¹
- 17B21 山地小流域における溪流水の水質形成(¹九大理・²九大農・³東和大工) ○藤 哲士¹・吉村和久¹・井倉洋二²・下村恵二³
- 17B22 天然水および飲料水中の活性酸素種の計測(¹広大総科・²広大生物圏科学・³科技振興事業団) ○佐久川 弘¹・増田直樹²・新垣雄光³
- C 会場
- 一般講演 [環境 (1)]
- (9:30~10:45) 座長: 成田尚史
- 17C01 カリフォルニア沖 ODP Site1017 地点における過去 3 万年の堆積物の主要鉱物・化学組成に基づく碎屑物供給源変動の復元(東大

- 理) ○佐藤宗平・多田隆治・Leg167 乗船研究者一同
- 17C02 カリフォルニア沖堆積物の過去 3 万年における有機炭素, ステロールの変動: ODP Leg167 Hole1017E の解析-I(都立大理) ○松本公平・吉川博康・石渡良志・ODP Leg 167 乗船研究者一同
- 17C03 カリフォルニア沖堆積物(ODP Leg 167, site 1017) 中の陸起源有機物: 熱分解メチル化法による解析(¹都立大理・²創価大教育) ○吉川博康¹・山本修一²・松本公平¹・石渡良志¹・ODP Leg 167 乗船研究者一同
- 17C04 有機物組成からみたカリフォルニア縁辺海の第四紀古環境変動(¹地調・²東大理) ○山本正伸¹・山室真澄¹・田中裕一郎¹・多田隆治²・ODP Leg 167 乗船研究者一同
- 17C05 過去 25 万年間における北太平洋海洋底コア中のレス石英の変動(¹名大大気水圏研・²地調) ○岡本孝則¹・松本英二¹・川幡穂高²
- (10:45~12:15) 座長: 山本正伸
- 17C06 北西太平洋(シャツキーライズ)における過去 50 万年間の海洋環境復元(北大院地球環境) ○山根雅之・大場忠道
- 17C07 南大洋・タスマン海台域における海洋環境変動(その 2)—生物生産と大気循環の時系列変化—(¹科博・²北大低温研・³東大海洋研) ○池原 実¹・河村公隆²・大河内直彦²・平朝彦³
- 17C08 サンゴの Mg/Ca・Sr/Ca 古水温計を用いた沖縄-完新世の海水温変動の復元(¹名大大気水圏研・²名工大・³琉球大) ○三ツ口丈裕¹・松本英二¹・内田哲男²・河名俊男³
- 17C09 微量元素から得られる古環境情報(北大院地球環境) ○成田尚史・佐藤昌泰・角皆静男
- 17C10 深海底堆積物の精密な Sr 同位体比分析による古環境解析(¹名大院理・²地調) ○浅原良浩¹・田中 剛¹・西村 昭²
- 課題講演 [地球環境変動史の解明に向けて]
- コンピーナー: 福沢仁之・奈良岡浩
- (13:30~17:00)
- 17C11 黄土から得られる古気候の磁気 proxy(¹海科セ・²京大理) ○福岡浩司¹・鳥居雅之²
- 17C12 タケラマカン砂漠の風成堆積物の堆積学的・鉱物学的・地球化学的特徴(¹熊大自然科学・²熊大理・³理研) ○本多将俊¹・清水 洋^{1,2}・高橋和也³・矢吹貞代³
- 17C13 東アジアの湖沼・内湾・レス堆積物による過去 36,000 年間の地球環境変動の高精度復元(¹北大院地球環境・²都立大院理) ○大井圭一¹・福沢仁之²・山田和芳²・斎藤耕志²・加藤めぐみ²
- 17C14 大気中¹⁴C 変動と海洋循環(国際日本研セ) 北川浩之
- 17C15 尾瀬ヶ原泥炭中のセルロース, リグニン成分の $\delta^{13}\text{C}$ の変動(¹農工大農・²名大年代測

- 定セ・³農環研) 養毛康太郎¹・○赤木 右¹・米村祥央¹・中村俊夫²・陽 宗興¹・鶴田治雄³
- 17C16 地中海 ODP コア 969F 腐泥中の炭素・窒素同位体比より推測する古環境変動(¹北大院地球環境・²北大院理) ○南川雅男¹・四方美穂¹・坂本竜彦²・大場忠道¹・小泉 格²
- 17C17 分子レベル炭素同位体比の日本海古環境解析への応用(都立大理) ○山田桂太・松本公平・奈良岡 浩・石渡良志
- 17C18 琵琶湖湖底堆積物の環境岩石磁気学的研究(¹京大院人間環境・²京大院理・³同志社大理工研) ○国子克樹¹・鳥居雅之²・竹村恵二²・林田 明³
- 17C19 琵琶湖コア試料中の無機化学組成の高分解能垂直分布(北大院地球環境) ○豊田和弘・篠塚良嗣・長谷部 清
- D 会場
- 一般講演 [温泉・熱水・火山]
- (9:30~10:45) 座長: 篠原宏志
- 17D01 指宿海岸性温泉水にみる B-Cl 両同位体比を用いた源泉分類法(ユトリヒト大) ○武蔵正明
- 17D02 温泉ガスの挙動の長期連続観測:1997 年 3 月 16 日愛知県東部を震源とする地震(M=5.8)に伴う変動(名大院理¹・名大院人間情報²・名城大³) ○伊藤貴盛¹・永峰康一郎²・川邊岩夫¹・杉崎隆一³
- 17D03 山川地熱発電所の地熱井内および地表配管に付着した硫化物スケールの析出機構について(¹石油資源開発地熱開発部・²九州地熱) ○安田善雄¹・岡田浩明¹・佐久間弘二²
- 17D04 硫黄および酸素同位体比からみた活動的火口湖下部のマグマ-熱水系(¹岡山固体地球セ・²東大院総文・³室蘭工大応化) ○日下部 実¹・高野穆一郎²・安孫子 勤³
- 17D05 硫黄島(東京都)噴気のヘリウム同位体組成(¹東大理・²東大地震研・³防衛大・⁴岡山大) ○中井俊一^{1,2}・佐藤雅規¹・野津憲治¹・脇田 宏¹・細江守一³・菅 浩伸^{3,4}
- (10:45~12:15) 座長: 中井俊一
- 17D06 九重火山の火山ガス組成から推定されるガスの圧力(¹東工大草津白根火山観測所・²東大理) ○大場 武¹・平林順一¹・野上健治¹・佐藤雅規²
- 17D07 火口近傍における大気拡散に伴う火山噴煙の化学組成変化(¹地調・²東工大草津白根火山観測所) ○篠原宏志¹・大場 武²
- 17D08 深層気体と非火山性地熱気体の不活性気体研究(¹秋田大鉱山・²東大理・³三菱総研・⁴福岡大理) ○北 逸郎¹・長尾敬介²・上田 晃³・田口幸洋⁴
- 17D09 シベリア東部亜大陸下マントルの希ガス組成(予報)(東大地震研) ○山本順司・兼岡一郎
- 17D10 大西洋中央海嶺 TAG 熱水マウンドにおいて

- 採取された枕状玄武岩中の希ガス組成(¹阪大理・²大阪市大理・³海技セ) ○和田直子¹・Pinti D. L.¹・松田准一¹・益田晴恵²・藤岡換太郎³
- 17D11 背弧海盆玄武岩中の窒素同位対比(¹東大理・²広大理) ○西尾嘉朗¹・高畑直人²・佐野有司²
- 一般講演 [海洋 (1)]
- (13:30~14:45) 座長: 大田啓一
- 17D12 海洋の物質循環の生態平衡の研究手法(¹静大理・²水圏科学コンサルタント) ○鈴木 款¹・B. Casareto²
- 17D13 トライセクター型二重収束高分解能質量分析計を用いた地球環境中における PCB の挙動に関する研究(¹新日本気象海洋環境創造研・²国立環境研) ○松村 徹¹・増崎優子¹・坪田博行¹・池田善郎¹・萱木洋一¹・伊藤裕康²・森田昌敏²
- 17D14 海洋中の粒子態イオウの分析について(¹静大院理工・²静大理・³三菱化学) 大野敦史¹・○高山力也¹・鈴木 款²・伊藤日本男³
- 17D15 人工衛星を用いたクロロフィル a 量と生物起源硫黄化合物量の推定(¹慶大理工・²千葉大環境リモートセンシング研セ) ○成田 祥¹・高山由華子¹・田中 茂¹・竹内延夫²
- 17D16 三河湾における海洋生物起源硫黄化合物の挙動(¹慶大理工・²名大太陽地環研) ○池原庸介¹・田島真幸¹・田中 茂¹・松永捷二²
- (14:45~15:45) 座長: 鈴木 款
- 17D17 三次元励起・蛍光光度法による海水中の溶存有機物質のキャラクタリゼーション(¹近畿大理工・²放医研・³原研) ○鈴木康弘¹・中口 譲¹・青野辰雄²・山田正俊²・長尾誠也³・平木敏三¹
- 17D18 チャオプラヤ川(タイ)河口域における陸源有機物の分布(¹名大大気水圏研・²東大海洋研) ○渡辺陽巳¹・大田啓一¹・沢田健¹・野崎義行²
- 17D19 海洋における溶存有機物の動態(¹近畿大理工・²関西総合環境セ) ○木村宗人¹・服部裕史¹・山口喜敬¹・中口 譲¹・平木敏三¹・坪田博行²
- 17D20 初島沖冷湧水域におけるシロウリガイ中の微量元素(¹放医研・²海技セ) ○張 勁¹・石井紀明¹・中村 清¹・藤倉克則²
- (15:45~16:45) 座長: 長尾誠也
- 17D21 宮古島サンゴ礁における有機物の挙動について(¹静大・²水圏科学コンサルタント) ○篠村理子¹・鈴木 款¹・Beatriz E. Casaretor²・吉田勝美²
- 17D22 宮古島サンゴ礁における窒素循環モデル(静大) ○黒澤勝彦・鈴木 款
- 17D23 サンゴ骨格と海水間の希土類元素の分配—石灰化に対する周辺海水の影響の考察—(¹農工大農・²資源環境技術研・³琉球大熱帯生物

園セ) 橋本陽子¹・○津野 宏¹・付 鳳富¹・
田尾博明²・中野義勝³・赤木 右¹
17D24 東シナ海陸棚縁辺部における粒子の輸送過
程(放医研) ○山田正俊・青野辰雄・張 勁
夜間セッション [地球化学の将来について]

(17:30~)

- (1) 各分野の研究の動向(国際・国内)について
(2) 学会関係について
ほか。

第2日(9月18日)

A 会場

一般講演 [陸水(2)]

(9:00~10:15) 座長: 渡久山 章

- 18A01 阿蘇火山灰土によるリン酸アンモニウムの
吸着(熊本県保健環境研) ○藤田一城・廣畑
昌章・松崎達哉・松下 裕・松岡良三
18A02 霞ヶ浦におけるメタン酸化(¹国立環境研・
²環境研究セ・³東京水産大) ○内海真生¹・
野尻幸宏¹・野沢岳史²・大槻 晃³
18A03 砂質土壌及び花崗岩層における地下水有機物
の特徴(¹原研・²カナダ原子力公社・³神戸大)
○長尾誠也¹・R.R.Rao²・R.W.D.Killey²・
J.L.Young²・藤嶽暢英³・村岡 進¹
18A04 酸性降下物量の指標としてのトッファ中の
硫酸塩(九大理) ○藤野剛聡・吉村和久
18A05 台湾タロコ峡谷石灰岩地域における水循環
と水質形成(¹九大理・²九農大・³太魯閣國
家公園管理處)・⁴九電産業) ○吉村和久¹・
井倉洋二²・劉 慶男³・陳 孟江³・能登征
美⁴・中尾彩弥子¹

(10:15~11:30) 座長: 吉村和久

- 18A06 沿岸域における微量元素の共同沈殿除去過
程に関する研究—多系水酸化物担体の形
成機構および構造について—(近畿大理工)
○西村 崇・中口 謙・鈴木康弘・平木敬三
18A07 河川堆積物中の希土類元素存在度に見られ
るテトラド効果(名大院理) ○榊原智康・川
邊岩夫
18A08 地震前後の神戸地下水における親石元素組
成の変動(¹神戸大理・²金沢大 LLRL) ○井
上睦夫¹・杉本幸司¹・中村 昇¹・小村和久²
18A09 酸素・水素安定同位体比、化学成分濃度によ
る河川流出成分の識別(¹秋田大・²水
建設コンサルタント) ○川原谷 浩¹・松葉
谷 治¹・松田英裕²
18A10 富士山周辺地下水の涵養源に関する同位体
的、化学的研究—東富士と西富士の特徴—
(¹地球科学研・²名大) ○中井信之^{1,2}・浅井
和見¹

B 会場

一般講演 [大気・降水(2)]

(9:00~10:00) 座長: 高田秀重

- 18B01 海洋大気中における揮発性硫黄化合物; 南
極観測船「しらせ」における観測から(名大

- 太陽地環研) ○猪俣弥生・松永捷司・林 政
彦・長田和雄・岩坂泰信
18B02 海洋大気中におけるアルデヒドの濃度分布
及びその挙動について(慶大理工) ○平塚雅
嗣・駒崎雄一・田中 茂
18B03 東インド洋上における非メタン炭化水素の
分布(¹北大低温研・²国立環境研) ○斉藤拓
也¹・横内陽子²・河村公隆¹
18B04 大気中の揮発性有機化合物の測定(新日本気
象海洋環境創造研) ○水谷 太・松村 徹・
坪田博行・池田善郎・荻木洋一

(10:00~11:00) 座長: 柳沢文孝

- 18B05 自動車汚染の分子指標としてのベンゾチア
ゾールアミン類の評価(農工大農) ○熊田英
峰・高田秀重・小倉紀雄
18B06 中国、新疆の地表付近における大気浮遊ダ
ストの科学的、鉱物学的性質および、環境へ
の地球化学的影響(¹理研・²中国科学院新疆
生物土壤沙漠研) ○岡田昭彦¹・矢吹貞代¹・
常 青²・樊 自立²
18B07 中国、新疆、ジュンガル盆地の胡楊樹にみ
られる希産炭酸塩鉱物(¹理研・²中国科学院
新疆生物土壤沙漠研) ○矢吹貞代¹・岡田昭
彦¹・常 青²
18B08 中国黄土のリーチング実験と Sr・Nd 同位
体組成(¹筑波大地球・²国立環境研・³中日
友好環境保護セ) ○横尾頼子¹・中野孝教¹・
西川雅高²・全 浩³・任 劍璋³

(11:00~12:00) 座長: 坂田昌弘

- 18B09 屋久島生態系における酸性化とカルシウム
欠乏の関係(¹筑波大地球・²筑波大環境・³国
立環境研) ○中野孝教¹・奥村維男²・横尾頼
子¹・佐竹研一³
18B10 対流圏上部における水素濃度の変動(気象研
地球化学) ○松枝秀和・吉川久幸・石井雅男
18B11 大気 CO₂濃度- $\delta^{13}\text{C}$ 関係からみた
IPCC1995 の人間活動起源 CO₂ の収支見積
もりの評価(名大大気水圏研) ○小牧香織・
加藤喜久雄
18B12 高高度における水蒸気の $\delta^{18}\text{O}$ 観測(名大大
気水圏研) ○藤森俊雄・加藤喜久雄

C 会場

一般講演 [環境(2)]

(9:00~10:00) 座長: 相沢省一

- 18C01 イスア縮状鉄鉱層中のアパタイトに伴う炭
質物について(¹都立大・²名大) ○¹吉岡秀
佳・²高野雅夫
18C02 K/T 境界と P/T 境界の炭化水素(筑波大
化) ○三田 肇・下山 晃
18C03 K-T boundary 中の白金属等多元素の分布
プロフィール: 海洋環境の回復(電通大) ○塩
川貴洋・増田彰正
18C04 環境の地質学的変化を反映するランタニド・
テトラド効果の変動(¹電通大・²地調) ○増
田彰正¹・下田淳二¹・上岡 晃²

(10:00~11:00) 座長: 三田 肇

- 18C05 三宝山帯チャートと美濃帯チャートの地球
化学的特徴の比較(¹熊大院自然科学・²熊大
理・³理研) ○國丸貴紀^{1,3}・清水 洋^{1,2}・高
橋和也³・矢吹貞代³
18C06 韓国ヨンウォル(Yeongweol) 地区カンブリ
ア紀及びオルドビス紀炭酸塩岩の化学組成
(¹群馬大工・²東大院理) ○相沢省一¹・赤
岩英夫¹・松本 良²・杵島正洋²
18C07 北部日本海堆積物中の微量元素から見た環
境変化(北大院地球環境) 成田尚史・○西部
美可・角皆静男
18C08 日本海における後期第四紀海洋環境変動に
伴う有機炭素および燐の埋積速度変化(¹東
大理・²Univ. British Columbia) ○多田隆
治¹・佐藤宗平¹・松井裕之¹・入野智久²

(11:00~12:15) 座長: 多田隆治

- 18C09 日本海北東部の柱状堆積物における元素濃
度の鉛直変化(地調) ○寺島 滋・池原 研・
中嶋 健・片山 肇・井内美郎・今井 登
有孔虫化石の酸素同位体比から推定される
最終氷期最寒期の日本周辺の海洋環境(北大
院地球環境) ○大場忠道・山根雅之
18C11 バイカル湖の湖底泥コア(VER96/2 St.3
GC) 中の有機成分による古環境変動の解析
(¹東北大院理・²大妻女大社会情報) ○丹地
千鶴¹・松本源喜²・尾田武文¹・箕浦幸治¹
18C12 バイカル湖表層堆積物におけるステロール
の組成分布とその支配環境要因(¹東海大
洋・²大妻女大社会情報・³国立環境研) ○関
根理恵¹・西村弥生¹・松本源喜²・河合崇欣³
18C13 バイカル湖の湖底堆積物コア(BDP96-1) 中
の有機成分による大陸内部における環境変
動の推定(¹農工大農・²大妻女大社会情報・
³東理大理・⁴東邦大理・⁵国立環境研・⁶東海
大海洋) ○小作さゆり¹・松本源喜²・西みゆ
き³・吉野由美³・日向ルミ子²・高松信樹⁴・
竹村哲雄⁵・河合崇欣⁵・赤木 右¹・西村弥
生⁶・安部喜也¹

D 会場

課題講演 [海洋地球化学の最前線]

コンピーナー: 野崎義行・加藤義久

(09:00~12:30)

座長: 川幡穂高

- 18D01 海洋の有機光化学反応(名大大気水圏研) 大
田啓一
18D02 海洋エアロゾルの有機地球化学(北大低温
研) 河村公隆
18D03 北太平洋高緯度海域における表層二酸化炭
素分圧の時空間変動(¹国立環境研・²地球人
間環境フォーラム・³カナダ海洋科学研) ○野
尻幸宏¹・Jiye Zeng²・C.S.Wong³・藤沼康
実¹

座長: 河村公隆

- 18D04 大気中 CO₂の吸収に関する Continental_9

Shelf Pump(北大院地球環境) 角皆静男

- 18D05 気候変動に呼応した西太平洋暖水塊のエネ
ルギーおよび物質輸送(地調/東北大院理)
川幡穂高
18D06 サンゴ骨格年輪による気候復元(名大大気水
圏研) 松本英二
座長: 野尻幸宏
18D07 熱帯域における閉鎖的海盆の深層水の化学
的性質: スーロー海、南シナ海、アンダマ
ン海(¹東大海洋研・²東海大海洋) ○蒲生俊
敬¹・加藤義久²・蓮本浩志¹・野崎義行¹・白
鳳丸 KH-96-5 次航海乗船研究者一同
18D08 深海底における重金属の濃度異常の意味す
るもの(滋賀県立大環境) 中山英一郎
18D09 海水中の単核種 REE 濃度と海水中の REE
存在度に見られるテトラド効果の起源(名大
理) ○川邊岩夫・太田充恒・三浦典子

P 会場

ポスターセッション

(13:00~14:30)

- 18P01 日本で採取された風送塵の Sr, Ce, Nd 同
位体比(¹地調・²気象研) ○上岡 晃¹・五十
嵐康人²・広瀬勝己²
18P02 Sr・Nd 同位体組成による中部日本、川上流
域における火山岩土壌の起源物質の推定(筑
波大地球) ○横尾頼子・中野孝教
18P03 中部日本、川上流域における降水、土壌水、
河川水の Sr 同位体組成および元素組成変化
(筑波大地球) ○中野孝教・横尾頼子・田中
正
18P04 鶴岡市、山形市におけるエアロゾル中のスト
ロンチウム同位体比(¹山形大・²理研) ○田
中真理子¹・柳澤文孝¹・矢吹貞代²
18P05 海上の大気境界層中でのヨウ素の循環過程
とそのオゾン光化学への影響(京大防災研)
豊田賢二郎
18P06 森林大気中二酸化炭素の酸素安定同位体比
の日変化および季節変化(¹農工大・²国立環
境研) ○内田昌男¹・野尻幸宏²・向井人史²・
町田敏暢²・小倉紀雄¹・安部喜也¹
18P07 大気中の非メタン炭化水素の炭素安定同位
体比測定(名大大気水圏研) ○角皆 潤・豊
田 栄・内田雅晴・吉田尚弘
18P08 洞窟内大気中²²²Rn 濃度の変動要因につい
て(琉球大理) ○伊波秀敏・棚原 朗・平良
初男
18P09 蔵王の樹氷の化学組成(山形大理) ○柳澤文
孝・斉藤正樹・矢野勝俊
18P10 海底熱水鉱床の地球化学的研究-伊平屋海凹
北部海丘の海底熱水活動(¹琉球大理・²九大
理・³京大原子炉) ○李 受映¹・大森 保¹・
千葉 仁²・高田實彌³
18P11 近過去の琵琶湖・バイカル湖における安定
同位体比の変動(2)(京大生態学研セ) ○小
川奈々子・和田英太郎

- 18P12 An investigation of the long-term temporal variation in the organic carbon content preserved in Lake Baikal sediments: results from BDP96-2 core(都立大院理) ○David Brincat・石渡良志
- 18P13 バイカル湖湖底堆積物コア(BDP96/1)中の無機成分による古環境変動の推定(1東邦大理・2大妻女大社会情報・3東邦大医・4国立環境研) ○高松信樹¹・松本源喜²・加藤尚之³・今橋正征¹・川村隆夫¹・近藤久美子¹・児玉 恵¹・河合崇欣⁴
- 18P14 琵琶湖湖水及び堆積物間隙水中の溶存無機炭酸の¹⁴C/¹²C, ¹³C/¹²C比と炭素循環(1名大年代測定セ・2愛知医大・3名大理・4滋賀県琵琶湖研・5富山大理) ○中村俊夫¹・小島貞男²・太田友子¹・小田寛貴³・池田晃子¹・横田喜一郎⁴・水谷義彦⁵
- 18P15 タイ国バンナラ河水系における気象変動に対するN₂O放出の動態(京大生態学研セ) N.Boontanon
- 18P16 河川水中の希土類元素の存在状態と分別(1農工大農・2資源環境研) 小林紀和¹・赤木 右¹・○付 鳳富¹・田尾博明²
- 18P17 北関東地域の河川及び湖沼水中のランタノイド元素濃度(1丸文・2北里大・3東北大・4農環技研) ○高久雄一¹・神代大樹²・島村匡²・山崎慎一³・津村昭人⁴
- 18P18 地表物質中の水質とその変化(1)(地調) ○金井 豊・上岡 晃・月村勝宏・金沢康夫・関陽児・濱崎隆志・中嶋輝允
- 18P19 八幡平トロコ地すべり地の地下水における水-岩石相互作用について(1秋田大鉱山・2秋田県衛研) ○小林勝人¹・松葉谷治¹・川原谷浩¹・武藤倫子²
- 18P20 熱分解メチル化法による海洋堆積物(ODP Leg 167, site 1017)中有機物の解析(1創価大教育・2都立大理) ○山本修一¹・吉川博康²・石渡良志²・ODP Leg 167 乗船研究者一同
- 18P21 カリフォルニア沖 ODP Site 1017 地点における過去3万年の堆積物微量元素(1Univ. British Columbia・2東大理) 入野智久¹・T.F.Pedersen¹・○多田隆治²・Leg167 乗船研究者一同
- 18P22 サンゴ礁における有機炭素・無機炭素生産とCO₂フラックス(琉球大理) ○真栄平 司・長岡智子・大森 保
- 18P23 サンゴ礁における²³⁴Th・²³⁸U非平衡と有機物フラックス(琉球大理) ○大森 保・糸満彩子・長岡智子・真栄平 司・陳 蓉・池原さつき
- 18P24 東シナ海におけるセレンの分布に関する研究(1近畿大理工・2放医研) ○中口 譲¹・藤井武史¹・青野辰雄²・山田正俊²・平木敏三¹
- 18P25 日本海東部沿岸域海底表層堆積物における重金属等の地球化学的挙動(地調) ○今井

- 登・寺島 滋・片山 肇・中嶋 健・池原 研・谷口 政碩
- 18P26 堆積物試料のマイクロ波加熱溶解法の検討-ICP分析法による多元素同時定量のために(北大院地球環境) ○今井志保・長谷部 清・豊田和弘
- 18P27 希土類元素の吸着剤としての生物起源リン酸塩の研究(北大院地球環境) ○馬場直歩・長谷部 清・豊田和弘
- 18P28 中海における底質の堆積速度(1地調・2愛媛大・3島根大) ○金井 豊¹・井内美郎²・山室真澄¹・徳岡隆夫³
- 18P29 多摩川河口域の堆積物の間隙水中の反応過程(東大院総合) ○加藤拓弥・高野修一郎・久野章仁・松尾基之
- 18P30 洞窟内堆積物表層の過剰²¹⁰Pbについて(琉球大理) ○津波綾乃・棚原 朗・平良初男
- 18P31 ベルムートリアス境界を記録する遠洋性石灰岩の有機地球化学的研究(1ユトリヒト大・2東工大理) ○武蔵正明¹・R.J. Veeffkind¹・M.A. Sephton¹・J.W. deLeeuw¹・磯崎行雄²
- 18P32 珍珠盆地産リン酸塩ノジュールの有機地球化学的研究(1東大院理・2都立大院理) ○荻原成騎¹・石渡良志²
- 18P33 琵琶湖および赤城大沼堆積物の有機物:人間活動の記録の解析(都立大院理) ○奥田知明・内田邦子・石渡良志
- 18P34 榛名湖及び赤城大沼堆積物中のクロロフィル色素の鉛直分布(都立大院理) ○内田邦子・奥田知明・石渡良志
- 18P35 個別長鎖n-アルカンの安定炭素同位体組成分析のためのモレキュラーシーブ分離法の検討(2)(都立大院理) ○吉井広太・山田桂太・石渡良志
- 18P36 粘土鉱物-高分子有機酸複合体に吸着されたユウロピウム(III)の存在状態のレーザー誘起蛍光法による解明(1東大ア総セ・2原研・3武蔵大・4学振PD) ○高橋嘉夫^{1,4}・木村貴海²・加藤義春²・葉袋佳孝³・巻出義紘¹
- 18P37 フミン酸による地下水中の溶存酸素の消費速度に関する実験的研究(1東北大院理・2動燃東海) ○林謙一郎¹・油井三和²・大本 洋¹
- 18P38 陸生貝類の炭素同位体異常について(静大理) ○高橋秀一・和田秀樹
- 18P39 琵琶湖南岸のヒノキ年輪の炭素同位体比変動と気象要素との相関分析(1名工大社会開発工・2名大院理・3名工大院・4名大年代測定セ) ○庄 建治朗¹・青木 浩²・岩崎誠一郎³・中村 俊夫⁴
- 18P40 ルーマニア南カルパチア山脈の角閃岩の年代とその起源: アルプス造山帯の基盤について(名大院理) ○Dragusanu Cristian・田中 剛
- 18P41 希ガス同位体による HIMU の成因に対する

- 制約(1東大地震研・2東大理) ○羽生 毅¹・兼岡一郎¹・長尾敬介²
- 18P42 貫入花崗岩のコア試料を用いたESR信号調査-隆起速度の評価を行うために(1阪大院理・2Australian National Univ.・3Russian Academy of Sci.・4Moscow State Univ.) ○谷 篤史¹・R.Grün²・A.G.Gurbanov³・D.G.Koshchug⁴
- 18P43 斜長石固溶するCaFeSi₃O₈およびCaMgSi₃O₈成分の内部整合熱力学特性(秋田大鉱山) 菅原 透
- 18P44 新標準試料JB-1b(玄武岩)とJCFA-1(コーンフライアッシュ)の調製とその化学・鉱物組成(地調) ○寺島 滋・谷口政碩・御子柴真澄・今井 登
- 18P45 地質標準試料中モリブデンの形態別分析における逐次溶解法の評価(地調) ○寺島 滋・谷口政碩
- 18P46 LA-ICP-MSを用いた火成岩中のREE分析(1地調・2筑波大地球・3横川アナリティカル) ○野原昌人¹・川幡穂高¹・中野孝教²・遠藤政彦³・山中理子³
- 18P47 UV Laser Ablation: ICP-MSを用いた固体サンプルでの微小領域の分析(1横川アナリティカル・2地調) ○遠藤政彦¹・山中理子¹・野原昌人²
- 18P48 相良地区炭酸塩岩石中微量元素の挙動について(地調) ○岡井貴司・木多紀子・森下祐一
- 18P49 炭酸塩岩石標準試料中微量元素の定量(地調) 岡井貴司
- 18P50 山形市周辺地域の地球化学図(地調) ○今井 登・岡井貴司・遠藤秀典・田口雄作・石井武政・上岡 晃
- 18P51 愛知県豊田市北部の領家花崗岩地域の地球化学図(名大院理) ○山本鋼志・田中 剛・川邊岩夫・岩森 光・平原靖大・浅原良浩・金奎漢・Chris Richardson・伊藤貴盛・Cristian Dragusanu・三浦典子・青木 浩・太田充恒・梶原智康・谷水雅治・水谷嘉一・宮永直澄・村山正樹・高柳幸央・仙田量子・井上裕介・川崎啓介・高木真理・根布悟志
- 18P52 GarnetにおけるFeの化学状態分析(1姫路工大理・2東理大理) ○芳賀信彦¹・中井 泉²
- 18P53 火星隕石シャーゴットタイトの化学組成の多様性(都立大院理) ○海老原 充・篠塚一典・孔屏・Sk.A.Latif・大浦泰嗣・G.W.Kallemeyn・中原弘道
- 18P54 Hf-W年代測定法の開発(東工大理) 平田 岳史
- 18P55 クロム同位体組成の精密分析(1神戸大院自然科学・2神戸大理) ○新保紀夫¹・中村 淳¹・中村 昇^{1,2}
- 18P56 炭素質隕石のRb-Sr同位体系(1神戸大院自然科学・2神戸大理・3極地研) 可児智美¹・○コンドロシ ガボール¹・中村 昇^{1,2}・小

- 島秀康³
- 18P57 三宅島土壌に含まれる鉄の化学状態と元素分布に対する植生の影響(1東大院総合・2原研・3東大原総セ) ○松本 武¹・松尾基之¹・米沢伸四郎²・松江秀明²・澤幡浩之³
- 18P58 アルミノケイ酸塩の生成における陰イオンの効果(1東工大院総合理工・2九大理) ○宮崎あかね¹・横山拓史²
- 18P59 水溶液中におけるAl-O-Si結合の生成に関する研究: アルミニウム-アミノカルボン酸錯体とケイ酸の相互作用(九大理) ○松門洋子・横山拓史
- 18P60 石英からの熱ルミネッセンス特性に対する-OH基の影響(1新潟大理・2京大原子炉) ○片山 肇¹・西山笑子¹・長谷博友²・橋本哲夫¹

大ホール

(14:30~16:00)

総会

(16:00~17:35)

1997年度日本地球化学会学会賞等受賞講演
日本地球化学会奨励賞

名古屋大学大学院理学研究科 岩森 光
「地球化学の数値実験によるマグマの形成・移動メカニズム」

日本地球化学会奨励賞

日本地質調査所 木多紀子
「エンスタタイトコンドライトおよびユレイライトに関する年代学的研究」

柴田賞

米国地質調査所 名誉研究員 立本光信
「U-Pb, Lu-Hf 同位体惑星科学の研究」

第3日(9月19日)

A会場

課題講演 [21世紀の宇宙化学を目指して]
コンビーナー: 中村 昇・海老原 充

(09:00~12:30)

- 19A01 グローバルコンシステントな太陽系形成論の構築と惑星探査による実証(東工大理) 坂本尚義
- 19A02 コンドリユールの生成環境の天体物理学的考察(九大理) 関谷 実
- 19A03 気相-固相-液相反応カINETIXからみたコンドリユール, CAIの形成過程(東大院理) 永原裕子
- 19A04 コンドライト母天体形成時の惑星間物質の移動と酸化還元状態の変化(都立大院理) 海老原 充
- 19A05 炭素質隕石中のPAHの分子レベル炭素同位体比(都立大院理) 奈良岡 浩
- 19A06 隕石中の希ガス分布に基づく水を含む小惑星の形成・変成過程(1九大理・2東大理・3ミュンヘン大) ○中村智樹¹・長尾敬介²・高岡宣雄¹・Knut Metzler³

- 19A07 初期火星表面における化学的風化反応のコンピュータシミュレーション(大阪府立工専) 伊藤和男
- 19A08 普通コンドライト中の火成岩質異質片岩: 新たな隕石物質(神戸大理) 中村 昇
- 19A09 宇宙塵研究: 新世紀初頭の課題と地球化学との連携(宇宙科学研) 矢野 創
- 一般講演 [地球外物質]
- (13:30~14:30) 座長: 長尾敬介
- 19A10 オーブライト隕石に見られる Sm 同位体比変動 (¹広島大・²都立大・³科博) ○日高洋¹・海老原 充²・米田成一³
- 19A11 メリライト中の陽イオンの拡散: I. トレーサーを用いた拡散係数の測定 (¹東大 RI セ・²学習院大理) ○森岡正名¹・鈴木崇史²・長沢 宏²
- 19A12 メリライト中の陽イオンの拡散: II. SIMS を用いた希土類元素の拡散速度の測定 (¹学習院大理・²東大 RI セ・³東大 RI セ) ○伊藤元雄¹・坂本尚義²・森岡正名³・長沢 宏¹
- 19A13 メリライト中の陽イオンの拡散: III. 部分溶解における元素の拡散分別 (¹学習院大理・²東大 RI セ) 伊藤元雄¹・○長沢 宏¹・森岡正名²
- (14:30~15:45) 座長: 日高 洋
- 19A14 コンドライト母天体中での熱変性に伴う元素の移動 (¹ 静大理・² 都立大理理) ○篠塚一典¹・海老原充²
- 19A15 PGA and INAA studies of a new carbonaceous chondritic meteorite grouplet(都立大理理) ○G.W. Kallemeyn・海老原充
- 19A16 火星隕石 Y-793605 の希土パターンについて (¹神戸大理・²神戸大院自然科学) 中村昇^{1,2}・○コンドロシ ガボール²・森川徳敏²
- 19A17 火星隕石 Y-793605 の希ガス研究 (¹ 岡山固体地球セ・²九大理・³東大地震研) ○長尾敬介¹・中村智樹²・岡崎隆司²・三浦弥生³・高岡宣雄²
- 19A18 地球の始源的な希ガス 小嶋 稔
- (15:45~17:00) 座長: 米田成一
- 19A19 機械的破壊によるエンスタタイトコンドライトの希ガス分析 (¹九大理・²岡山固体地球セ) ○岡崎隆司¹・高岡宣雄¹・中村智樹¹・長尾敬介²
- 19A20 熱変成を受けた特異な CM 炭素質コンドライトの鉱物学と希ガス存在度 (¹九大理・²岡山固体地球セ) ○松岡賢治¹・中村智樹¹・高岡宣雄¹・長尾敬介²・中牟田義博¹
- 19A21 IAB 鉄隕石包有物の希ガス同位体比からみた母天体の変遷 (¹阪大院理・²ウィーン自然史博物館) ○丸岡照幸¹・松本拓也¹・松田准一¹・Gero Kurat²
- 19A22 鉄隕石中の炭素物質分離による希ガス研究 (¹阪大・²ワシントン大) ○難波美和¹・丸岡照幸¹・甘利幸子²・松田准一¹

- 19A23 Q 窒素同定に向けた Yamato-791717(CO₃) 隕石における窒素, 希ガスの同位体測定(阪大院理) ○谷口善信・橋爪 光

B 会場

一般講演 [岩石・地殻]

(09:00~10:00) 座長: 寺門靖高

- 19B01 アミノ酸/炭酸カルシウムハイブリッド結晶の熱的安定性(山口大工) ○甲斐綾子・三木俊克
- 19B02 Anomalous concentration of water in the epithermal veins of the Hishikari Au-Ag deposit, southern Kyushu, Japan(¹地調・²金属鉱業事業団・³岩手大) ○Kevin Faure¹・松久幸敬¹・目次英哉²・溝田智俊³
- 19B03 水蒸気-飽和溶液-結晶水間の水の酸素同位体分別(学習院大理) 垣内正久
- 19B04 火山地域における岩石の酸性変質 (II)(¹上智大理工・²武蔵工大原研) ○木川田喜一¹・小坂知子¹・大井隆夫¹・本多照幸²

(10:00~11:00) 座長: 垣内正久

- 19B05 ICPMS 法によるジルコンの局所元素・同位体分析(東工大大理) ○稲垣賢一・平田岳史
- 19B06 日本のいくつかの岩石・鉱物の Re-Os の地球化学(神戸大発達科学) 寺門靖高
- 19B07 $\epsilon_{Nd} - \epsilon_{Sr}$ 図によるマグマ混合凍結時刻の推定について(名大院理) ○田中 剛・松村陽子・鈴木和博
- 19B08 帝釈台緑色岩の地球化学的特徴からみた古生代におけるマンタルの混合(¹北大院地球環境・²京大総合人間・³京産大) ○嶋田光雄¹・巽 好幸²・能田 成³

(11:00~12:00) 座長: 田中 剛

- 19B09 蛍光 X 線分析用微量元素標準試料の調整(名大院理) ○山本鋼志・森下泰成
- 19B10 火山岩中ホウ素の高精度即発γ線分析(¹学習院大理・²京大総人間・³東北大理・⁴原研東海・⁵東大原総セ) ○福岡孝昭¹・佐野貴志²・長谷中利昭³・米沢伸四郎⁴・松江秀明⁴・澤幡浩之⁵
- 19B11 長石からの幾つかの放射線誘起ルミネッセンス特性(新潟大理) ○坂上央存・藤田博喜・橋本哲夫
- 19B12 砂丘砂より抽出した石英粒子からの天然蓄積熱ルミネッセンスの発光特性(新潟大理) ○須貝紀之・杉山直弥・橋本哲夫

(13:30~14:45) 座長: 益田晴恵

- 19B13 2, 3 成分珪酸塩溶融体に対する希ガスの溶解機構(¹東大理・²東工大大理・³阪大理) ○柴田智郎¹・高橋栄一²・松田准一³
- 19B14 オーストラリア産マンタル起源捕獲岩中の希ガス同位体組成(¹オーストラリア国立大・²阪大理) ○松本拓也^{1,2}・本田勝彦¹・Ian McDougall¹
- 19B15 Nitrogen and argon isotopes in Archaean sediments from West Greenland and Aus-

tralia(阪大院理) ○D.L. Pinti・橋爪 光・松田准一

- 19B16 ⁴⁰Ar-³⁹Ar 年代スペクトルと玄武岩質岩石の鉱物組織との関連(東大地震研) ○岩田尚能・兼岡一郎
- 19B17 希ガス同位体比間の相関の有無とその地球科学的意義(東大地震研) 兼岡一郎

(14:45~16:00) 座長: 兼岡一郎

- 19B18 Geochemistry of Trans-Himalayan Arc Magmatic Rocks: Geodynamic Implications (Wadia Inst. Himalayan Geol.) ○T.Ahmad, V.C.Thakur, R.Islam, P.P.Khanna, and P.K.Mukherjee
- 19B19 北緯 13 度の南部マリアナトラフ-島弧境界部に位置する海山から得られた火山岩の微量元素組成(大阪市大理) ○益田晴恵・中山雅代
- 19B20 SiO₂-MgO 系における Ge の分配実験(名大理) 水谷嘉一
- 19B21 地殻におけるヨウ素の分布と挙動(放医研) 村松康行
- 19B22 安定同位体から見た交代作用における元素の挙動-拡散・移流・再結晶・水の効果(¹静大理・²大阪市大理) ○和田秀樹¹・M.Satish²・鈴木将之¹

C 会場

一般講演 [有機物]

(09:00~10:00) 座長: 坂田 将

- 19C01 新庄堆積岩中の環状および鎖状炭化水素の分布(筑波大化) ○薮田ひかる・三田 肇・下山 晃
- 19C02 新庄盆地の堆積物中のケロジェンの構成成分について(筑波大化) ○大庭雅寛・下山 晃
- 19C03 新庄堆積岩中のマレイミドの分布と加熱実験による考察(筑波大化) ○小園正樹・三田 肇・下山 晃
- 19C04 紀伊半島四十万帯層状チャートの堆積環境-ノルマルパラフィン組成ならびに主要成分組成(名大院理) ○高柳幸央・山本鋼志・三村耕一・足立 守

(10:00~11:00) 座長: 村江達士

- 19C05 化学合成生物群集のバイオマーカー組成(東大院理) 萩原成騎
- 19C06 極限環境の岩石内微生物群中に存在する有機化合物の特徴と起源生物(¹農工大農・²大妻女大社会情報・³フロリダ州立大・⁴フロリダ A&M 大) ○関谷絵里¹・松本源喜²・EI. フリードマン³・赤木 右¹・R. オカンボ・フリードマン⁴
- 19C07 ガスハイドレート生成過程に関する実験(北海道工技研) ○海老沼孝郎・内田 努・成田英夫・吉田諒一
- 19C08 ゴム管から発生する炭化水素: 地熱ガス中の炭化水素濃度測定値への影響(地調) ○猪狩俊一郎・前川竜男

(11:00~12:00) 座長: 萩原成騎

- 19C09 アンモニア酸化菌の脂質成分の炭素同位体比: バイオマーカー記録解釈との関連(¹地調・²ウツホール海洋研) ○坂田 将¹・J.M.Hayes²
- 19C10 好熱好酸性古菌 (Sulfolobus) の生息環境の脂質バイオマーカーとしての代謝産物の検索(九大理) ○村江達士・津曲信幸・市村比枝・北島富美雄
- 19C11 沈積環境対鏡質体反射率変化の影響(東大総合文化) ○鄭 国東・高野穆一郎
- 19C12 東京湾表層堆積物中の糖類の分布とその考察(¹筑波大化・²都立大院理) ○河野悦郎¹・下山 晃¹・石渡良志²

(13:30~14:30) 座長: 猪狩俊一郎

- 19C13 培養実験による海水中の有機物分解過程の考察(¹静大理・²東大工・³JANUS・⁴関電総研) ○大西由香¹・鈴木 歆¹・藤井 実²・村重慎一郎²・小宮山宏²・湯澤 篤³・宮坂 均⁴
- 19C14 黒松の樹脂中の蛍光有機化合物の構造(九大理) ○藤加珠子・北島富美雄・村江達士
- 19C15 日本海底堆積物の炭化水素組成-biomarker 化合物を用いたナホトカ号重油流出の寄与の評価(農工大農) ○河野恵里子・高田秀重・小倉紀雄
- 19C16 山間部市町村(津山盆地)水道水中のトリハロメタン, 有機ハロゲン化合物の起源(¹美作女大短大・²美作女大家政) ○嶋崎 実¹・丹 弘美²・細田明美²

一般講演 [堆積物]

(14:30~15:30) 座長: 赤木 右

- 19C17 日高舟状海盆堆積物中におけるウラン・カドミウム濃度の変動(北大院地球環境) ○佐藤昌泰・成田尚史・角皆静男
- 19C18 希土類元素存在度と Sr 同位体比から推定される葛生地域の炭酸塩岩の形成について(名大院理) ○三浦典子・川邊岩夫
- 19C19 短寿命放射性核種 ⁷Be による琵琶湖底泥ごく表層の層準解読(¹琵琶湖研・²金沢大理・³近畿大理工・⁴龍谷大理・⁵鹿児島大水産) ○横田喜一郎¹・大塚良仁²・小藤久毅²・山本政義³・山崎秀夫³・合田四郎³・竺 文彦⁴・前田広人⁵
- 19C20 琵琶湖底表層堆積物中の鉄の鉛直分布と酸化還元状態(¹愛知医大・²大同工大・³名大年代セ・⁴滋賀県琵琶湖研・⁵金沢大理 LLRL・⁶四日市大環境情報) ○小島貞男¹・酒井陽一²・中村俊夫³・小田寛貴³・横田喜一郎⁴・山本政義⁵・古川路明⁶

一般講演 [生物]

(15:30~16:30) 座長: 松本源喜

- 19C21 骨化石試料に対する信頼度の高い ¹⁴C 年代, 炭素同位体比測定の試み(名大年代測定セ) ○南 雅代・中村俊夫
- 19C22 森林における元素の挙動に関する研究-体

内転流について(琉球大理) ○金城由紀子・渡久山 章

- 19C23 刺針法による樹木年輪内の炭素同位体比変化の因子解析 (1名大院理・2鳴門教大・3名大大気水圏科学研・4静大理・5名大年代測定セ) ○青木 浩¹・米延仁志²・吉田尚弘³・和田秀樹⁴・中村俊夫⁵

- 19C24 植物中の希土類元素の分別とテトラド効果 (1農工大農・2理研) ○付 鳳富¹・赤木 右¹・矢吹貞代²・岩木正哉²

D 会場

一般講演 [海洋 (2)]

(09:00~10:00) 座長: 増沢敏行

- 19D01 北太平洋の溶存ニオブとタンタル (1金沢大工・2京大化学研) ○宗林由樹¹・秋山昌次²・森 幸治²・長谷川浩²・松井正和²・上田一正¹

- 19D02 海洋における鉄の分布と挙動 (1滋賀県立大環境・2高知女大家政) ○小畑 元¹・一色健司²・中山英一郎¹

- 19D03 海洋におけるインジウムの地球化学 (1東大海洋研・2UMR 39(CNES/CNRS)) ○D. S. Alibo¹・野崎義行¹・天川裕史¹・C. Jeandel²

- 19D04 太平洋及びインド洋におけるトリチウム分布 (1九大理・2九大工) 柿内秀樹¹・○百島則幸¹・岡井富雄²・前田米藏¹

(10:00~11:00) 座長: 宗林由樹

- 19D05 海水の Ce と Gd 異常に関する考察 (東大海洋研) 野崎義行

- 19D06 鉄水酸化物と水溶液間の希土類元素分配係数から求めた希土類元素-炭酸イオン錯体生成定数 (名大院理) ○太田充恒・川邊岩夫

- 19D07 海洋植物プランクトンの主・微量元素組成とその規則性 (名大大気水圏科学研) 増澤敏行

- 19D08 インド洋におけるセレンの生物地球化学的研究~白鳳丸 KH96-5 インド洋航海~ (1近畿大理工・2日本分析化学専) ○服部裕史¹・木村宗人¹・中口 譲¹・小池祐一²・平木敬三¹

(11:00~12:00) 座長: 植松光夫

- 19D09 噴火湾における希土類元素の周年変動 (北大院地球環境) 成田尚史・○山本昌弘・角皆静男

- 19D10 本州南方 130°E における CFCs の断面分布とその解析結果 (北大院地球環境) 渡辺修一・○川原健吾・角皆静男

- 19D11 北海道厚岸沖観測線におけるオホーツク流出水の酸素同位体比について (北大院地球環境) 田中教幸・○山本美千代・角皆静男

- 19D12 硝酸の窒素同位体比を用いた海洋表層の物理・生物過程の履歴の解析 (1北大低温研・2名大大気水圏研・3国立環境研) ○中塚武¹・吉田尚弘²・野尻幸宏³・松本英二²

(13:30~14:30) 座長: 南川雅男

- 19D13 外洋海水中のメタンの起源: 炭素安定同位

体比によるアプローチ (1名大大気水圏研・2東大海洋研・3東大理) ○角皆 潤¹・吉田尚弘¹・蒲生俊敬²・脇田 宏³

- 19D14 日豪、日加定期観測船による洋上バックグラウンド大気中二酸化炭素の炭素酸素安定同位体比 (1国立環境研・2地球人間フォーラム・3国際日本文化研セ) ○向井人史¹・野尻幸宏¹・町田敏暢¹・野尻知子²・北川浩之³

- 19D15 北西太平洋における人為起源二酸化炭素の吸収 (1名大大気水圏研・2資源環境総研・3関西総環セ) ○阿部 理¹・山崎維香¹・清水英知¹・松本英二¹・渡辺 豊²・原田 晃²・北尾 隆³・太田秀和³

- 19D16 東部南海トラフ付加帯における間隙水塩分の分布特性 (1東海大海洋・2東大海洋研) ○加藤義久¹・蒲生俊敬²・江口暢久²・木元克典²

(14:30~15:45) 座長: 加藤義久

- 19D17 海洋における CO₂ 固定のための準難分解性有機物の役割 (1東大工・2静岡大理・3JANUS・4関電総研) ○藤井 実¹・村重慎一郎¹・小宮山 宏¹・大西由香²・鈴木 款²・湯澤篤³・宮坂 均⁴

- 19D18 北部北太平洋における f(CO₂) と海水循環 (北大院地球環境) 渡邊修一・○下田健二郎・角皆静男

- 19D19 北部北太平洋表面水中の懸濁粒子の粒径と化学組成の季節的及び海域による変化 (1東大海洋研・2北海道東海大工・3国立環境研) 植松光夫¹・○村木広明²・野尻幸宏³

- 19D20 表層生物生産と炭酸カルシウム粒子束の季節変動: 北西大西洋セディメント・トラップ実験より (1東大海洋研・2地調) ○江口暢久¹・田中裕一郎²・川崎穂高²・平 朝彦¹

- 19D21 北部日本海溝における沈降粒子束 (北大院地球環境) ○伊藤雅史・乗木新一郎・角皆静男

(15:45~17:00) 座長: 中山英一郎

- 19D22 東京湾湾口部における沈降粒子束の季節変動 (北大院地球環境) 乗木新一郎・○海老原真弓・成田尚史・角皆静男

- 19D23 沿岸海底境界層における物質の変質と移動—堆積物中のケイ酸塩の溶解速度— (1北大院地球環境・2東海大海洋) ○乗木新一郎¹・佐々木建一¹・成田尚史¹・加藤義久²

- 19D24 沿岸海底境界層における物質の変質と移動—間隙水排水法の違いによる溶存成分の濃度の差— (北大院地球環境) ○佐々木建一・乗木新一郎・成田尚史・角皆静男

- 19D25 東シナ海懸濁粒子中の炭素・窒素同位体組成よりみる海洋有機物の特徴について (北大院地球環境) 南川雅男・○倉本敏克

- 19D26 東シナ海堆積物の炭素同位体比について (1名大大気水圏研・2北大低温研) ○小栗一将¹・松本英二¹・中塚 武²

研究助成「鳥居基金」募集について

1997年度後期分の応募は本来7月末日締切が規定ですが、ニュース担当の不手際によりお知らせが遅れてしまいました。まことに申し訳ありませんでした。つきましては、本委員会委員長の御了解により、8月末日(29日金曜日)まで、延ばしていただきました。希望者は所定用紙に記載した申請書を下記までお送りください。

提出先: 〒113 文京区本駒込5-16-9

学会事務センター内、日本地球化学会鳥居基金委員会
お問い合わせは本学会庶務監事(下記)まで。

庶務幹事: 千葉仁

九州大学理学部地球惑星科学教室

〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1

TEL: 092-642-2664

FAX: 092-642-2684

e-mail: hchiba @ geo. kyushu-u. ac. jp

第24回日産学術研究助成候補者推薦

依頼について (学会推薦)

表記の研究助成の案内が参りましたので連絡いたします。

1. 推薦件数 一般研究助成 2件, 奨励研究助成 推薦枠なし (原則として全件推薦)
2. 一般研究助成につきましては若手・中堅層 (40歳前後) の優れた研究者を重視いたします。
3. 日産科学振興財団では次の基準により審査・選考しております。
 1. 適合性: 一般的に公的な高額の助成金を得にくい、若手の独立した研究か。
 2. 重要性: 内容が、独創的、先駆的で学術的な意味が大きい。
 3. 明確性: 研究目的が明確であり、さらに研究計画、体制など十分検討されており、実現性が高い。
 4. 期待性: 研究者の研究経歴からみて、高い成果が期待できるか。あるいは将来の発展が期待できるか。
4. 推薦者: 学・協会の代表者といたします。
5. 推薦手続き: 所定の推薦用紙 (各機関か、当学会庶務監事に問い合わせてください。日産科学振興財団に直接請求されても結構です) に必要事項を記入され、下記までお送りください。8月15日(金)

必着

送付 (お問い合わせ) 先: 庶務幹事: 千葉仁

九州大学理学部地球惑星科学教室

〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1

TEL: 092-642-2664

FAX: 092-642-2684

e-mail: hchiba @ geo. kyushu-u. ac. jp

その他詳細につきましては各研究機関、大学に
掲示されております案内をご参照ください。

1998年地球惑星科学関連学会

合同大会についてのお知らせ

1998年地球惑星科学関連学会合同大会について下記のような連絡がまいりました。ご参照の上、ふるってセッションの申し込みをされるようご案内いたします。

大会会長河野長

合同大会のプログラム作成について

来年の合同大会については、(1)科学的な内容の充実をはかる、(2)作業の省力化・電子化をはかる、(3)受益者負担を徹底する、の3点を基本方針として実施することを3月14日付の手紙で御提案致しました。この提案は4月22日開催の連絡会において基本的に承認されました。これに伴い、来年の合同大会の開催方法、セッション提案の募集、などを内容に含む連絡会報が近々関連各学会会員に配布されることになっております。

さて、セッションのたて方がこれまでと異なり、共通セッションとシンポジウムのみになりますので、混乱を避けるために下記の点について貴学会内で必要な検討・対応を進めていただくようお願い申し上げます。

1. 自分の学会にとって必要なセッションは必ず申し込む。場合によっては「測地学一般」、「火山一般」といった catch all 的な名前のもを含めても良い。いずれにしても、所属学会員から自分の申し込みたいテーマのセッションがないと思われないうに分野・テーマをカバーする必要がある (但しこの段階での「テーマ」は発表論文募集の際に記すためのもので、実際のセッションの題目はアブストラクトを集めた段階でプログラム委員会で決定する)。
2. 論文募集には「科学的内容によって採否を決定す

る」という趣旨の文章を入れるが、プログラム委員会が本当にアブストラクトの内容を審査することは実際的には不可能と思われる。従って発表論文の審査をしたい場合は責任を持つ学会側で準備しておく必要がある。後述のように組織委員会(LOC)内に各学会の担当者を決めているので連絡をとってもらいたい。

3. 各セッションには責任を持つ学会の名前(及び協賛学会がある場合はそれらの名も)が明示されるが、セッション自体はあくまで合同大会の共通のものである。従って各学会が個別に開催する場合のように、「発表者は自学会員であること」を要求することはできない。論文募集の際に、所属する学会に○印をつけるなどで著者がどれかの学会に属していることは要求する予定であるが、その学会が責任学会である必要はない。

今回のやり方では、科学的な内容を充実するためにプログラム委員会の任務が大変大きくなります。昨年暮れの段階では、プログラム委員はできるだけ東大又はその近くの機関から推薦していただくようお願いしておりました。しかし、その任務の重要性を考えると、勤務地によらず旅費を使ってでも最適任の人をプログラム委員に選ぶべきだという意見が4月の連絡会で強く出たと伺っております。これは大変もったいない意見ですので、もし、これまでのプログラム委員より適任な方がおられる場合は、各学会の判断で委員を交代して下さい結構です。その場合は、その旨を事務局まで御連絡下さい。なお出張旅費のことについては、「受益者負担」の原則からいえば合同学会の会計から支出するよりは出身学会が負担する方が筋ではないかという気がします。この件については連絡会において検討していただき、その結論にLOCとしても従いたいと思います。

LOCでは5月29日に委員会を開催し、下記の役割及び学会担当を決めました。今後の連絡について、以下のリストを参考にしてくださいようお願い申し上げます。なお、合同学会へのセッションの提案はホームページ

<http://gakkai.gtl.isas.ac.jp/>

でも受け付けております。このホームページは、今後宿舎の予約や学会スケジュールなど一般の情報も含めるよう準備中です。

また上記以外にプログラム委員会、組織委員会内の連絡のためのホームページ

<http://godoloc.grl.s.u-tokyo.ac.jp/>

も設けてあります。こちらは一般には公開していませんが、プログラム編成や会場の準備などで必要な情報を載せることを予定しております。必要に応じてこちらの方も御覧下さい。

●組織委員会

- ・大会組織委員長：河野長
- ・委員長：寺沢敏夫
- ・経理委員長：中村正人
- ・企画委員長：栗田敬
- ・事務局長：岩上直幹
- ・事務局秘書：真鍋澄枝

●学会連絡担当

- ・測地：大久保修平
- ・地震：ゲラーロバート、金嶋聡
- ・火山：栗田敬
- ・電磁気：北和之
- ・地球進化：比屋根肇
- ・惑星：阿部豊
- ・地質・四紀・資源：鳥海光弘
- ・鉱物・岩鉱：村上隆

●役割分担

- ・会場：岩上・金嶋・三浦・比屋根・浜野・鳥海・村上・プログラム寺沢・佐々木・北・大久保・阿部・杉浦
- ・経理：中村・ゲラー
- ・企画：栗田・佐々木

1997年度第1回日本地球化学会 評議員会議事録

日時：1997年2月15日(土) 14:00~17:30

場所：蔵前工業会館8階803会議室

1. 1996年度第3回評議員会議事録を承認した。

2. 報告事項

2.1 庶務・幹事会(千葉評議員)

- (1) 文部省関係：平成7年度科研費学術定期刊行物の補助金金額の確定(12/2)(167万円)、平成7年度科研費成果公開発表(B)の補助金金額の確定

(12/2)(110万円)、平成8年度科研費成果公開発表(B)実績報告書の提出(9/27)、平成8年度科研費成果公開発表(B)の補助金金額の確定(12/16)(110万円)、平成8年度科研費学術定期刊行物状況報告書の提出(11/29)、平成8年度科研費学術定期刊行物実績報告書の提出(2/7)、平成9年度科研費学術定期刊行物申請書の提出(12/2)、平成9年度科研費成果公開発表(B)申請書の提出(12/11)(海老原会員)

- (2) 学術会議関係：第17期学術会議会員選挙に関する学術研究団体としての登録通知受領(9/10)、第17期学術会議会員候補者の選定、推薦人および推薦人予備者の指名の依頼受領(12/25)、第17期学術会議会員候補者(1名)、推薦人(1名)、推薦人予備者(1名)の推薦(2/4)

- (3) 後援・共催：「新世紀の宇宙塵研究」ワークショップ(1997年合同大会シンポジウム)共催(97/3,名古屋)、「第4回アジア学術会議—科学者フォーラム—」後援(日本学術会議主催、97/2/3~7,東京)、「第5回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会」後援(日本水環境学会ほか主催、97/6/24~25,東京)

- (4) 学会事務センター：1997年の契約書を取り交わした。(2/10)

- (5) 幹事会：1997年2月8日14:00~18:00に東京大学山上会館201号室で開催した。出席者：高岡会長、石渡副会長、赤木幹事、大隅幹事、高橋幹事、千葉幹事、増澤幹事、松久幹事。1997年度第1回評議員会の議事内容について整理した。

- 2.2 会計(増澤評議員)：1996年決算の中間報告、および、1997年度の予算執行について報告があった

- 2.3 出版(大隅評議員)：1997年度のテラ学術出版との覚え書き、および、3年間の契約期間が切れるテラ学術出版との来年度以降の契約案を次回評議員会にはかることが報告された。(増澤評議員)：「地球化学」と「GJ」の国内販売拡大キャンペーン(200機関へのサンプルコピーの送付)についての計画が報告がされた。

2.4 編集

- 2.4.1 GJ(松久評議員、千葉評議員が代理報告)：(1)Vol.30はNo.6まで出版が完了した。トータル384ページ。(2)Vol.31, No.1は2月25日出版予定。(3)投稿状況：1996年度は52編。1997年度は2月14日現在6編。(4)編集状況：完成原稿が15編。改定済みで

編集のチェックを待っている原稿が数編ある。受理後、印刷までの時間が長くなりつつある。

- 2.4.2 地球化学(赤木評議員)：(1)Vol.30は、全8編の論文で完了した。(2)Vol.31, No.1とVol.1からVol.30までの索引号が2月25日出版予定。

- 2.4.3 ニュース(高橋評議員)：No.148が2月25日出版予定。

2.5 行事

- 2.5.1 地惑関連学会連絡会(1996/9/17)、1998年合同大会準備状況、東京湾海洋環境シンポジウム、1998年日本地球化学会年会候補地(篠原評議員)：今後の合同大会の開催方法、東京湾海洋環境シンポジウムの継続開催を検討していること、1998年年会開催候補地(九州大学より内諾を得た)について報告があった。

- 2.5.2 1996年札幌年会報告(南川評議員)：北海道大学で開催し、参加登録者452名、課題討論17件、口頭発表194件、ポスター発表48件、受賞記念講演4件、研究会講演80件であった。公開講演会には、250名以上の参加者があった。エクスカッションには、参加者8名。

- 2.5.3 1997年度地球化学会年会中間報告(石渡副会長)：1997年年会(都立大学教養部、9月17日から19日)の計画および進捗状況について報告があった。

- 2.5.4 1997年名古屋合同大会中間報告(田中評議員)：1997年合同大会の準備状況およびプログラムについて報告があった。

2.6 委員会

- 2.6.1 将来計画委員会(石渡副会長)：地球化学書の出版の具体化を目指して作業を進めていることの報告があり、出版についてのアンケートが配布された。

2.7 学術会議

- 2.7.1 地球化学・宇宙化学研連(石渡副会長)：(1)第8回委員会(1996/9/26)：「研究連絡委員会の見直しについて」についての研連の見解を第4部部長あてに提出した。「対外報告」を取りまとめることが了承された。IAGCの役員(1996~2000年)に酒井均氏が、前会長職として入った。(2)シンポジウム「21世紀の地球環境科学に対する地球化学の役割」(共催：日本地球化学会)を1996/9/27に開催した。(3)第9回委員会(1996/12/12)：将来計画に関する対外報告「わが国における地球化学の推進につ

いて」を審議し、委員長がまとめ直した後に、1997/2月の第4部部会に提出することが了承された（「地球環境に関わる地球化学の推進について」として提出された）。研連見直し問題について世話会員より説明があった。惑星科学専門委員会が発足することになった。

2.7.2 地質科学総合研連（石渡副会長）：(1)第7回委員会（1996/9/24）：研連見直し、および、シンポジウム「地学教育の振興策（仮題）」の開催について審議した。(2)第8回委員会（1996/12/16）：研連見直し、および、シンポジウム「地学教育の振興策（仮題）」の開催について審議した。

2.7.3 鉱物研連鉱床学専門委員会（高岡会長）：第6回委員会（1996/10/1）IAGODの副会長に石原瞬三氏、アジア地区評議員に井沢英二氏が選出された。金属探鉱事業団が大学との共同事業を企画中であることが報告された。鉱物学研連の将来と鉱床学関連学科現状調査について審議した。

2.7.4 陸水学研連（赤木評議員）：第6回委員会（1996/12/16）「水循環シンポジウム」を開催することとし、その内容を検討した。

2.8 その他

2.8.1 地質科学関係学協会連絡協議会準備会（高橋評議員）：第2回準備会（1996/10/25）についての報告があった。第3回準備会における定款の取り扱いと地球化学会の参加については審議事項として審議した。

3. 審議事項

3.1.1 入会者の承認・長期滞納会員の除籍：1996年7月1日から12月31日までの入会者と会員の除籍を以下の通り承認した。

入会（23名）：渡部直喜、金尾昌美、JWA Yon-Joo、星野光雄、小藤敦子、森俊哉、（以下学生）佐藤雅規、山根雅之、本多将俊、角野浩史、米田裕義、佐藤久夫、中島剛、小池素子、山田光太郎、佐藤昌泰、長岡智子、原誠、高嶺朝一郎、栗田直幸、津波綾乃、西森真理、八十島光子
除籍（2名）：小前隆美、中山英二

この結果会員数は以下のようになった。

	正会員（学生）	賛助会員	名誉会員	計	（在外）
1996年6月30日	1029 (114)	21	11	1061	(47)
入会	23 (17)	0	0	23	(1)
退会	0 (0)	0	0	0	(0)
変更	0 (-5)	0	0	0	(1-1)
除籍	2 (0)	0	0	2	(0)
1996年12月31日	1050 (126)	21	11	1082	(48)

3.1.2 シニア正会員の承認：1997年1月1日付けで正会員からシニア正会員への異動を以下の通り承認した。シニア正会員（4名）：山口勝、吉野諭吉、砂川一郎、森田良美

3.2 1998～99年度役員選挙管理委員の選出：評議員による選挙により、赤木右、野津憲治、大隅多加志各評議員を選挙管理委員に選出した（次点：松久幸敬評議員）。委員長には赤木右評議員が選ばれた。

3.3 会員調査葉書アンケート：名簿作成のための会員情報確認葉書に付けるアンケート案について議論した。字句を一部修正の上、案を承認した。

3.4 今後の合同大会開催方法について：地球惑星科学関連学会連絡会から検討を依頼された項目について議論した。

(1) 恒常的な会場を捜す、プログラム委員会の常設化、本格的な事務局の設置：肯定的な意見が大半を占めた。

(2) 学会代表でない連絡委員・プログラム委員会の設置：学会が合同で行っている大会に学会を代表していない委員や委員会を設置することに肯定的な意見は聞かれなかった。

(3) 固有セッションの廃止：反対の意見は聞かれなかった。

3.5 地連協定款への対応について：次回準備会では、地連協（地質科学学協会連絡協議会、あるいは、地質科学学協会連合）への地球化学会の参加は保留することとした。

地球化学・宇宙化学研究連絡委員会報告

「地球環境に関わる地球化学の推進について」

平成9年2月28日

日本学術会議地球化学・宇宙化学研究連絡委員会
この報告は、第16期日本学術会議地球化学・宇宙化学研究連絡委員会の審議結果をとりまとめて発表するものである。

委員長 石渡 良志（東京都立大学理学部教授）
幹事 秋元 肇（東京大学先端科学技術研究セン

ター教授）

幹事 野津 憲治（東京大学理学部教授）

幹事 宮本 正道（東京大学理学部教授）

委員 青木謙一郎（第4部会員・東北大学名誉教授）

日下部 実（岡山大学固体地球研究センター教授）

田中 剛（名古屋大学理学部教授）

中澤 高清（東北大学理学部大気海洋変動観測研究センター教授）

半田 暢彦（愛知県立大学教授）

松田 准（大阪大学理学部教授）

水谷 仁（文部省宇宙科学研究所教授）

矢内 桂三（岩手大学工学部教授）

1. はじめに

第15期地球化学・宇宙化学研究連絡委員会は、審議結果をとりまとめ、1994年6月「日本における地球化学の研究教育体制の確立について」を報告（以下、前回報告という）した。前回報告において研連は、1993年度より文部省科学研究費補助金の分科細目表の中に細目「地球化学」が設置されたことを背景として、地球化学の重要性を再認識するとともに、わが国における地球科学の発展のためには、地質科学や地球物理学とバランスのとれた地球化学の発展が必須であること、さらに今日の社会的学問的要請に照らして日本における地球化学の研究教育体制が危機的状況にあることを指摘し、解消のための方策を提言した。本報告は、地球環境に関わる地球化学を推進する上での方針を示すものである。

人間活動の活発化に伴って、地球温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊、砂漠化などの発生による地球環境システムの大幅な変化が危惧され、その実態の解明、将来の予測と対策は、社会的にも重大な課題となっている。地球環境問題は21世紀初頭における人類が直面する最大の課題であると言っても過言ではない。地球環境に関わる研究は、1990年4月に日本学術会議のIGBPの推進についての勧告、つづく学術審議会による建議「大学等における地球圏—生物圏国際協同研究計画（IGBP）の推進について」（1990.7）がなされて以来進展してきた。さらに、1995年以降これに関連した注目すべき動きが見られた。学術審議会による建議「地球環境科学の推進について」（1995.4）、測地学審議会による建議「地球科学における重点的課題とその推進について」（1995.6）、「アジアモンスーンエ

ネルギー水循環観測研究計画（GAME）について」

（1995.6）がなされた。また、1996年7月に閣議決定された「科学技術基本計画」においても、食料、エネルギー、資源問題とともに地球環境研究の重要性が指摘されている。さらに、航空・電子等技術審議会（1996.7）においては、報告「地球変動予測の実現に向けて」がなされ、この中で大型の研究開発計画が提言されているなど、地球環境問題の解決に向けての大規模な学術研究が企画ないし実施に移されつつある。また、文部省においては地球環境問題に関する中核的研究機関の設置の検討が開始されている。地球環境問題は人間活動によって地球環境に排出された化学物質によって引き起こされたものである。したがって、これら諸問題の解決に向けての学術研究には、地球表層の水・熱・エネルギー動態や植生変動の解明に関わる気象学、海洋学、生態学とともに、物質循環を中心的に取り扱う地球化学という学問分野が大きな役割を果たさねばならない。地球化学という学問は、地球を一つの物質系として捉え、この中で行なわれる物質循環を原子・分子のレベルで研究し、過去、現在、未来にわたっての地球変化を研究する分野である。このような21世紀の地球環境問題の重大性を展望するとき、新しい状況に立脚して、地球環境に関わる地球化学について、その役割と今後の進むべき方向を策定することは極めて重要であると判断される。

2. 最近の研究動向と地球化学の位置

地球に関する諸科学の中で、地球物理学は、力学およびエネルギー過程を中心に地球システムの動態・進化を追求し、また地質学は総合的視点から地球システムの変動・進化を究明しようとするものと理解される。これに対して、地球化学は、地球上の複雑に絡み合う物質循環像を、元素および同位体を基本としつつその運動・離合集散（化学反応）過程として捉え研究する。原子は化学反応して単純な分子から巨大分子に至るまで殆ど無限の化合物を作るという特性を持っている。これら原子の離合・集散過程を研究する分野が化学である。地球表層における物質循環を例にとると、地球化学者は大気—水圏—地圏を通しての物質の化学的・物理的動きを元素・同位体・分子のレベルで研究する。この様にして初めて地球上の物質循環像が明らかにされるのである。したがって、地球表層における物質循環の解明においては地球化学が中核的役割を果たすべきことは明らかであり、その研究の遂行に

においては元素・同位体とその化学の基礎を十分習得していることが要求される。大気・水圏、地圏および生物圏を含む地球環境システムにおいては、熱・エネルギー動態を取り扱う地球物理学や、変動する植生や生物多様性を観測研究する生態学と、物質循環を取り扱う地球化学との緊密な連携により、その変化と進化過程を把握し、解明しようとする動きが活発である。この中で物質循環を元素・同位体・分子と化学種に注目して取り扱う地球化学の必要性がますます認識されるようになっている。さらに、今後の化学物質の動態の解析と観測、化学過程の解明において地球化学の中核的役割が期待されている。最近の地球に関連する研究動向を概観すると以下の特徴が見られるとともに、今後地球化学が果たすべき大きな役割が浮き彫りにされる。

第一に、地球に関する諸科学は、空間的・時間的に異なる様々な規模の地球現象を総合的に解明する「地球科学」の新たな段階へと発展しつつあることがますます鮮明となってきている。超高層、大気・水圏、固体地球、生物圏などから構成される地球環境システムは、強い相互作用の下に連携する系として理解され、現在これら変動・進化する地球の解明に多くの努力が注がれている。実際、わが国では過去5・6年間に地球圏—生物圏国際協同研究計画（IGBP）、中でも地球規模海洋フラックス研究計画（JGOFS）が実行に移された。研究船による北西太平洋を中心とした物質循環の研究が精力的に行なわれ、海洋における炭素循環像が一層鮮明にされた。特に大気二酸化炭素の吸収にはたす中層水的重要性が明らかにされた。また西赤道域・西太平洋における深海堆積物コアに残された環境変動の記録の読解研究などが実施され、これらの海域における環境変動の実態が明らかにされた。また、地球大気化学研究計画（IGAC）の一環として、アジア・西太平洋地域における大気化学過程の観測研究も行なわれた。これらの研究を通して、地球に関する諸科学と地球化学との協同・協調した研究が従来にまして進んだ。

第二に、観測・分析技術に著しい進展がみられた。高分解能質量分析計、高解像度干渉計などの先端分析技術の進歩は、地球環境の高感度観測を可能にした。また加速器年代測定法の出現は、海洋堆積物コア、氷床コアなどに正確な時間軸を与えることを可能にし、地球環境変動の解析を飛躍的に精密・正確なものにしている。大気、海洋および陸上における温室効果気

体のモニタリング網が確立されつつあり、地球環境の変化が克明に把握されるようになりつつある。気候変動の将来予測に大きく貢献することが期待される。

3. 推進すべき重要課題

直面する地球科学の諸課題は、測地学審議会による建議「地球科学における重点的課題とその推進について」に詳しく述べられており、これらの諸課題は地球化学が取り組むべき課題でもある。言うまでもなく、変動・進化する地球環境システムの理解にあたっては、関連分野と連携した地球化学の一層の発展が不可欠である。そうすることによってはじめて、地球環境システムの一層高度な理解が可能となる。地球環境変動に関わる地球化学において、特に推進を図るべき課題は次の事項である。

(1) 地球における炭素および他の生元素の循環と変動過程の解明

地球圏—生物圏国際協同研究計画（IGBP）では、地球温暖化に代表される地球変化を解明するために、物質循環、生物・生態系、気候システムを物理的、化学的、生物的過程と相互作用の面から総合的に研究してきた。地球環境変化の解明と予測に対して今後ますます大きな社会的要請があることは確かである。今日、人間活動による地球環境変化の将来をいかに正確に予測するかが求められており、それには自然のメカニズムを一層詳細に精密に理解することが不可欠である。しかし、現象の解析および現象を引き起こす諸因子の理解が、現状においては未だ不十分であると言わざるを得ない。地球化学の視点からは、元素・同位体・分子に基本をおいた「大気化学」「海洋炭素フラックス」「大気・海洋境界過程」「海洋・海底境界過程」「陸域・海洋相互作用」「気候変動・生態系相互作用」と「それら諸過程の歴史的変動メカニズム」などの多くの研究課題がある。これら諸過程の定量モデルの構築、それらサブシステム間の相互作用の定量モデルの構築、を目指す必要がある。また、これら諸過程の定量的理解によってはじめて、地球環境変動の正確な予測を可能とする基礎データが提供できるのである。これら諸過程の定量的モデルの構築に際しては、気象学、海洋学、生態学、地質学等の分野の協力と協同作業が不可欠である。

(2) 大気化学過程の解明とモデリング

地球環境システムの中でも大気圏を中心とする物質循環過程の解明（大気化学）は、地球温暖化を初めと

する地球環境変動の予測に直結した、地球化学の重要な研究課題である。大気化学では「温室効果気体の発生・消失過程」「エアロゾルの発生・輸送過程」「オゾン変動と大気光化学過程」などの解明、およびこれらを基本とした予測モデルの構築が重要な研究テーマである。大気化学の研究は重要であるにもかかわらず化学分野では最近まで比較的軽視されてきた。したがって本分野の推進には地球化学分野の研究者に加えて、地球環境科学への志向をもつ物理化学・分析化学者など新しい化学者の参入が必要である。大気化学の研究の遂行に当たっては、航空機、船舶、および地上観測ステーションをベースとした集中観測および長期的観測が必要である。また、観測データの解析、モデルの構築に際しては、気象学、海洋学、生態学等の分野との協同作業が不可欠である。

(3) 古環境復元のための年代測定法の開発と推進

^{14}C 加速器年代測定法の開発は、海洋堆積物コア、氷床コアに対して正確な時間軸を与えることに成功した。したがって、地球科学分野に数多くの加速器年代測定器を設置して、環境変動を高い時間分解能および精度で明らかにすることが必要である。しかし、将来予測のためのモデルの構築には、なお一層の時間分解能を上げた過去の環境変動の解析が必要とされている。これには現在の年代測定法の精度では不十分である。この状況を解決するために新しい年代測定法の開発が必要である。

(4) 環境変動過程解析のための同位体化学的手法の開発と推進

人間活動をはじめ地球上の様々な変動過程は同位体比の変動として出現し、記録されている。特に、水素、炭素、酸素、窒素、硫黄は、生物活動と密接に関係しており、反応性も高く多くの種類の化合物を作り挙動する。したがって、これらの元素を含む化学種中の同位体比に記録される情報量は莫大なものである。最近の科学技術の進歩はこれらの情報の読解を可能にしている。複雑に絡み合っている諸過程を多くの素過程に分け高感度の分析を行なうことは、地球環境システムのモデル化に必須である。この際、元素や同位体の存在比は、システムとしての地球や変化する地球の動的断面を解明する指標として重要である。同位体化学手法を大きく発展させる責任は地球化学者が負っていると言わねばならない。

4. 推進の方策：人材の養成システムの確立

地球科学の新しい展開には、大学院重点化における教育・研究体制の拡充、地球科学関連諸教育・研究機関のネットワーク化による連携体制の確立が必要不可欠であり、この方向で教育・研究体制の枠組が再編成されつつある。特に地球環境に関わる諸科学の発展のためには、関連する諸科学（地球物理学、地質学、地理学、生態学など）とともに基幹をなす地球化学の充実が必要不可欠である。この点に関して、わが国の現状は著しくバランスを欠いており、地球化学分野の人的充実に大きな立ち後れが認められる。例えば「国立19大学地球科学系教室要覧（1995年度版）」によれば、地球科学系教室および関連する研究室を構成する教員の中での地球化学系研究者の比率は地球物理学研究者の6分の1、地質学研究者の16分の1にすぎない。したがって、地球化学の人材養成システムの飛躍的・抜本的な改善が早急に必要である。この点は、測地学審議会による建議「地球科学における重点的課題とその推進について」においても指摘されている。わが国における地球化学分野の人的充実の立ち後れは、研究者養成の基幹を担う大学の現状に起因する。すなわち、地球物理学・地質学分野では、一部「地球科学科」「地球惑星科学科」等に再編成されているが、ほとんどすべての国立大学に、独立した固有の学科・大学院がある。これに対して、地球化学分野ではいずれの国立大学にも固有の学科・大学院がない。地球科学系学科に地球化学関連の講座はあるが、多くの場合地圏（固体系）のみを扱っており専門に極端な片寄りが見られる。また化学科では、無機・分析化学講座などで一部地球化学研究が行なわれているにすぎない。以上のように、現状において地球化学分野の人材養成システムは極端に不備であると言わざるを得ない。この様な状況の抜本的解決を早急に図らなければ、今後地球環境研究に欠かせない地球化学者を持続的に確保することが出来ず、結果としてわが国における研究の推進に重大な障害を招く恐れがある。日本地球化学会が全国の主要大学を対象として実施したアンケート調査によれば、現在全国の大学において何らかの形で地球化学または関連の講義が行なわれているという実態が明らかとなっている。この事実は地球化学等に対して社会的要請が高い証と考えられる。

以上を総括すると、高校および大学初年級においては一般教養としての地球環境関連の教育の普及、また

全国の大学学部においては化学系学科および地球科学系科での地球環境化学教育の強化，を図るべきである。さらに，以下の人材養成方策の実現が必要である。

- (1) 学術審議会による建議「地球環境科学の推進について」で述べられている地球環境科学における中核的研究機関ができる際には，地球化学関連の研究組織の設置が必要である。
- (2) 地球科学系学科および化学系学科（大学院）における地球化学講座の新設および拡充：全国のすべての国立大学の化学系大学院に無機系，物理化学系および有機・生命系の地球化学講座を新設する必要がある。また地球科学系学科においては流体系（地球表層部）および固体系の地球化学の講座を設置し，研究者の育成を図る必要がある。
- (3) 地球・宇宙関連の研究所における地球化学系研究部門および研究室の拡充：国立極地研究所，宇宙科学研究所などの文部省大学共同利用機関，国立大学附置共同利用研究所である東京大学海洋研究所，名古屋大学大気水圏科学研究所，北海道大学低温科学研究所などに地球化学部門を設置または拡充し，地球化学の研究の推進を図るとともに大学院教育の拡充を図る必要がある。
- (4) 地球化学専攻（大学院）の新設：地球化学の研究の推進には，化学の基礎を十分修得した人材を育成する必要がある。それには前記の諸改善に加えて，全国で少なくとも複数の国立（または公立）大学に地球化学専攻（大学院）を新設し，地球化学の総合的教育・研究体制の整備を図り，人材を育成する必要がある。ここでは地球科学・地球環境問題への広い視野と共に，元素・同位体とその化学の基礎を教育する。専攻の構成は上記の目的を達成できる構成とする。宇宙・惑星・地球内部の地球化学，大気・水圏・陸域の地球化学，生物圏・人間活動の地球化学，古環境地球化学，同位体地球化学，有機地球化学，生物地球化学などの研究室の設置が考えられる。

鉱物学研究連絡委員会

鉱床学専門委員会（第16期・第8回）議事録

日時：1997年6月3日（火） 15：30～16：30

場所：日本学術会議第5部会議室

出席者：青木義和，大本洋，富樫茂子，西山孝，広井美邦，松枝大裕，渡辺洵

議事

I. 承認事項

1. 第7回議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 17期への申し送り事項

下記3点を17期の委員会へ申し送ることにした。

- (1) 惑星科学専門委員会の設置に伴い，同専門委員会に鉱床学専門委員会から学術会議会員1名を出すことが前回は承認されたが，その枠を復帰させる努力をする。
- (2) 専門委員会が研連と同じ権限をもてるようになったので，例えば専門委員会が中心となってシンポジウムを行うなど，この権限を大いに活用すること。そのひとつとして資源地質学会と地球化学会にまたがる内容のシンポジウムを企画し，実施すべく検討する。
- (3) 「鉱床学関連研究者・大学院生名簿」を3年に1回発行する。

1997年度地球化学若手会のご案内

地球化学若手会は，主に大気圏や水圏の地球化学に携わる全国の若手研究者が一同に会し，共に議論し，情報交換を行い，親睦を深めることを目的に活動しています。今年も研究活動の報告と観測の体験談等を兼ねた一般講演と，参加者全員による自己紹介（5分程度，OHPシート2枚程度）の時間を設ける予定です。

日程：11月1日（土） 15：00 受付開始

11月2日（日）

11月3日（文化の日）昼食後解散

場所：培本塾会館（財）

〒421-04 静岡県榛原郡榛原町静波108番地

TEL：0548-22-0136

参加費：一般 ￥12000，学生 ￥9000（宿泊費・食費・交流会費を含む）

申し込み・お問い合わせ（締め切りは9月30日です）

〒522 滋賀県彦根市八坂町2500番地

滋賀県立大学 環境科学部 小畑元

TEL：0749-28-8309（ダイヤルイン）

FAX：0749-28-8463

e-mail：obata@ses.usp.ac.jp

（7月から8月まで不在）

又は

〒520 滋賀県大津市打出浜1-10

滋賀県琵琶湖研究所 早川和秀

平成9年度（第19回）沖縄研究奨励賞

候補者推薦について

平成9年度の沖縄研究奨励賞候補者の学会推薦に関する連絡が本学会宛参りましたのでお知らせいたします。

学会推薦の詳細は，庶務幹事までお問い合わせください。

1. 推薦応募開始：平成9年7月15日
2. 推薦応募締め切り：平成9年9月30日（当日消印有効）

3. 受賞者発表：平成9年12月8日頃

4. 贈呈式・受賞者記念講演：平成10年1月22日，那覇市内のパシフィックホテル沖縄で開催
問い合わせ先：

〒100 東京都千代田区霞ヶ関3-6-15

グローリアビル7階

（財）沖縄協会「沖縄研究奨励賞」係

TEL：03-3580-0641，TAX：03-3597-5854

気象研究所研究官公募

表記公募の案内が参りましたのでご案内いたします。

1. 公募人員：地球化学研究部 研究官 1名
国家公務員 研究職俸給表2級への採用
2. 担当研究内容：地球環境の変化や気候変動の解明を目的とし，気象・地象及び水象における物質循環を総合的に解明するための，同位体を中心とする地球化学的研究
3. 応募資格：採用時において，大学院博士課程単位取得者でかつ博士学位を有している者
4. 公募締切：平成9年8月29日（金）必着
5. 提出書類：
 - ・履歴書（市販の用紙可。写真添付）
 - ・学部卒，修士修了及び博士修了証明書
 - ・成績証明書（学部，修士及び博士）
 - ・学位授与証明書
 - ・健康診断書（国公立医療機関のもの）
 - ・主要研究業績一覧表
 - ・主要論文の別刷 5編以内
 - ・これまでの研究概要と今後の抱負（3000字程度）
6. 送付先及び
問い合わせ先：〒305 つくば市長峰1-1

気象研究所

総務部総務課 人事係長 松井一郎

TEL：0298-53-8555（ダイヤルイン）

FAX：0298-53-8549（総務部総務課）

送付について：封筒の表に「地球化学研究部研究官応募書類在中」と朱書き，書留で郵送してください。

7. 選考方法：気象研究所選考採用委員会にて採用を決定する。

8. 採否の通知：書面により応募者あてに通知する。

9. 採用時期：面接後できるだけ早い時期。

東京大学大学院理学系研究科・理学部・

地球惑星物理学教官公募のお知らせ

表記公募の案内がまいりましたのでお知らせいたします。

公募人員：地球惑星進化学大講座の教授1名

研究分野：広い意味での惑星科学を研究する人。教育にも意欲のある人を望みます。

応募書類など：以下の書類を郵送してください。

- (1) 履歴書（学歴および職歴）
- (2) 業績目録（査読の有無で区別する）
- (3) 主要論文3編程度の別刷りまたはコピー
- (4) 他薦の場合は推薦状，自薦の場合は応募者に関する所見をいただける2～3名の方の氏名と連絡先（住所，電話等）
- (5) 自薦，他薦ともに将来の研究計画・抱負など（A4版1枚程度）

応募・推薦締め切り：平成9年9月9日（火） 必着

書類送付先並びに問い合わせ先：

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院理学系研究科・理学部

地球物理学専攻 専攻長 飯島健

TEL：03-3812-2111内4584

FAX：03-3818-0745

書留で送付し，封筒の表に「教官応募」と朱書のこと

年代夏の学校（第22回フィッシュント

ラック研究会共催）のご案内

表記の案内が参りましたのでお知らせいたします。
1994年度から毎年夏に開催されております「年代夏の学校」を，今年度は琵琶湖を眼下に望む滋賀県高島郡今津町にあります施設にて行います。従来，この

「年代夏の学校」ではK-Ar法, Ar/Ar法に研究の基盤をおく方が主として活躍されてきました。今回はフィッシュントラック研究会との共催ということもあり, K-Ar, Ar/Arをはじめとしたいろいろな年代測定法の最新のレビューをするセッションや, 年代標準試料や試料の前処理に関する議論をするセッションを予定しております。とくにこれまで参加されていなかった分野(例えばSIMS, SHRIMP等を用いた年代測定や, ESR, CHIME法, 等々)の方, ぜひ参加して講演・議論をお願いいたします。

記

研究会日時: 1997年8月28日(木)~30日(土)

場所: 滋賀県高島郡今津町 ビラデスト今津

(TEL: 0740-22-6868)

JR湖西線近江今津駅下車, 自動車で約20分(13km)

ある程度まとまった人数がそろった場合送迎バスがでます。

費用: 2泊で宿泊費, 会場費, 食費・懇親会費込で20000円程度の予定。

連絡先: 長谷部徳子

〒920-11 金沢市角間町

金沢大学理学部地球学教室

TEL: 0762-64-5727or5723 (事務室)

FAX: 0762-64-5746

e-mail: hasebe @ kenroku.ipc.kanazawa-u.ac.jp

「酸性雪(雨)に関する国際会議'97」

の開催のお知らせ

(International Congress of Acid Snow and Rain)

上記国際会議の案内がまいりましたのお知らせいたします。(本学会も後援しています)

開催日: 1997年(平成9年)10月6日~8日

開催場所: 新潟大学五十嵐キャンパス

(〒950-21 新潟市五十嵐2の町8050番地)

主催: 新潟大学酸性雪(雨)に関する国際会議実行委員会

後援: 日本地球化学会他

参加費: 大学関係者, 後援学会員 25,000円,

同伴者 10,000円, 学生 8,000円,

その他 35,000円

会議内容: 酸性雪(雨)の最近の研究成果及び関連する研究成果について討論する。

Conference Topics (Session titles) は次の通り。

- (1) Characteristics of Acid Snow and Rain
- (2) Analytical Methods, Monitoring, Data Analysis
- (3) Environmental Hazards by Acid Snow and Rain
- (4) Air Pollution by Combustion
- (5) Counter Plan, Policy, and Protection
- (6) Effects on ecosystem (Forests, Water, Soil, and Air)
- (7) Remote Sensing of Environmentally Stressed Regions Affected by Acid Snow and Rain
- (8) Other Topics Concerning with Acid Snow or Rain

その他: 前日(10月5日)には, 市民向けの以下の公開講演会(参加費: 無料)が行われます。

- (1) 「地球規模での酸性雪(雨)について」
環境庁国立環境研究所 村野健太郎
- (2) 「酸性雪(雨)にさらされているヨーロッパの森林」
Czech Geological Survey by Pro. Tomas Paces

連絡先: 〒950-21 新潟市五十嵐2の町8050番地

新潟大学工学部化学システム工学科内「酸性雪(雨)」に関する国際会議'97」

事務局長 田口洋治 助教授

TEL: 025-262-6787, FAX: 025-263-3174

e-mail: taguchil @ eng.niigata-u.ac.jp

第8回ヒ素シンポジウム開催のお知らせ

表記シンポジウムには本学会も協賛しておりますのでご案内いたします。

開催日: 1997年11月20日(木)・21日(金)

場所: 大阪市立大学学術情報センター

(大阪市住吉区杉本3-3-138 JR阪和線杉本駅下車徒歩5分)

特別講演: 八木美雄 環境庁水質保全局企画課

地下水・地盤環境室 室長

「日本におけるヒ素にかかる汚染の現状と規制の動向」

一般講演: ヒ素に関するあらゆる分野の演題を歓迎いたします。

(1)ヒ素の生体への影響, (2)環境におけるヒ素の分布と化学形, (3)生物によるヒ素の生体濃縮と生体内変換, (4)環境からのヒ素の除去方法, (5)ヒ素の分析法,

(6)ヒ素の化学と工業

発表方法: スライドかOHPを用いた口頭発表(発表10分質疑5分を予定)

抄録代: 3000円(参加費を含む) 懇親会費5000円

演題申し込み締め切り: 1997年6月30日(月)

(原稿締切は8月29日)

参加申し込み締め切り: 1997年8月29日(金)

申し込み及びお問い合わせ先:

第8回ヒ素シンポジウム事務局

〒545 大阪市阿倍野区旭町1-4-54

大阪市立大学医学部環境衛生学教室

TEL: 06-645-2056, FAX: 06-646-0722

Migration '97のご案内

第6回「Chemistry and Migration Behavior of Actinides and Fission Products in the Geosphere」

この国際シンポジウムは本学会の共催となっております。

主催: 日本原子力学会

共催: 日本分析化学会, 日本化学会, 日本地球化学会

期日: 10月26日(日)~31日(金)

会場: 仙台国際ホテル

プログラム:

第1日(26日, 15:30~20:30)

参加登録, レセプション

第2日(27日, 8:30~20:00)

講演セッション: B1, A2, C3; 特別講演, ポスターセッション A2~5, B1, 4, 5, C1~3, 5

第3日(28日, 8:30~20:00)

講演セッション: A1, B2, B4, B5; 特別講演, ポスターセッション A1, B2, B3, C4

第4日(29日, 8:30~13:30)

講演セッション: A4, A5, B2; 特別講演, エクスカージョン(午後より)

第5日(30日, 8:30~21:00)

講演セッション: B2, B3, C4, C5; 特別講演, パ

ンケット

第6日(31日, 8:30~16:00)

講演セッション: Radionuclide & Soils, 講演セッション B5, 特別講演

セッションタイトル

A. Chemistry of actinides and fission products in natural aquatic systems

- 1) solubilities and dissolution reactions
- 2) complexation with inorganic and organic ligands
- 3) redox reactions
- 4) colloid formation
- 5) experimental methods

B. Geochemical interactions and transport phenomena

- 1) diffusion and migration in geologic media
- 2) sorption/desorption phenomena
- 3) natural analogue
- 4) effects of biological activities and organic materials
- 5) colloid transport

C. Data base development and modeling

- 1) data selection and evaluation
- 2) data base management
- 3) geochemical models and modeling
- 4) application of models
- 5) validation of modeling results

参加料: 6万円(一日のみの登録 3万円)

連絡先: 〒319-11 茨城県東海村

動力炉・核燃料開発事業団

地層処分開発室 油井三和

TEL: 029-282-1111(代)

e-mail: yui @ tokai.pnc.ac.jp

ホームページ <http://WWW.jaeri.gp.jp/~intro/MIGRATION>

地球惑星科学関連学会 連絡会ニュース

No. 13

(1997年6月)

目次

お知らせ

地球惑星科学関連学会 1998 年合同大会のセッション, シンポジウム

提案の一般公募について

1998 年合同大会実行委員会

記事

1997 年合同学会名古屋大会を終えて

小川 克郎

1997 年合同大会報告と反省

加藤 学

1998 年合同大会(東京)の開催方法について

河野 長・寺沢 敏夫・中嶋 悟

= お知らせ =

地球惑星科学関連学会 1998 年合同大会のセッション, シンポジウム提案の一般公募について

1998 年合同大会実行委員会

1998 年合同大会は5月26日(火)~29日(金)に国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区代々木神園町3-1)で開催されます。この合同大会においては、従来と異なり共通・固有の区別はありません(本号記事を参照)。また、セッション及びシンポジウムは、各学会プログラム委員等からの申し出と一般公募の両方で募集します。各学会宛には提案方法について別途連絡いたしますので、以下では一般公募について述べます。

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

ニュースへの、皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー(マックもしくはDos/Vいずれでも結構です)での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は10月下旬もしくは11月初旬頃を予定していますので、ニュース原稿は10月中旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。

また、日本地球化学会のホームページの開設を現在企画しております。

すでに暫定版を試験的に <http://info.riken.go.jp/lab-www/nuc-chem/GSHOME.HTM>

にて運用しております。

御意見等をお寄せください。なるべく早くしかるべき場所に正式に開設する予定ですので、その際はまたご案内申し上げます。

(編集担当 高橋和也)

編集担当者

高橋和也

〒351-01 埼玉県和光市広沢2-1

理化学研究所 核化学研究室

電話: 048-467-9420

FAX: 048-462-4654

E-mail: kazuyat@postman.riken.go.jp

米田成一

〒169 新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館 理工学研究部

日本地球化学会ニュース

No. 151

1997. 12. 10

主な記事

●学会記事

- 1997年日本地球化学会総会報告及び事業報告
- 学会賞（日本地球化学会1998年度「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」候補者推薦について
- 鳥居基金の募集
- 評議員会，各委員会，研連議事録
- 日本地球化学会よりの，その他のお知らせ
- その他の研究助成，学会，シンポジウム等の各種情報のお知らせ
 - 猿橋賞・笹川助成・多摩川研究
 - シンポジウム，講演会，人事公募など
- その他（鳥居基金実施報告，書評など）
- 1998年度地球惑星科学関連学会合同大会のお知らせ（連絡会ニュース）

現在，日本地球化学会のホームページを学術情報センターのホームページ内の Academic Society Home Village の中で公開しております。URL アドレスは，<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj2/index.html> です。

また従来通り，<http://info.riken.go.jp/lab-www/nuc-chem/GSHOME.HTM> にても，公開しておりますので，ご覧の上，ご意見，ご要望をお寄せください。みなさまのご協力で，より魅力的でアップデートなものにしていきたいと思っています。

1997年度日本地球化学会総会報告

1. 1997年度日本地球化学会総会は、9月18日14時30分より、東京都立大学大ホールにおいて、下記の総会次第に従って行われた。

総会議事次第

1. 開会宣言
2. 議長選出 議長には、吉村和久会員（九州大学）が選出された。
3. 会長挨拶 高岡宣雄会長
4. 大会実行委員長挨拶 石渡良志副会長
5. 議事
 - 1) 1996年度事業報告ならびに決算報告および監査報告
 - 2) 1997年度事業中間報告ならびに決算中間報告
 - 3) 1998年度事業計画ならびに予算案
 - 4) 1998～99年度役員選挙報告
赤木右選挙管理委員長
 - 5) 鳥居基金助成実施報告
石渡良志鳥居基金委員会委員
 - 6) 名誉会員の推挙 (P. K. Kuroda 会員)
高岡宣雄会長
 - 7) その他
6. 1997年度日本地球化学会柴田賞・奨励賞授賞式
 - 1) 柴田賞 立本光信博士
「U-Pb, Lu-Hf 同位体惑星科学の研究」
 - 2) 日本地球化学会奨励賞 岩森光会員
「地球化学的数値実験によるマグマの形成・移動メカニズムの研究」
 - 3) 日本地球化学会奨励賞 木多紀子会員
「エンスタタイトコンドライトおよびユレイライトに関する年代学的研究」
7. その他
8. 閉会宣言

1996年度事業報告

1997年9月18日

1. 会員状況

	正会員 (学生)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
1996年1月1日	995 (92)	20	11	1026	(40)
入会	83 (46)	1	0	61	(8)
退会	26 (2)	0	0	26	(1)
変更	0 (-10)	0	0		(1)
除籍	2 (0)	0	0	0	(0)
1996年12月31日	1050 (126)	21	11	1082	(48)

2. 年会、委員会などの開催

年会 (8/27～8/31; 札幌, 北海道大学大学院地球環境科学研究科), 春季シンポジウム (3/29; 大阪, 地球惑星科学関連学会1996年合同大会, 大阪大学豊中キャンパス), 総会 (8/29; 札幌, 北海道大学大学院地球環境科学研究科), 評議員会3回 (2/10, 6/29, 8/26), 幹事会3回 (2/3, 6/22, 8/19), GJ編集委員会6回, 地球化学編集委員会1回, 学会賞等受賞者選考委員会1回, 将来計画委員会1回, 財政委員会5回, 会員問題等検討委員会2回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 30 (1～6)

地球化学 Vol. 30 (1～2)

4. ニュース発行 No. 144 (2/5), 145 (6/15), 146 (7/17), 147 (10/29)

5. 日本地球化学会賞等の授与 (柴田賞1件, 学会賞1件, 奨励賞2件, 功労賞1件)

6. 1996年度鳥居基金助成: 第1回 (海外派遣2件, 研究集会1件), 第2回 (海外派遣1件, 研究集会1件)

7. 日産学術助成推薦 (一般研究1件推薦)

8. 公開講演会「地球を知ろう: 最先端の地球化学」(8/31; 札幌, 北大クラーク会館; 科学研究費補助金研究成果公開発表B)

9. 学会など共催, 後援, 協賛

- ・第8回掘削による大陸地殻観測に関する国際ワークショップ (後援) つくば, 2/26～28
- ・第3回「アジア学術会議—科学者フォーラム」(後援) 東京, 3/25～28
- ・1996年度質量分析連合討論会 (共催) 福井, 4/24～26
- ・第33回理工学における同位元素研究発表会 (共催) 東京, 7/1～3
- ・第12回 ESR 応用計測研究会 (協賛) 奈良, 9/14～15
- ・シンポジウム「21世紀の地球環境科学への地球化学の役割」(共催) 東京, 9/27
- ・東京湾海洋環境シンポジウム (共催) 東京, 10/11
- ・国際シンポジウム「北太平洋における生物地球化学的過程」(共催) むつ市, 11/12～14
- ・第4回「環境と化学」講演会 (共催) 東京, 11/14～15

1997年度事業中間報告

1997年8月29日

1. 会員状況

	正会員 (シニア)	(学生)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
1997年1月1日	1050	(0)	(126)	21	11	1082 (48)
入会	44	(0)	(28)	0	0	0 (0)
退会	44	(0)	(6)	1	0	0 (2)
変更	0	(4)	(-22)	0	0	0 (0)
除籍	0	(0)	(0)	0	0	0 (0)
1997年7月31日	1050	(4)	(126)	20	11	1081 (46)

2. 年会、委員会などの開催

年会 (9/17～19; 八王子, 東京都立大学教養部), 春季シンポジウム (3/26; 名古屋, 地球惑星科学関連学会1997年合同大会, 名古屋大学東山キャンパス), 総会 (9/18; 八王子, 東京都立大学教養部), 評議員会4回 (2/15, 6/14, 9/16, 9/19), 幹事会3回 (2/8, 6/7, 9/6), GJ編集委員会4回, 地球化学編集委員会1回, 学会賞等受賞者選考委員会1回, 将来計画委員会1回, 名誉会員推薦委員会1回, 選挙管理委員会2回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 31 (1～4)

地球化学 Vol. 31 (1～3) + 索引号 (Vol. 1～30) + 特別号 (会員名簿)

4. ニュース発行 No. 148 (1/31), 149 (5/31), 150 (8/5) (「地球化学」と合本)

5. 1998～1999年度日本地球化学会役員選挙

6. 日本地球化学会賞等の授与 (柴田賞1件, 奨励賞2件)

7. 名誉会員の推挙 (1名)

8. 1997年度鳥居基金助成: 第1回 (なし), 第2回 (海外派遣1件)

9. 日産学術助成推薦 (奨励研究1件)

10. 公開講演会「生命の起源と惑星探査」(9/13; 東京, 科学技術館サイエンスホール; 科学研究費補助金研究成果公開発表B)

11. 「GJ」+「地球化学」販売促進キャンペーン (181機関・会社へ free copy 送付)

12. 学会など共催, 後援, 協賛

- ・1997年度質量分析連合討論会 (共催) 奈良, 5/14～16
- ・第13回 ESR 応用計測研究会 (協賛) 新潟大学, 8/28～29
- ・「酸性雪 (雨) に関する国際会議」(後援) 新潟,

10/6～8

- ・国際会議「MIGRATION'97」(共催) 仙台, 10/26～31
- ・「生物・環境試料の超長期保存ネットワークに関する国際ワークショップ」(後援) 大阪, 11/3～6
- ・第8回「ヒ素シンポジウム」(協賛) 大阪市立大学, 11/20～21
- ・第5回「環境と化学」講演会 (共催) 東京, 11/27～28
- ・第12回「大学と科学」公開シンポジウム (セッション名: マグマと地球) (後援) 新潟, 11/1～2

1998年度事業計画

1997年9月18日

1. 年会 (10月9～11日: 福岡, 九州大学理学部)
2. 総会 (10月10日: 福岡, 九州大学理学部)
3. 地球惑星科学関連学会1998年合同大会 (5/26～29, 東京代々木, 国立オリンピック記念青少年総合センター) (固有セッションなし)
4. 評議員会3回
5. 幹事会3回
6. 会誌発行
Geochemical Journal Vol. 32 (1～6)
地球化学 Vol. 32 (1～4)
ニュース (No. 152, 153, 154, 155)
7. 日本地球化学会賞等の授与
8. 名誉会員の推挙
9. 1998年度鳥居基金助成, 2回
10. 日産学術助成推薦
11. 学会など共催, 後援, 協賛
 - ・1998年度日本質量分析総合討論会 (共催) 高崎市文化会館, 1998/5/13～15
 - ・第32回宇宙空間科学コスパー総会 (共同主催) 名古屋国際会議場, 1998/7/6～11

1998～1999年度日本地球化学会役員選挙結果報告

役員選挙管理委員会委員長 赤木 右
委員 大隅多加志
委員 野津憲治
(立会人 楊 宗興, 津野 宏)

1. 投票総数 72, 有効投票 72

2. 会長	当選	石渡 良志	67
	次点	一國 雅巳	1
		北 逸郎	1
	白票		3
3. 副会長	当選	松久 幸敬	69
	次点	角皆 静男	1
		和田英太郎	1
	白票		1
4. 監事	当選	脇田 宏	67
	次点	石渡 良志	1
		田中 剛	1
		半田 暢彦	1
		増田 彰正	1
	白票		1

5. 評議員

当選	海老原 充	56	当選	清水 洋	55
当選	日下部 実	54	当選	中井 俊一	47
当選	松田 准一	42	当選	佐野 有司	40
当選	坂本 尚義	40	当選	高橋 和也	39
当選	篠原 宏志	38	当選	長尾 敬介	38
当選	蒲生 俊敬	36	当選	川邊 岩夫	35
当選	河村 公隆	35	当選	下山 晃	35
当選	中村 昇	34	当選	柳 哮	34
当選	米田 成一	34	当選	和田英太郎	34
当選※	齋藤 和男	33	当選※	吉田 尚弘	33
次点	※野崎 義行	33			
	鈴木 徳行	32		中村 俊夫	32
	南川 雅男	32		和田 秀樹	31
	今井 登	29		高野穆一郎	28
	奈良岡 浩	28		益田 晴恵	28
	加藤 義久	23		高田 秀重	23
	福島 和夫	23		中山英一郎	21
	能田 成	19		(他42名, 47票)	
	無効	1			
	白票	218			
	投票総数	1,440			

※役員選出細則第6条(2)1の抽選による

日本地球化学会「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」

1998年度受賞者候補者推薦の募集

応募期限 1998年1月30日(金)

日本地球化学会受賞規定により、柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。

つきましては、下記ご参照のうえ、会員各位のご関

係で適当と思われる受賞候補者を自薦他薦を問わずご推薦くださるようお願いいたします。

候補者の資格

(柴田賞) 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあったもの。

(学会賞) 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。

(奨励賞) 1963年4月2日以降に生まれた本会正会員(学生会員を含む)で、地球化学の進歩に寄与する優れた研究を為し、なお、将来の発展を期待しうる者。

(功労賞) わが国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦者を1月30日(金)までに学会事務局へ(当日消印有効)。

提出先：〒113 文京区本駒込5-16-9

日本学会事務センター内

日本地球化学会受賞者選考委員会

推薦の書式は、会員名簿(1997年度版)のハンドブック部に記載されています。これをコピーして使用するか、同様の書式をワープロ等で作成して使用してください。なお、書式のわからない場合や、この件についてのお問い合わせは本会庶務担当幹事(下記)まで。

千葉 仁

九州大学理学部地球惑星科学教室

〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1

TEL: 092-642-2664

FAX: 092-642-2684

e-mail: hchiba@geo.kyushu-u.ac.jp

1998年度第1回鳥居基金の応募について

1998年度第1回鳥居基金の募集の締切は、1998年1月末締切となります。

募集要項をご参照の上(ホームページ、もしくは会員名簿号の該当項目をご覧ください。

〒113 東京都文京区本駒込5-16-9

日本学会事務センター内、日本地球化学会鳥居基金委員会まで、応募書類を提出してください。

またこの件についてのお問い合わせは、本会庶務担当幹事(下記)まで。

千葉 仁

九州大学理学部地球惑星科学教室

〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1

TEL: 092-642-2664

FAX: 092-642-2684

E-mail: hchiba@geo.kyushu-u.ac.jp

1997年度第2回鳥居基金の交付の決定のお知らせ

海外派遣1名：金龍元(北海道大学大学院地球環境科学研究所博士課程)

10万円 オーストラリア

国内研究会1件：1997年度地球科学若手会

代表者 早川和秀

(滋賀県琵琶湖研究所研究員)

10万円 1997年11月1日～3日

議事録

1997年度第2回日本地球化学会評議員会議事録

日時：1997年6月14日(土) 14:00～18:30

場所：東京大学山手上会館地階001号会議室

出席者：高岡宣雄会長、石渡良志副会長、一國雅巳監事、赤木右、植松光夫、大隅多加志、蒲生俊敬、北逸郎、佐野有司、篠原宏志、下山晃、高橋和也、田中剛、千葉仁、長尾敬介、中村昇、能田成、野津憲治、増澤敏行、松田准一、松久幸敬、南川雅男、村江達士、坂本尚義各評議員

1. 1997年度第1回評議員会議事録を承認した。

2. 報告事項

2.1 庶務・幹事会(千葉評議員)：【文部省・研究助成関係】日産科学振興財団より研究助成候補者推薦の依頼(5/10)、平成9年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費(学術定期刊行物)」交付内定の受領(5/15)、同交付申請書の提出(5/30)、平成9年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費(公開発表(B))」交付内定の受領(6/2)、同交付申請書の提出(6/13)、【学術会議関係】第17期日本学術会議会員候補者の資格認定結果の受領(3/17)、【後援・共催等】「生物・環境試料の超長期保存ネットワークに関する国際ワークショップ」(1997/11/3～6大阪千里)後援、「第8回ヒ素シンポジウム」(1997/11/20～21大阪)協賛、第13回ESR応用計測研究会

(1997/8/28～29新潟大学)協賛、【献本】地学双書26「深海底の鉱物資源」中尾征三著、地学団体研究会、地学双書27「地質と地震動」角田史雄著、地学団体研究会、【幹事会】1997年6月7日14:00～18:00に東京大学山手上会館203号室で開催した。

2.2 会計(増澤評議員)：1996年度決算、および、雑誌の販売拡大キャンペーンの送付先について報告があった。

2.3 出版(大隅評議員)：テラ学術出版と1998年度以降の契約書の改訂作業を行っている。

2.4 編集

2.4.2 GJ(松久評議員)：Vol.31, No.3は印刷完了で発送中、No.4～6の分も既に完成原稿が出来上がっている。印刷待ちの原稿が増えつつある。本年度の投稿状況は、6月13日現在で21編(昨年同期：29編)。地球化学(赤木評議員)：Vol.31, No.2は10日間ほど遅れたが、発送中。No.3は論文5編を受理済み、No.4も論文3編を受理済み、現在6編を審査中。

2.4.2 ニュース(高橋評議員)：No.139が発送中。No.140の原稿締切りが、7月10日。地球化学会のホームページを試験的に開設した。

2.5 行事

2.5.1 地惑関連学会合同大会連絡会(1997/4/22)(篠原評議員)：(1)1998年合同大会(1998年5月26～9日代々木国立オリンピック記念青少年総合センター)準備状況、(2)1999年合同大会(北大または代々木国立オリンピック記念青少年総合センター)準備状況、(3)2000年のWPGMと合同大会の共催の可能性について報告があった。

2.5.2 1997年度地球化学会年會中間報告(石渡副会長)：年會の5月末現在の準備進捗状況について報告があった。(1)ニュースNo.149掲載内容、(2)homepageの開設、(3)「化学と工業」誌6月号への年會案内の掲載、(4)関連企業の展示を行うこと、(5)宿泊の斡旋を都立大生協に依頼、(6)公開講演会：9月13日(土)13:30より科学技術館サイエンスホール。

2.6 委員会

2.6.1 将来計画委員会(石渡副会長)：6月14日に第2回委員会を開催した。「宇宙物質研究の推進について」(会長諮問)と「地球化学書の出版構想」について取りまとめた。

2.6.2 鳥居基金委員会(千葉評議員代理報告)：脇田委員長から評議員会への報告：1997年度第1回鳥居

基金は採択者なし。

2.6.3 名誉会員推薦委員会（石渡副会長）：1997年6月14日に東京大学山上海館にて開催した。出席者：石渡良志委員長、脇田宏委員、半田暢彦委員、田中剛委員、千葉仁委員。

2.6.4 学会賞受賞者等選考委員会（松田評議員）：1997年5月15日に東京学士会分館005号室にて会議を開催した。出席者：松田准一委員長、清水洋委員、角皆静男委員、半田暢彦委員、松久幸敬委員。

2.7 学術会議

2.7.1 地球化学・宇宙化学研連（第10回委員会1997/6/14、石渡副会長）：(1)対外報告「地球環境に係る地球化学の推進について」を出した。(2)研連委員の構成の確認、選出方法、(3)「対外報告」に盛り込まれた地球化学の将来計画の実現方法、(4)科研費審査委員候補者の推薦方法を討議した。

2.7.2 地質科学総合研連（第7回委員会1997/6/2、野津評議員）：次期への引継ぎ事項について討議した。現在設立の予定が立っていない地連協は、研連としては、第17期も引き続き検討する。

2.7.3 鉱物学研連鉱床学専門委員（第8回委員会1997/6/3、松久評議員）：申し送り事項として、(1)2006年のIMA日本開催を行うかどうか、(2)学会の合同開催の可能性を探ることが討議された。

2.7.4 陸水研連（第7回1997/4/18、第8回1997/5/22、赤木評議員）：(1)IUGGの2003年日本開催を正式提案することとした。(2)時限付科学研究費テーマとして、前回に引き続き「水循環」を提案することとした。(3)次期研連委員会の構成を今期と同様にすることとした。

2.7.5 海洋科学研連（第7回委員会1997/4/4、蒲生評議員）：(1)文部省の地球環境科学に関する中核的研究機関の検討結果（最終案）が取りまとめられ、学術審議会地球環境部会に報告される旨の報告があった。(2)大学の海洋調査船の有効利用に関して、水産系大学の練習船に研究船の機能を持たせる動きを支援することとした。(3)次期研連委員会の構成を今期と同様にすることとした。

2.7.6 惑星科学専門委員会（第1回委員会1997/4/24、野津評議員）：委員の構成を決めた。地球化学会は、オブザーバー1名。

2.8 その他

2.8.1 地質科学関連学協会連合（1997/4/22、高橋評議員）：発起人を立てて、設立趣意書を5月下旬に

発送することとした。

2.8.2 学校科目「地学」関連学会連絡協議会（1997/4/15、蒲生評議員）：地球化学会の内容、公開講演会等の紹介を行った。

2.8.3 地球環境科学関連学会協議会構想検討委員会（第3回1997/3/31、石渡副会長・赤木評議員）：地球環境科学関連学会協議会を発足することとし、6月を目途に趣意書を作成し、各学会に発送することとなった。

3. 審議事項

3.1 入退会者の承認：1997年1月1日から4月30日までの入会者と退会者を以下の通り承認した。

入会（32名）佐藤洋一、井上陸夫、久万健志、角井朝昭、新城則子、遠藤政彦、亀井玄人、KIRIKARI Anthony、神田稔太、掛川武、（以下学生）高橋弘樹、松本武、山田桂大、大塚良仁、林一宏、倉本敏克、久野章仁、桜井麻果、伊奥田恭輔、小田美里、海老原真弓、阿部亮太、善養寺一也、山本恵幸、高春心、大屋渡、國頭恭、津野宏、三浦典子、太田充恒、岡崎隆司、松岡賢治

退会（41名）藤田哲雄、平山光衛、堀田進、井上正美、加藤昭、加藤稜司、木羽敏泰、松尾日出夫、三木孝、目黒昇、中嶋邦雄、西川泰治、野沢保、生出慶司、重松恒信、苅木茂彦、鈴木正基、関口敬介、戸田一美、渡辺晃二、山岡一雄、白木亮司、日下部整、伊藤和男、加藤皓一、村石治人、畑中良夫、石原千晶、尾関徹、TANYILEKE, Gregory、今井直哉、町原勉、平岡義博、平山宏、佐々木清隆、島誠、（以下学生）奥田耕三、清水統、河野日出夫、仙頭宜幸、（以下賛助会員）三井石炭鉱業(株)生産保安部地質調査課

この結果、会員数は以下のようになった。

3.2 学会賞等受賞候補者について：松田選考委員会

	正会員（学生）	(ジニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
1996年12月31日	1050	(126)	(0)	21	11	1082 (48)
入会	32	(22)	(0)	0	0	32 (0)
退会	40	(4)	(0)	1	0	41 (2)
変更	0	(1-5)	(4)	0	0	0 (0)
除籍	0	(0)	(0)	0	0	0 (0)
1997年4月30日	1042	(140)	(4)	20	11	1073 (46)

委員長から、1997年度柴田賞受賞候補者：立本光信氏、日本地球化学会奨励賞受賞候補者：岩森光会員、木多紀子会員の選考結果、および、選考理由の報告が行われた。審議の後、3人の受賞候補者を承

認した。なお、同時に提案された、日本地球化学会学会賞受賞者選考細則の変更については、次回評議員会で継続審議することになった。

3.3 名誉会員の推挙について：石渡推薦委員会委員長より、P. K. Kuroda 会員を名誉会員に推薦することが提案された。審議の後、内規に従って、無記名投票の結果、P. K. Kuroda 会員を名誉会員候補者とすることが決定された。

3.4 第17期日本学術会議地球化学・宇宙化学研連委員候補者の選出（5名、任期：1997/10から2000/9）：評議員による選挙によって、野津憲治、松田准一、半田暢彦、田中剛、日下部実各会員を選出した（次点：高岡宣雄会長、清水洋会員）。

3.5 海洋科学研連委員候補者の選出（1名、任期：同上）：野崎義行会員を選出した。

3.6 地球物理学研連惑星科学専門委員会のオブザーバー候補者の選出（1名、任期：同上）：塚本尚義会員を選出した。

3.7 鉱物学研連鉱床学専門委員会委員候補者の選出（2名、任期：同上）：千葉仁、篠原宏志会員を選出した。

3.8 陸水研連委員候補者の選出（1名、任期：同上）：赤木右会員を選出した。

3.9 平成10年度科学研究費審査員候補者の選出（第2段2名、第1段4名）：分科「地球科学」第2段審査員候補者として、大気水圏生物圏関係（野崎義行、下山晃各会員）、固体地球関係（野津憲治、清水洋、田中剛各会員）を選出した。会長と副会長によって分野等を考慮して、上記5名のうちから2名が研連へ推薦される。細目「地球化学」第1段審査候補者として、大気水圏生物圏関係（下山晃、野崎義行、南川雅男、蒲生俊敬各会員）、固体地球関係（田中剛、清水洋、松田准一、長尾敬介各会員）を選出した。会長と副会長によって分野等を考慮して、上記8名のうちから4名が研連へ推薦される。

3.10 平成9年度日産学術助成推薦委員会委員の選出：会長からの発案により、平成8年度と同じ委員構成で構成することが承認された。

3.11 テラ学術出版との契約、覚え書きについて：大隅出版幹事から、Geochemical Journal の発行および地球化学の販売についての日本地球化学会とテラ学術図書出版の間の契約書案（有効期限：Vol.32（1998）～vol.36（2002））について提案があり、審議した。一部修正の上、次回評議員会で再度審議

の後、決定することとした。

3.12 1998年度年会開催地について：篠原行事幹事から九州大学を開催地とすることが提案され、承認された。

3.13 名簿作成案について：名簿の表紙、ハンドブック部の原稿が回覧され、意見を求められた。

3.14 1996年度決算について：増澤会計幹事から決算のまとめかたについて2通りの提案がなされ、審議の後、公開発表(B)の金額を組み入れた決算のまとめかたが承認された。

1997年度第3回日本地球化学会評議員会議事録

日時：1997年9月16日(火) 15:00～19:30

場所：東京都立大学91年館多目的ホール

出席者：高岡宣雄会長、石渡良志副会長、一國雅巳監事、赤木右、植松光夫、蒲生俊敬、北逸郎、佐野有司、篠原宏志、清水洋、高橋和也、田中剛、長尾敬介、能田成、野津憲治、増澤敏行、松田准一、松久幸敬、南川雅男、塚本尚義各評議員

1. 第2回評議員会議事録を承認した。

2. 報告事項

2.1 庶務、幹事会（高岡会長）：【文部省・研究助成関係】平成9年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」（学術定期刊行物）交付決定書の受領（7/31）、平成9年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」（学術定期刊行物）の受領（8/19）、平成9年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」（公開発表(B)）の受領（8/29）、【学術会議関係】研連（地球化学・宇宙化学、海洋科学、陸水、鉱床学専門委、惑星科学専門委）委員・オブザーバー候補者の推薦（6/14～7/29）、1998年度科学研究費審査員候補者の推薦（7/1）、「第17期日本学術会議会員として推薦すべきものについて」受領（7/28）、【後援・共催等】第5回「環境と化学」講演会（サブテーマ：環境と物質循環）（共催）東京、11/27～28、1998年度日本質量分析総合討論会（共催）高崎市文化会館、1998/5/13～15、第12回「大学と科学」公開シンポジウム（セッション名：マグマと地球）（後援）新潟、11/1～2、【その他】会員名簿（「地球化学」特別号）を発行（8/1）、地球環境科学関連学会協議会委員として、篠原行事幹事を推薦（8/5）、【幹事会】1997年9月6日14:00～18:00に東京大

学山上会館203号室で開催した。

2.2 編集

2.2.1 GJ (松久評議員): Vol. 31, No. 4 まで発行済。No. 5 は再校済。No. 6 も原稿がテラ学術出版に入っている。投稿状況は、9/16現在で35編 (昨年比-7)。

2.2.2 地球化学 (赤木評議員): Vol. 31, No. 3 まで発行済。No. 4 を11月に発行予定。本年度の投稿状況は、12編。

2.2.3 ニュース (高橋評議員): No. 150 を8月に発行済。No. 151 を11月に発行予定。学術情報センターにWWW 資源提供サービスを申請中。

2.3 行事 (篠原評議員)

1999年の合同大会は北大主催。2000年は合同大会 (九大主催) とWPGM (Western Pacific Geophysical Meeting) を6月に合同で開催予定であるが、共催するかどうか。合同大会連絡会の英語名をJapan Association of Earth and Planetary Science Societies とするがこれでよいか聞かれている。後日、E-mail で評議員の意見を伺う予定。

2.4 委員会

2.4.1 日産学術助成推薦委員会 (石渡委員長): 奨励研究1件を日産科学振興財団に推薦した。

2.4.2 将来計画委員会 (石渡委員長): 地球化学書出版計画についてE-mail で意見を交換した。

2.4.3 選挙管理委員会 (赤木委員長): 1998~1999年度役員選挙の結果が報告された。

2.4.4 鳥居基金委員会 (石渡委員): 1997年度第2回として、海外渡航1件の助成を決定したが、9月10日に学会事務センターから送付があった申請書1件の取り扱いについて、評議員会の意見に従う。(評議員会は、これを追加審査することを妥当とした。なお、申請書が委員長に届けられずに長期間学会事務センターに放置された原因を委員会で調査する)

2.5 学術会議

2.5.1 地球化学・宇宙化学研連 (第11回委員会1997/7/17, 石渡副会長) (1) 研連の見直しに付いて、第4部の現況を検討・審議した。(2) 対外報告「地球環境に関わる地球化学の推進について」を大学・研究機関などに送付した。(3) 平成10年度科学研究費補助金審査委員の推薦を行った。(4) 第17期への申し送り事項を審議した。

2.6 その他

2.6.1 学校科目「地学」関連学会連絡協議会 (1997/

7/15, 蒲生評議員): (1) 初等・中等理科教育に関連した各種シンポジウムの報告および案内があった。本学会の公開シンポジウム「生命の起源と惑星探査」についても紹介を行った。(2) 日本測地学会および日本岩石鉱物鉱床学会より、それぞれ学会の現状紹介、理科教育への取り組みについて報告があった。(3) 公開シンポジウム、サマースクール等の地学教育に関連する情報を有効に交換できるシステムの構築について予備的な審議を行った。(4) 次回より、中学校理科第2分野の教科書をもとに、中学校における地学教育の現状と問題点について具体的検討を行うこととなった。

2.6.2 1997年度年会夜間セッション (9/17, 17:30~20:00) (石渡副会長): 夜間セッション「地球化学の将来について」の紹介が行われた。

2.6.3 公開シンポジウム「生命の起源と惑星探査」(9月13日, 科学技術館) (石渡副会長): 公開シンポジウムを実施した事について報告がなされた。

3. 審議事項

3.1 入退会者の承認: 1997年5月1日から7月31日までの入会者と退会者を以下の通り承認した。

入会 (12名) 相馬光之, 水谷仁, 高橋嘉夫, 松本拓也, 石川義朗, BRINCAT David, (以下学生) 松門洋子, 大野敦史, 菅原透, 横尾頼子, 滝雅人, 小川奈々子

退会 (4名) 松井義人, 金子恒顕, 中川明, (以下学生) 鈴木照幸

この結果、会員数は以下のようになった。

3.2 1997年度総会提出議案について: (1) 1996年度事

	正会員 (学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
1997年12月31日	1042	(140)	(4)	20	11	1073 (46)
入会	12	(6)	(0)	0	0	12 (0)
退会	4	(2)	(0)	1	0	4 (0)
変更	0	(-18)	(4)	0	0	0 (0)
除籍	0	(0)	(0)	0	0	0 (0)
1997年4月30日	1050	(126)	(4)	20	11	1081 (46)

業報告ならびに決算報告および監査報告, (2) 1997年度事業中間報告ならびに決算中間報告, (3) 1998年度事業計画ならびに予算案を審議の上承認した。

3.3 1998年度学会賞等受賞者選考委員会委員ならびに委員長選出: 1998年度学会賞等受賞者選考委員会委員として、高岡宣雄会員と田中剛会員を投票により選出した (次点: 野津憲治会員)。また、委員長として、清水洋委員を選んだ。

3.4 学会賞等受賞者選考委員会内規について: 松田1997年度学会賞等受賞者選考委員長から提案された内規の改正案について審議し、前年度の被推薦者も選考対象者として考慮できることを、委員長が確実に次期委員長に申し送ることで対応することになった。

3.5 1998~99年度鳥居基金委員会委員の選出: 鳥居基金委員会委員の改選者を審議の上、脇田委員長および石渡委員の2名と決定し、投票により野津憲治会員および松久幸敬会員を委員として選出した (次点: 松田准一会員, 高岡宣雄会員)。また、委員長として半田暢彦委員を選んだ。

3.6 その他

(1) 地球化学書の出版企画を推進するために、将来計画委員長から提案があった「地球化学書出版準備委員会」について審議し、これを発足させることを承認した。

4. 次回

1997年度第4回評議員会 (新旧合同)

1997年9月19日(金) 17:00~18:00

東京都立大学91年館多目的ホール

第16期第10回地球化学・宇宙化学 研究連絡委員会議事録

日時: 1996年4月10日(木) 13:30~16:00

場所: 日本学術会議第4部会議室 (6F)

出席者: 石渡良志委員長, 青木謙一郎, 秋元肇, 日下部実, 中澤高清, 野津憲治, 松田准一, 矢内桂三

1. 報告事項

(1) 学術会議関係 (青木委員より)

平成9年2月13~14日に連合部会および第4部会が開かれた。

1) 連合部会では、研連の見直しに関連して、すべての専門委員会に研連と同等の権限を付与できるように運営内規の改正を検討し、5月の総会で承認を予定している。「計算機科学研究の推進について (勧告) (案)」 「学術団体の支援について (要望) (案)」を審議し、5月の総会で承認の予定である。「戦略研究の推進について (対外報告) (案)」 「高齢化社会の多面的検討特別委員会報告 (案)」を検討した。

2) 第4部会では、平成9年度国際会議代表派遣実施計画を作成し、平成11年度共同主催申請国際会議10件を審議した。電波科学研連, 地球電磁気学研連, 国際学術事業研連にまたがるSCOSTEP専門委員会の設置が承認され、地球化学・宇宙化学研連, 植物科学研連, 物理学研連からそれぞれ申請のあった対外報告が承認された。研連の運営内規改正案がおおむね了承された。

2. 審議事項

(1) 前回議事録

議事録 (案) を承認した。

(2) 対外報告

地球化学・宇宙化学研究連絡委員会対外報告「地球環境に関わる地球化学の推進について」が承認されたことを受け、活用するための方策を検討し、大学、研究機関へ配布することが了承された。

(3) 地球化学関連大学研究者調査

委員長より第4版が配られ、検討を行なった。本研連の任期中にできるだけ完全なもの作ため、各委員が手分けして不足部分を調べることとなった。

(4) 第17期への申し送り事項

委員長より申し送り事項の資料が配られ検討した。研連の構成に関して、地球物理学研連に依頼する固体系1名については、可能であれば今期中に依頼して次期成立時にすぐに委員が決まるようにしたい旨、委員長から提案があり了承された。

(5) 平成10年度科学研究費補助金審査委員の推薦は第一段審査委員2名、第二段審査委員1名であることを確認し、審査委員候補者の各学協会への依頼は、昨年と同様の方式で行なうことが了承された。

(6) 科学研究費細目「地球化学」のキーワードについて、従来記載されている「物質移動」を「物質循環」に、「年代測定」を「同位体」に変更する希望を第4部会に提出することとなった。

(7) 次回 (第11回) 委員会

平成9年7月17日(木) 13時30分からはを予定することとした。

シニア会員について

昨年、ご承知のように、日本地球化学会では、会則

改正を行い、シニア会員制度を設けましたが。しかしながら、まだ、幅広いご認識がいただけていない様にも思われます。会員歴35年以上かつ年齢70歳以上の方は、申告いただければシニア会員となれます（会費は年額5,000円になります）。どうか、該当する方がいらっしゃれば、御申告くださるようお願いいたします。申告は、名簿号等について「日本地球化学会（入会・変更）申込書」に、記入の上、日本学会事務センターにご送付ください。評議員会で承認の上、シニア会員へ移動させていただきます。

会員の所属、連絡先についてのお問い合わせ

現在、学会事務センターで以下の方々について住所不明となっております。

ご存じの方は、本会庶務監事までご連絡をお願い申しあげます。

会員番号	氏名	旧所属 or 連絡先
067-928-1622	河田 陽介	三菱マテリアル(株)原子力技術センター
067-728-1507	佐藤 芳和	(株)マクミラン・リサーチ研究所
067-728-1790	尹 松	室蘭市水元町15-4-304
067-328-1840	小棚木章直	北海道大学大学院地球環境科学研究科
067-628-1805	小村 哲司	大阪大学理学部
以上		

1998年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者及び研究助成候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」(1980年創立)は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年賞(猿橋賞)を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成することにいたしました。

賞金と助成金は、本会を母体として新設された、公益信託(1990年3月13日文部省認可)「女性自然科学者研究支援基金」(受託者登用信託銀行株式会社)から支出されます。つきましては、下記の要領により受賞候補者と研究助成候補者の推薦をお願いいたします。

記

猿橋賞

本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者(ただし、下記の推薦締切日で50歳未満)に贈呈します。

1. 本賞は賞状とし、副賞として賞金(30万円)をそえます。
 2. 本賞の贈呈は1年1件(1名)です。
 3. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)、略歴、主な業績リスト、主な論文別刷10編程度を、本会事務局までお送り下さい。
 4. 締切は1997年11月30日(必着)。
 5. 第18回の賞贈呈式は、1998年5月、東京において行なう予定です。
- なお、最近3年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

猿橋賞受賞者

- 第15回(1995) 東京工業大学理学部助教授
石井志保子博士
「代数幾何字における特典点の研究」
- 第16回(1996) 理化学研究所主任研究員
川合真紀博士
「固体表面における化学反応の基礎研究」
- 第17回(1997) 名古屋大学生物分子応答研究センター
助教授 高倍鉄子博士
「植物耐塩性の分子機構に関する研究」

研究助成

1. 海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
 2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
 3. 所定の用紙に推薦対象者(各締切日において満40歳未満)の略歴、研究業績、国際会議名(主催団体、開催場所、年月日)、発表論文題目、推薦理由を記入して、本会事務局までお送りください。
- 締切は1997年11月末日と、1998年4月末日の2回。

女性科学者に明るい未来をの会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217
電話 03-3330-2455 (FAX 兼用)

平成10年度笹川科学研究助成募集要領

1. 趣旨

「笹川科学研究助成」は、21世紀に向かって真に質の高い社会の実現のため萌芽性、新規性および独創性のある内容をもった研究を奨励し、振興することを主旨とし、他からの研究助成が受け難い研究を全国的に掘り起こすとともに、意欲に満ちた優れた若手研究者の育成ならびにその研究に対する助成を目的とします。

2. 対象となる領域ならびに申請区分

人文学、社会科学および自然科学(医学を除く)、またはそれらの境界領域に関する研究。なお、本年度は上記領域を次の申請区分に分けます。

- (1) 一般科学研究
- (2) 学芸員・図書館司書等が行う研究
- (3) 海洋・船舶科学研究

3. 研究計画および助成額

研究計画は、単年度(平成10年4月1日から平成11年2月28日まで)内て研究が完了し、成果をとりまとめられるものとします。

なお、次年度以降も継続して行う必要がある研究計画については、その研究の内容に応じ3ヶ年を限度とし、各年度ごとに審査の対象とします。ただし、次年度以降の助成については、内約いたします。

助成額は、1研究課題あたり年間100万円を限度としています。

4. 募集の対象者

平成10年4月1日現在、35歳以下の者であって、次の条件を満たす者。

ただし、大学院生、学芸員および図書館司書等にあっては、その限りではありません。

〈応募条件〉

平成10年4月1日現在、大学院修士課程ならびに博士(前期・後期)課程に在籍する者、および進学予定者。

- (1) 大学院生と同等以上の能力を有する者
- (2) 大学、研究所、研究機関、教育機関等において研究活動に従事する者
- (3) 博物館(含む類似施設)で学芸業務に従事している学芸員等および図書館で情報処理等に関し研究活動に従事する司書等

5. その他の申請条件

研究計画は、申請者が主体となつて行う研究とします。その研究は、平成10年4月から着手しようとする研究および研究途上の研究とします。

(1) 他の研究助成団体等から既に助成を受けている研究、助成を受けることが内定している研究およびその研究が実質的に完了している研究は、対象となりません。

(2) 申請者は、申請時に日本国外在住であっても研究実施の本拠は日本国内とし、当該研究完了までには在日できるものとします。

(3) 申請者が、外国からの留学生ならびに研究員にあっては、所属大学院等の日本在住の研究指導者もしくは日本人研究協力者を必要とします。

(4) 申請者は、当該研究について推薦書を必要とします。なお、大学院生の申請者は、研究指導者の推薦書、学芸員(含む学芸員補)および図書館司書等にあっては所属館長の長もしくは所属長の推薦書を必要とします。

(5) 申請は、1個人1研究計画に限りま。

(6) 外国人研究者の方で平成10年度の日本学術振興会における外国人特別研究員に内定した方は、本研究助成を受けることができません。

6. 申請の方法

所定の「平成10年度笹川科学研究助成交付申請書」を用いて下さい。

7. 募集期間

平成9年9月1日(月)から平成9年10月31日(金)〈必着〉までとします。

8. 募集方法

新聞、各種学会ニュースその他で一般公募します。

9. 選考方法

(財)日本科学協会内に学術専門領域別からなる学識経験者で構成する笹川科学研究助成選考委員会を設け、審査選考を行います。

なお、申請者に対して研究内容等について、照会する場合があります。

10. 決定通知

助成金の決定は、平成10年4月中旬に通知します。

なお、内定は、平成10年3月末日までにお知らせします。

11. 助成の対象となる研究費

平成10年4月1日から平成11年2月28日まで、研究の実施に直接必要な経費とします。

12. 交付方法

本研究助成金の交付は、個人名義宛となります。

13. 助成金交付決定後の主な手続き等

- (1) 助成金の決定通知を受けた者は、本会と研究実施に必要な約定を定めた覚書を締結し、中間報告および研究成果報告（終了時）を提出することになります。
 - (2) 本会が研究発表会を開催する場合は、出席のうえ口頭発表（ポスターセッション等を含む）をお願いすることもあります。
14. 申請書の申込方法
申請書のお申し込みは、官製ハガキ、FAXもしくは、E-mailにて郵便番号、住所、氏名、電話番号および希望部数を明記の上、ご連絡下さい。
15. その他
提出された申請書は返却いたしかねますので、ご了承ください。

財団法人日本科学協会笹川科学研究助成係
〒105 東京都港区虎ノ門1-11-2
第2船舶振興ビル3F
TEL: 03-3502-1931 FAX: 03-3580-8157
E-mail: LDG01360@niftyserve.or.jp

“多摩川およびその流域の環境浄化に関する調査・試験研究” 募集

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に343件の研究に対して助成いたしました。

平成10年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」を下記のとおり募集いたします。

1. 研究対象者
学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。
2. 研究対象テーマ
(1) 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究産業構造の変革により多摩川流域においても従来型の産業が減少し、ハイテク産業が上流域に立地するようになり、自然環境に影響を与えております。
また、住生活においては、中流域で人口の過密化があり、最上流域では過疎化が顕著になっていきます。これ等都市問題を解決すべく今後の土地利用、都市計画、文化活動等視野の広い観点に立つ

- た研究が望まれます。
- (2) 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
産業排水は法規制等により減少し、現在は家庭雑排水が汚染の原因の多くを占めているといわれています。多摩川流域においても河川、地下水の有害金属、発癌性物質、農薬汚染、酸雨等問題化しております。これ等が人間を含む生物にどのような影響を与えるのか、その実態、解決策などの調査、研究を望みます。
- (3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・研究
毎年夏の水不足は全国各地に深刻な影響を与えております。雨水による地下水の涵養等が各地で試みられています。多摩川流域における水循環システムについてあらゆる角度から調査研究をして頂きたいと思います。
- (4) 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・試験研究
建設省は「多自然型川づくり事業」「魚がのぼりやすい川づくり事業」を推進しております。多摩川もモデル河川として親水護岸整備、堰の魚道整備を行っています。多摩川には年間を通して1600万人もの人々が訪れています。川の自然と人間が以下に共生できるか、環境管理のあり方の研究を含め、課題となっています。地域住民の視点、研究者の視点で自然環境の保全、回復のあり方についての調査、研究、提言を望みます。

◆公募締切日 平成10年1月16日
応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。
〒150 東京都渋谷区渋谷1-18-14
(渋谷地下鉄ビル内)
電話 (03) 3400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

九州大学理学部教官公募のお知らせ

表記の公募案内がまいりましたので、ご案内申し上げます。
助教授1名。
専門分野: 有機地球科学 (天然有機物, 生命の起源, 地球外有機物等を含む)。基礎的な有機化学の講義ができる方。提出書類: 履歴書, 研究歴と研究・教育に対する抱負 (各A4用紙2枚以内), 業績リスト, 主要論文3編の別刷各一部 (業績リストに○を付け

る), 応募者を熟知し, 意見を伺える方2名の氏名と連絡先。

応募締切: 平成9年11月28日(金)。

提出・照会先

〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学理学部地球惑星科学教室

有機地球科学講座所属助教専攻委員会

委員長 村江達士

電話(092)642-2660 (直通)

E-mail: murae@planet.

geo.kyushu-u.ac.jp

「応募書類在中」と朱書き書留で郵送のこと。

以上

平成9年度放医研環境セミナーの御案内

表記のセミナーの案内がまいりましたのでお知らせいたします。

恒例の放医研環境セミナーを日本保健物理学会と共催で、平成9年12月4日(木), 5日(金)の2日間、放医研講堂において開催します。今年のテーマは「宇宙と地球の放射線環境—その未来予測への挑戦—」で、環境放射線, 地球科学, 宇宙科学, 生命科学を総合した内容に取り組み, 広い分野の専門家を講師に招くとともに, パネルディスカッションを開きます。

特別講演として「宇宙の過去と未来」(4日: 小田稔・東京情報大学学長), 「宇宙・地球環境の変貌と生命」(5日: 桜井邦朋・神奈川大学学長) があるほか, 松井孝典 (東大理学部), 小口美津夫 (航空宇宙技術研究所), 佐竹研一 (国立環境研究所), 伊勢崎修弘 (千葉大理学部), 阿部貴宏 (宇宙開発事業団), 岩坂泰信 (名古屋太陽地球環境研究所), 高木俊治 (三菱総合研究所), 富田二彦 (通信総合研究所) の諸先生方を講師にお招きします。放医研メンバーによる最新のデータ紹介や問題提起も多く予定され, 最後のパネルでは「人類生存環境の未来」というテーマを生物系研究者も加わって討論する予定です。大勢の参加を期待します。問い合わせ先は放医研第3研究グループ (043-251-2111内線371) または同企画室 (内線233) まで。

32nd COSPAR Scientific Assembly

—40th Anniversary—

(12—19 July 1998, Nagoya, Japan)

この国際会議は日本地球化学会と共同主催になっています。現在, 宇宙地球科学に関する幅広い研究の成果発表の募集を行っています。

Abstractの締切は1998年1月9日となっております。

本国際会議の構成や, Registration, Abstractの書式等の詳細はホームページ

http://www.copernicus.org/COSPAR/COSPAR.html

をご覧ください。

Local Organizing Committee:

Dr. Nishida, The Institute of Space and Astronautical Science, Sagami-hara, Kanagawa 229, Japan

TEL: 0427-51-3911 ext. 2010

FAX: 0427-51-5381

E-mail: sunada@newsline.isas.ac.jp

までお問い合わせください。

第5回「環境と科学」講演会

——環境と物質循環——

表記の講演会は, 日本地球科学の共催となっておりますので, ご案内申し上げます。

主催: 日本学術会議化学研究連絡委員会

共催: 日本地球化学会ほか

協賛: 日本工業用水協会

期日: 11月27日(木) 10:00~17:10,

28日(金) 10:00~17:00

会場: 日本学術会議講堂 [東京都港区六本木7-22-34, 電話: 03-3403-6291]

交通: 地下鉄千代田線「乃木坂」下車, 青山霊園出口 2分

プログラム

第1日 (11月27日)

開会の挨拶 (10:00~10:10) (日本学術会議会員)

赤岩英夫

特別講演 (10:10~11:40)

化学物質の環境中での循環過程における生物への影響 (愛媛大農) 田辺信介

講演1 (11:40~12:30)

海洋における窒素の動態と微生物活動（東京大学海洋研究所）小池勲夫

講演 2（13：30～14：20）

海の働きと海洋汚染（国立環境研究所）功刀正行

講演 3（14：20～15：10）

大気物質循環と環境（東京大学先端科学技術センター）秋元 肇

講演 4（15：30～16：20）

リン及び窒素の生物学的除去技術（広島大工）大竹久夫

講演 5（16：20～17：10）

廃棄物と資源と環境（京都大宇環境保全センター）高月 紘

第 2 日（11月28日）

特別講演（10：00～11：30）

未定（東京大学生産技術研究所）鈴木基之

講演 6（11：30～12：20）

未定（農工大）土器屋由紀子

講演 7（13：20～14：10）

使用済み製品の再資源化と地球インパクト評価（東北大学）奥脇昭嗣

講演 8（14：10～15：00）

環境におけるダイオキシンの動態（摂南大学薬）宮田秀明

講演 9（15：20～16：10）

海洋の物質循環と気候（東京大学海洋研究所）野崎義行

講演10（16：10～17：00）

地球環境と炭素循環（東大院農）松本 聡

参加費：無料。資料代：5,000円（予定）

申込方法：はがきに、氏名、勤務先、連絡先（住所、電話・FAX 番号）を明記し、下記にお申し込みください（FAX も可）。資料代は当日会場でお支払い下さい。

申込先：〒141 品川区西五反田1-26-2

五反田サンハイツ304号

（社）日本分析化学会「環境と化学」講演会係

TEL：03-3490-3351、FAX：03-3490-3572

1997年度第2回「鳥居基金」助成 実施報告（TE-10）

氏名：金龍元（北海道大学大学院地球環境科学研究科）

助成：海外派遣（オーストラリア）

課題：5th International Carbon Dioxide Conference
における研究発表

この度、日本地球化学会より「鳥居基金」として資金援助をいただいて1997年9月8日から12日までオーストラリアのケアンズで行われた第5回二酸化炭素に関する国際会議（5th International CO2 Conference）に参加しました。

私は冬季に雪で覆われた土壌から生成された二酸化炭素が積雪を通して大気へ放出される量と、土壌と積雪中の二酸化炭素濃度の経時変化について発表しました。今回の会議に参加した研究者は約200名、研究発表件数は204件（10の分野で口頭60件とポスター144件）で、日本からの研究者は私を含め14名でした。特に、私は朝8時から始まって夜10時まで研究講演が続けられたことと、目が見えないオーストラリアの研究者が自分自身で OHP シートを見せながら口頭講演を行い、ポスター講演に対しても奥さんから内容を聞きながら質問していたこと等が非常に印象に残りました。また、ポスター講演の場合、大部分の参加者が研究内容を A1 サイズ1枚でカラー印刷し、講演に臨んでいて、手作りの私のポスターと対照的でした。しかし、私の手作りのポスターも味があってよかったと思います。

9月8日(月)、

初日は大気と海洋の生物分野の口頭発表があり、午後の歓迎レセプションでは熱帯ケアンズのきれいな青空の下で世界の有名な科学者たちと会う機会がありました。二日目は陸上の土地利用とモデリング分野の口頭発表が行われ、夜には月・火曜日のポスターについての討論が進行されました。三日目は二酸化炭素の肥料化、炭素循環と古炭素の講演があり、夜にはポスターについての討論が美味しいワインとビールを飲みながら行われました。四日目の午前中は海洋の物理の口頭発表が行われ、午後からは期待していたエクスカッションに参加しました。素晴らしい景色を持つケアンズの周辺を7時間かけて回り、熱帯雨林の中の奇妙な植物（Curtain Fig State Forest）や、きれいなクレー

ター湖や、美しい色をもつ鳥を見て皆歓声をあげていました。ケアンズの北部の小さな港でディナーが開かれ、イタリア風の料理で夜遅くまで食べ放題と飲み放題が続きました。私は仲良くなった参加者たちと写真を取って良い記念を残しました。9月12日(金)、最終日には陸上生態系と二酸化炭素の将来予測についての口頭発表を最後にすべての研究講演が終了しました。

今回の海外派遣は現在と将来の私の研究にとって意味深いものになりました。地球化学学会及び関係された各位に深く感謝いたします。

提出日：（1997年10月2日）

書 評

「裂ける大地 アフリカ大地溝帯の謎」

著者 諏訪兼位

1997年、256ページ、1,456円、講談社選書メチエ

アフリカ大地溝帯は東アフリカを6,000kmにわたって南北に貫く断層陥没帯である。約4000万年前に始まった大地溝帯の活動は現在もつづいており、そこでは大陸地殻が分裂して海洋地殻に転化する過程をかいま見ることができる。著者はアフリカ大陸の地球科学研究の第一人者であり、1962年のエチオピア地溝帯の調査以来、30年以上にわたってアフリカ研究に携わってきた。著者はすでにアフリカ調査の副産物として、歌集「サバンナをゆく」、画集「スケッチブック」を刊行し、幅広い趣味の一端を紹介した。本書は著者の30年にわたるアフリカ地球科学研究の成果を随所に取り込んでまとめた、アフリカ大地溝帯の解説書である。

本書は4章からなる。第1章は19世紀末にアフリカ大地溝帯を探検した対照的な二人の人物、地質学者グレゴリーと詩人ランボオの話から始まる。そして火山や地震を例に生きている地溝帯の実像に迫る。アフリカ大地溝帯の形成過程を解説した部分は著者も指摘しているように、かなり専門的であり、名古屋大学の研究グループによる成果が紹介されている。さらに人類発祥の地としてのアフリカ大地溝帯の重要性が述べら

れている。第2章では、アフリカ大地溝帯をさらに詳しく、専門的な解説を試みた。まず新しい地球観、ブルームテクトニクスの考え方にもとづいて、アフリカ大地溝帯の形成を考察している。ここでは地球深部に起源をもつ巨大なホットブルームの一つであるアフリカ超ブルームと、アフリカ大地溝帯の火山活動との関係を解説している。つぎにアフリカ大陸特有の火山岩であるカーボナタイト（火成炭酸塩岩）の発見から、成因に関する研究の歴史が要領よくまとめられている。そして名古屋大学におけるカーボナタイト研究の成果が紹介されている。そのほか、ケニヤのヤツタ台地にみられる特異な地形にふれ、大地溝帯に特徴的なアルカリ火山岩に見られる鉱物粒界の謎に迫る。

第3章では、最近の研究で明らかになったもう一つの大地溝帯、すなわち1億年前の西・中央アフリカ大地溝帯と、それに関連する話題をとりあげている。この古い大地溝帯はアフリカ大陸と南米大陸とを引き裂く運動によって生じたものである。ダイヤモンドの母岩であるキンバレー岩の噴出と大陸の分裂・移動との関係、キンバレー岩とカーボナタイトとの緊密な成因的關係などが興味深く解説してある。さらに大陸移動の具体例としてセイシェル諸島の研究を紹介している。また、大陸移動の前駆として大量に噴出したカルー玄武岩からなるビクトリア滝の不思議な生成過程や、サハラ砂漠南縁における深刻な砂漠化の問題にもふれている。第4章は短い構成で、アフリカ大陸における地質調査の方法やこぼれ話、そして最後に作家立松和平氏との対談「アフリカを往く」が収録されている。

本書は講談社選書メチエの中の一冊で、一般の読者を対象として書かれたものである。専門用語にはカッコ付きで解説も加えられている。しかし全般的にかなり専門的であり、アフリカ大地溝帯に関する専門書に準ずる内容となっている。図や写真も沢山とり入れてあり、かなりの数にのぼる参考文献や巻末の索引も大変役に立つ。アフリカ大陸の研究者にとっても、本書は一読の価値のある好書といえよう。

（名古屋文理短期大学 柴田 賢）

地球惑星科学関連学会1998年合同大会のお知らせ

地球惑星科学関連学会合同大会が1998年5月26日（火）－29日（金）に東京代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されます。来年は開催時期、講演要旨の電子投稿、投稿費の導入など講演の申し込み方が大幅に変わりますので、ニュース本号と同時に配付される連絡会ニュースをご参照ください。

地球化学会では下記のセッションを主ホスト学会として開催いたしますので多くの方の講演参加、ご来聴を期待します。【】内は各セッションのコンビーナです。

- Ag 揮発性元素の地球・惑星科学【佐野有司・塚本尚義・篠原宏志・田近英一・川本竜彦】
- Ca 対流圏エアロゾルとその気候影響【河村公隆・林田佐智子・北和之・中島映至】
- Cc 地殻流体の総合的理解に向けて【五十嵐丈二・岩森光・小泉尚嗣】

来年の大会は学会の固有セッションを原則的に設けず、共通セッションとして行う方針です。従来までの地球化学会固有セッションはなくなりますが、下記の共通セッションなどで広く講演を募集いたします。

- Cb 地球表層での化学過程と元素循環【石橋純一郎・中嶋悟】
- Mb 地球惑星物質の物理化学【神崎正美・河村雄行】
- Mc 岩石・鉱物・資源【今井亮・石川正弘・村上隆】

連絡先

石橋純一郎：東京大学理学部地殻化学実験施設

Phone: 03-3812-2111（内）4623 Fax: 03-3816-1784

E-mail: ishi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

中井俊一：東京大学地震研究所

Phone: 03-3812-2111（内）5698 Fax: 03-5802-3391

E-mail: snakai@eri.u-tokyo.ac.jp

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

今後とも従来と同様、皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー（マックもしくはDos/Vいずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしく願います。次号の発行は1998年2月下旬頃を予定しています。ニュース原稿は1月初旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

（編集担当 高橋和也）

編集担当者

高橋和也

〒351-01 埼玉県和光市広沢2-1

理化学研究所 核化学研究室

TEL: 048-467-9420

FAX: 048-462-4654

E-mail: kazuyat@postman.riken.go.jp

米田成一

〒169 新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館 理工学研究部